

5859

特 8

243

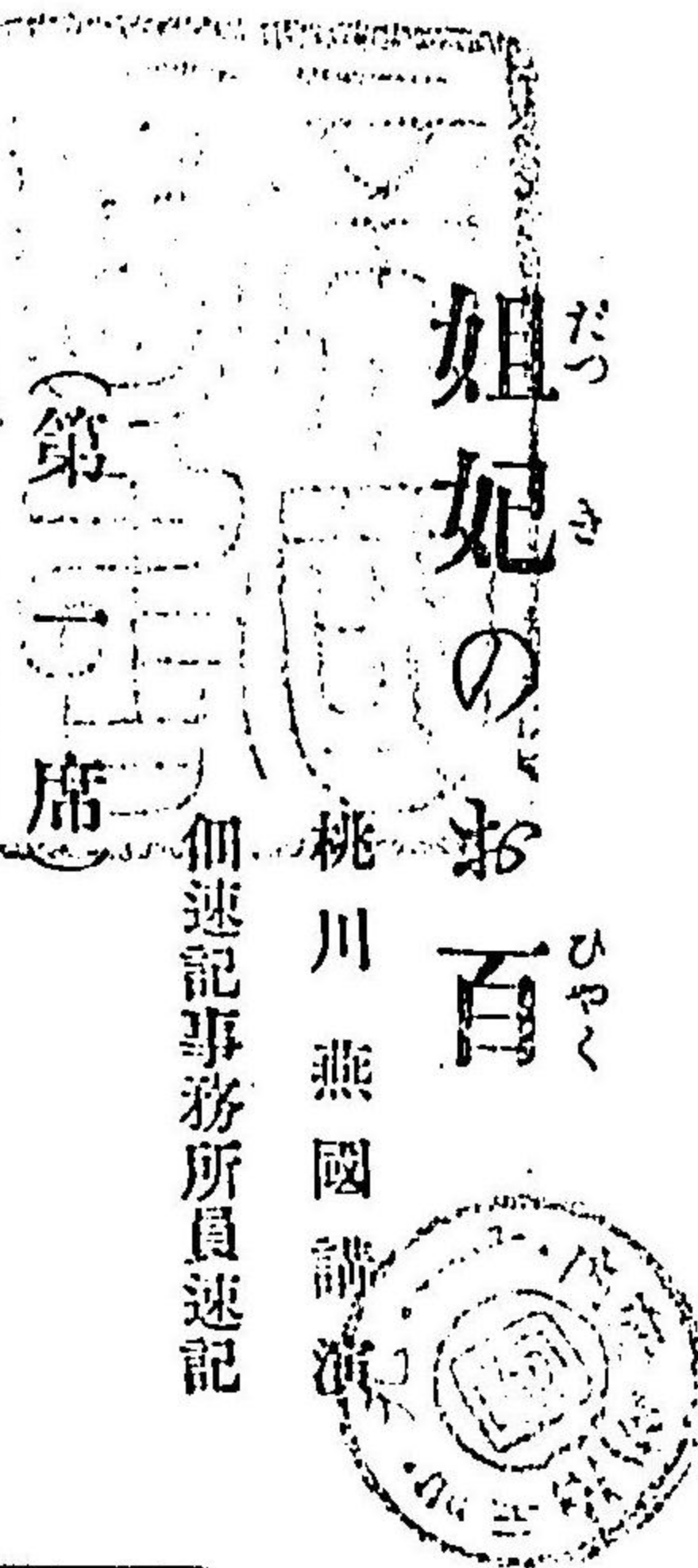
桃川燕國講演

姐妃のお百

鑛報社出版

百 お の 妃 姐

姐 妃 の お 百



桃川 燕國 講演
仰速記事務所員速記

三、如妃と名を取らされた佐竹家の妻に御座います
併し御名前は懼れ申上げません、只姐妃
のお百の傳とのみ御聞願ひます

蛇食ふと聞けば恐ろし雉子の聲
幹にとげありとも見ぬ菘蓴の花

とは此等の女子を指して詠みましたるものか實に恐
るべき悪むべき婦人では御座いませぬが終局に至り
まして善心に立復りましたる處は又お百の一つ特殊
のある所、其も發端は正徳の元年十月の三日で御座
います、出羽國秋田郡久保田城主佐竹侯よりの御難

し續きに相成ますが抑も佐竹侯の御家と申すは新維
三郎義光の後裔で、二百六十餘侯の中でも佐竹の御
家と云ふものは餘程御舊家と申すことで御座います
茲に先祖は勢州桑名の生れで桑名屋徳造と申す者が
御座います、船頭の方では氏神の様に心得て居りま
する千三百石積の雷電丸と云ふ親船を佐竹様より御
預り申し大阪藏屋敷其他等に廻米を致して居ります
る、徳藏は正徳の元年十月の三日に佐竹の御米を大
阪に廻しまする、船頭とは云ふものゝ佐竹様より御
客分で御扶持を頂き上下の中は幾分か御手當をも下
さるが御用廻米と申して南部の米を盛岡米と云ひ、
津輕の米を弘前米と申します、當時船が不用で居り
ますから御城下米を積込んで海上萬里の波濤を乗り
切つて大阪の藏屋敷に参ると申すので、十月の三日
に久保田の港を出帆致して越後の國新潟へ参つて暫

く風待を致し、それより風の都合も好く相成りまし
たのでグーッと走つて参ります、渺々漫々たる青海
原、長州の赤間ヶ關まで乗込んで来た、彼地から中
國の海に成ります、種々の難所も御座います、豊前
の小倉と長州の下の關との間、此を乗切つて参ると
今度は備後の兒嶋と云ふ所、此の備後の兒嶋と云ふ
は備後の三郎高德なんと太平記の中にも名前が出て
當時の世に慕いたる勤王の忠臣と見えするが其の
兒嶋の港に船が着いた、明け渡りますると海上は如
何にも平穩で遙かに遠近の山々が見えます、其風
景の美はしき實に言語に述べ難ない、船頭一同は徳
藏に對ひまして、一口に船頭とは申しまするが舵手
榎手炊夫爺夫なぞ申して船頭と云つても唯タ一人切
では御座いません、一同か「親方へ、出雲の松江の
沖を入る時は屹と一風雨かゝると思ひましたかマア

何事もなく乗込んでお互ひに御目出度うございます
「如何でげす旦那一杯……」と酒を供へて船神を祭
り残りましたる其酒を飲むと云ふが船乗の法で御座
いますから「サア親方一杯、船頭徳藏は銀の厚張り
の煙管でバクローリ〜と煙草を薫らせて居たが、徳
お前方が目出度エとツて祝をする所だから已も飲む
が、爰に一つお前方に頼みがあるが一番聞ては呉れ
めエか 一同「親方何でげすエ、頼つてエのハ、徳一
では無エが兵庫佐比江の港まで今日乗切つては呉れ
まいか 一同「エ、……今日は親方大晦日でげす大
晦日と元日と盆の十三日は日本中の河船の往來は兎
も角も、海上の往來は成りやせん、災難が有ると云
ふものか怪我があると云ふものか何か屹と凶事があ
ると云つて大晦日に元日と盆の十三日は船を乗出し
た者がござえやせんが、ソレをお前さんが乗切れと

云ふは何と危険じやアがアせんか 徳「お前途が言は
ねエでも已も俄鬼の中から船頭をやつて居るから、
大晦日に元日と盆の十三日の危険位エの事は知つて
居る、ダが天一天上の口を擇んだから難船は無エ、
黒日に乗出したから屹度難船すると云ふ定則もある
めエ、天一天上の口を擇んで乗り出した船に凶事が
あり、次第に依ては黒日でも乗出すめエものでも無
エがソレがサ着する事もある、一寸先は闇の世だ、
戸外に出ては怪我もしず、却て家に居て怪我をする
こともある、して見やア戸外へ出たから怪我した
と云ふ譯もあるめエ、總て危険と云やア何事も皆な
危険つて出るも引くも出来るものぢやア無エ、板子
一枚下ア地獄の世渡り、波濤の音を念佛に極樂淨土
へ一足飛び、親船乗をして居ながら其様な此様なを
恐れるなら親船乗はしねエが宜いはず、唯行て呉エ

とでも云やア無理かも知れねエが、定めの外は貨錢
三兩宛を遣らうと云ふのは、唯た三兩、貰ふ方ぢや
ア不足もあらうが出す方ぢやア十三人に三十九兩、
儲ける儲けねエは此方のことだが、何うだ一番荷擔
つては呉れめエか 一同「本統だ親方、天一天上の日
に乗出した船に何事も無エ事もあり黒日に出したか
らつて必ず難船があると云ふ譯でもあるめエ、三兩
の金が定めの外に手に入りやア娘に帯の一本と小兒
に着物の一枚も着せられやう、其上幾許か残して持
つ歸つて併でも搦て遣りやア留守をして居る娘や小
兒も喜ぶだらう、ヤア遣つてけべエ「オ、遣つつけよ
う「へエ親方遣りやせう 徳「サウ氣が揃やア重疊だ
」と此より纜を解まして遙々の海上を又々乗出し
ましたか風は好し大阪行には最上の追風、四十二反
の白地に黒く扇の紋染出せし帆を十分に揚げました

ることで、水夫は多勢上乘は三人、桑名屋徳藏は始
終號令をかけて、面楫よ、取楫よ、と氣勢を厲まし
て波濤を破つて走つて参ります、三備播磨五ヶ國の
海を真直に乗り込んで参りましたが風は好し八合日
和と云ふ日和でございます、八合日和と云ふのは極
々潮がさして十分に帆を揚るやうでは船が思ふ様に
は走れない又た六合位では風が好つても何うも危
険い、そこで八合は程が好いと云ふので船頭が寄合
て喜ぶと云ふのは八合日和にございます、追風十分
で御座いますからシエーツと走つて参りまして攝州
の灘までは御断しはない、攝津と播磨の間を指して
参ると櫻の灘と云ふのがある、此灘は尾上の鐘か海
上四十二里鳴り渡ると云ふので櫻の灘と申すとか能
く人が申します、ソレにグーツと乗込んで来た、
ルと船がギーンと風に逆つて啼く、乗合船頭驚いた

「ヤア船が風に逆つて呻り初めたぞ、と騒ぎ出した
したから船頭徳藏も船頭に出て見ますと成程船は
風に逆つてグーツと右に曲ります、此が世に云ふ海
妖とやら海魔とやら、時々渡海の妨害を爲すさうだ
が此が船に懸つたナと思ふと徳造、佐竹様から拜領
の國俊の脇差を抜き放つて、臨兵闘者皆陣列在前と
縦横無盡に九字の眞言を唱へますと、不思議なる
哉、口咒の徳なるか廻つた船が舊の通りにグーツと
眞直になります、一同にも元氣を恢復したる事で段
々に兵庫佐比江の港を目指して参ります「確りしろ
「シツかりしろエ、港か近いゾ」と一同に氣勢よく
進んで参ると道は如何に海上の目指す前面へ大きな
山が一時に出来た 甲「ヤア親方…… 滅法大きな山
がありすが、度々上下をする此方等か山が有るの
を知らぬエ筈もねエ 乙「如何にも大きな山だ 丙「此

れも世に云ふ海妖とやら海魔とやらか……」
「ソレ
だから親方大海日なんぞに船を出すものぢやア無エ
と云ひましたのは此所の事で御座います」と云はれ
て流石の徳藏も驚とした 徳「此の山があるからは急
に帆の手を下すばなるめ二十分に帆を張て、打つけ
た日にやア船が微塵になるばかり……」
「クカ併し此處
に嶋の有る氣支は無エ、昔孝靈天皇の五年に駿河の
富士と近江の琵琶湖とが一晩に出来たなどと云ふが
今は其様な馬鹿な事を云つても聞かぬも無エ位のも
の、山の有る謂れは無エ、突かける、目に見ゆるだ
けの事で眞實の山じやア無エに相違ねエ、万も眞
實の山で有て船が破損でも殿様から又拵えて下さる
から宜いが命に掛替は無いから氣を附る、サア突か
ける」
「同親方さんの言ふ通り合點でござんすと雷
電丸は箭を射る如くにブーツと乗込んで来ると山の

中を船が通るぞ」矢張りソレが斯様に見ゆるので御
座います、魔物奴が斯う氣を引て見せましたのだけ
ら氣性勝れた徳藏は頭太くも乗込みましたる事で、
其儘に佐比江の港へ船はド、ド、ドと着きまし
たから一同もホツと息を吐きして 皆「親方へ、モウ
幾許になつても元日に盆の十三日と大海日は船は
出しやせん、船が廻つてギーツと云つた時にア三年
命を縮めて、大きな山が出来た時に縮めた命が三年
で都合六年縮めて仕舞つた……モウ電丸ア天窓に飛
上つたから以來はお断りですが、と飲み残しの神酒
を飲んで勞れたから未だ夜明けには早いと云ふので右に
ゴロリ左にゴロリ前後も知らず眼についた、誠に
怪力乱神は語る勿れで甚だ怪しい事では御座いま
すが既に芳醇雜誌にも越前越後の間の海に斯様の妖
怪が澤山あり中國筋にも何か海坊主と申すやうな奇

ることで、水夫は多勢上乘は三人、桑名屋徳藏は始終號令をかけて、面楫よ、取楫よ、と氣勢を厲まして波濤を破つて走つて参ります、三備播磨五ヶ國の海を真直に乗り込んで参りましたが風は好し八谷日和と云ふ日和でございます、八谷日和と云ふのは極々潮がさして十分に帆を揚るやうでは船が思ふ様に走れない又た六合位では風が好つても何うも危険い、そこで八合は程が好いと云ふので船頭が寄合で喜ぶと云ふのは八合日和でございます、追風十分で御座いますからシューツと走つて参りまして播州の灘までは御断しはない、攝津と播磨の間を指して参ると響の灘と云ふのがある、此灘は尾上の鐘か海上四十二里鳴り渡ると云ふので響の灘と申すとか能く人が申します、ソレにグーツと乗込んで来た、ルと船がギーと風に逆つて啼く、乗合船頭驚いた

「ヤア船が風に逆つて啼く初めたぞ、と騒ぎ出したから船頭徳藏も船頭に出て見ますと成程船は風に逆つてグーツと右に曲ります、此が世に云ふ海妖とやら海魔とやら、時々渡海の妨害を爲すさうだが此が船に懸つたナと思ふと徳造、佐竹様から拜領の國後の脇差を抜き放つて、臨兵闘者皆陣列在前と縦横無盡に九字の真言を唱へますと、不思議なる哉、口咒の徳なるか廻つた船が舊の通りにグーツと真直になります、一同にも元氣を恢復した事段々に兵庫佐比江の港を目指して参ります「確りしろ」「シツかりしろエ、港か近いゾ」と一同に氣勢よく進んで参ると道は如何に海上の目指す前面へ大きな山が一時に出来た「ヤア親方……滅法大きな山があります、度々上下をする此方等か山が有るのを知らぬエ等もねエ」如何にも大きな山だ「丙」此

れも世に云ふ海妖とやら海魔とやらか……「ソレだから親方大海日なんぞに船を出すものぢやア無エと云ひましたのは此所の事で御座います」と云はれて流石の徳藏も驚とした「此の山があるからは急に帆の手を下すばなるめ十分は帆を張て、打つけたおにやア船が微塵になるばかり……」グア併し此處に嶋の有る氣支は無エ、昔孝靈天皇の五年に駿河の富士と近江の琵琶湖とが一晩に出来たなど云ふが今は其様な馬鹿な事を云つても聞かぬも無エ位のも、山の有る謂れは無エ、突かける、目に見ゆるだけの事で眞實の山じやア無エに相違ねエ、万も眞實の山で有て船が破損でも殿様から又拵えて下さるから宜いが命に掛替は無いから氣を附ろ、サア突かける」一同「親方さんの言ふ通り合點でございますと雷電丸は箭を射る如くにブーツと乗込んで来ると山の

中を船が通るぞ」矢張ソレが斯様に見ゆるので御座います、魔物奴が斯う氣を引て見せましたのだから氣性勝れた徳藏は頭太くも乗込みました事で、其儘に佐比江の港へ船はドッ、ドッ、と着きましたから一同もホツと息を吐き出して「親方へ、モウ幾許になつても元日に盆の十三日と大海日には船は出しやせん、船が廻つてギーツと云つた時にア三年命を縮めて、大きな山が出来た時に縮めた命が三年で都合六年縮めて仕舞つた……モウ罪丸ア天窓に飛上つたから以來はお断りですが、と飲み残しの神酒を飲で勞れたから未だ夜明けには早いと云ふので右にゴロリ左にゴロリ前後も知らず眠についた、誠に怪力乱神は語る勿れで甚だ怪しい事では御座います、すが既に芳譚雜誌にも越前越後の海に斯様の妖怪が澤山あり中國筋にも何か海坊主と申すやうな奇

妙なものか居ると言ひますが、此奴が海上の害を爲して成らんと云ふ、陸地なれば狸でも御座いませうか例の大入道の姿を現はして見たり美しく女の姿を致したり杯して見せませうで、今の海どても決して斯様なものが無いとは言はれません海上の屋敷樓なせと云ふ御話も幾多ございませうが、併し其の海坊主と申すものは何うも確乎たる証據を擧げまする譯には参りませんで其義は偏し御察し置きを願ひたら御座いまする、徳藏に於ては行燈を揺き立て讀殘しの本を讀んで居るとボロンと波に響ける鐘の音は百八煩惱を洗ひ清めると云ふ如何さま是は一年の境界ですから諸方の寺から撞き出したものと見ゆませす、其の昔は大晦日から右の鐘を撞き初めて撞き止んで夜が明る、サア元日と云ふ譯で、ソレ故に鐘撞の今年に下る階子かな

撞切つて夜が明ける元日と云ふので、唯今では夜中にドーンと一發だけで、徳藏はウトウト未だ眠にも就ませず夜明け程もあるまいと思ふ頃、後の階子がズーツと開くかと思ふと麗さい風がブーンと吹て来た「ハテ不思議な麗さい風だ、と思ふとニエーツと眞黒な眼も鼻も口も無い何だか鯨を天獄羅に揚げた様な奴が水掻の附て居る手を出して、海坊主「徳藏怖エか」徳藏はこれを見て「ナニ怖エ事があるものか、世の中に怖エものは借金取と馬鹿と雨漏だ、其外に怖エ者は無エ板子一枚地獄の世渡をする徳藏だ、何だ智慧の無エ化け様を爲やアがつて其な化け様ぢやア三歳も魂消やアしねエぞ、コウ新造にでも化てあッさり遣て呉れりやア次第によつちやア義理にも怖エと言つて遣らア、野篋本がナニが怖エ」斯う言放たれては化物も仕様が無い「海」斯うしたら何う

する」と頰筋を力任せに握みましたから抜撃にスカーリ……側に置た國俊の刀で二つに成れと顯顯の邊から切ら下げました、切たと思ふと忽ち姿は掻消す如く水の音のみがボーンとブーリ、船頭一同は「親方へ、何でげす今の音は、徳一「夜が明りやア解る事だ、騒がずに寝て居ろ、其の内は夜が明け、鴨がガア〜ガア〜と夜明けを告げる、甲「ヤア、親方大層血が吐てありませうが何んで……」徳「何んでも宜い、早く血を拭いて米を揚げるよ」甲「麗い血で、黙って拭け」ドン〜ド〜ン〜米を賣拂ふと四百八十兩儲かつた、だからさうも航海業は損もしませうが儲けも致しませう、其金をば船頭どもに與へ、徳藏は圖らざる幸福を得ましたのです、御話し變つて大阪中の嶋の徳藏宅では主人が家に居

る時は五人八人の乾兒の居ない事はありませんが、又居ない時は人ッ子一人居ません、處が徳藏の女房と云ふのは中の嶋の中で以前は小房と云つた藝者で纏致も好し聲も好し藝も好しと云ふ評判のあつた武藏屋の小房、此れを身受して女房と致しました、冷性を見て一人も子供か出来ません所から親戚から養子を貰つた、徳之助と云ふ今年丁度十一の大晦日明波元日か丁度十二才、徳之助「阿母さん阿母さん阿父さんは何時歸つて來なされるだらう、お房「左様よのう、親父さんは廿日正月が過ぎなければ歸んなされるまいよ、徳「阿母さん何だか雨が降つて來ました子、お房「左様だねエ、ポツ〜音がする様だ、今夜は何だか淋しいから寐ませう、お前の好なお汁粉を……と船神明神様へ供へましたお餘りを汁粉にして食べて居りまして、お房は戸外の潜戸を閉め様と出

掛る途端に、キヤツと其れに倒れましたから徳之助は這て、徳一、阿母さん、氣を確にして、と呼びました。身を顛はしまして苦しむは女子に有り勝の癪と見えする。徳一「阿母さん確かりして下さい」

「貴い息子の徳之助は獨りで介抱して居りますと戸外に「按摩ア鍼一……」戸外を按摩さんが……

「按摩さん早く早く……私一人では仕方無い早く手傳つて下さいヨ、早く……」按摩「ハイ」御呼びなすつたのは此方様でございますか、とグハラリと開し入つて來ましたのは背の高い色の黒い眼は飛出して血を懸たやうな可厭な按摩です。按摩「御病人様は阿母さま……」徳「癪を起したんだよ、早く何かし……」

「お呉れ……」按摩「ハイ、イヤ御女中さまにはどうも有りうちの病、何うも陽氣が悪う御座いますから癪氣で御座いませう、今私しがシツカリ押へて進せ

ます、エ、御癪には是非此の塊が出るもの、結局此を揉み解しません所から長く積くので、エ、御心配なさるな私しが經絡を悉皆揉んで癒します……お神さんへ揉みだばかりぢやア根が残つて可けませんから鍼を打て上ませう、と段々に鍼を打て参りますと臍の下に丹田と云ふがあります、此が一番人間の身体にて大切の所ですが此へボーンと鍼を打ちますと五体に應へたものと見えて「オ、痛ッ、とお房は叫びました。お房「按摩さん大變痛かつた何う云ふ所にお前鍼を……」按摩「エ、アレは丹田と申して人には大事の所で、ソレが痛癪の虫の頭と云ふことで、慈るにして毎も押へて置きますものですから好ません斯うやつて鍼を打て置ますれば根ツ切り業、切り病ツ切りモウ癪の起る氣遣は御座いません。お房「お前は餘り此の近所には見掛けないが近頃大阪に來たの

かエ「按摩一エ私しは攝州兵庫の者でございます、松の内は毎年〱元日から七草まで此處に居りまして松が取れまして兵庫に歸ります、御客の方でも待つて居らつしやいまして私しも何となく來なければ心持が悪い様で、御快よくば此を御縁として毎年參りますので御最負に願ひます、此方は確か佐竹様の御用廻米徳藏方の御宅でした。お房「ハイ」按摩「貴婦は徳藏さんのお家内さんか、私は兵庫の波の市に申す者で兵庫では黒坊主と云つても解をませ好い折柄に御眼に懸りました、へい御大事に」と世辭を云つて戸外に出る、徳之助は如何とも怖いから戸外の方に屈んで居たが按摩が歸ると慌たしく駆寄つて唯願へて口も利かせん、追々夜も更にするから徳藏女房、忤徳之助と枕を並べて夜の明るのを待て居りませると突然に「キヤツと云ふお房の叫び聲。徳一

「イエ、またア又御癪か」と親孝行の徳之助は消かゝる行燈を揺立て母親の顔を見ますと、モウ絆が断れて居る。徳一「エ、お母さん、氣を確にヨイッお母さんと抱上げやうとするとベツタリ手に觸つたものが有るから燈光に透して見ると鮮血。徳一「ア血が……」と熱く視ますと、丹田の鍼打が破れて大腸の腸流れ出て、邊一面の血は、徳一「ソレは今の按摩の打たれた鍼か」徳之助「扱は、と思ふ途端に「按摩ア」鍼の聲が「……」徳一「エー彼の按摩が」折から戸外の戸をドン」徳一「今歸つた、お房今歸つたよ。徳一「オ、お父さんが歸つて、と引入れて容体を物語りますと、徳藏は始終の話を聞いて吃驚。徳藏「成程今入れ違ひに眞黒の坊主か見れたやうであつたが、さては兵庫の船中で斬殺した海坊主が早くも我家へ來つて祟りをしたと見ゆる」嗚呼人の魔せと云ふ

百おの妃姐

事はするもんぢやアねエ、元日と大晦日盆の十三日は決して海上往來はするもので無エと云ふ事は聞て居りながらも其を推して慾の爲斯云う結構な女房を苦み死に殺して仕舞つた、縦令男と云はれても最愛の妻や子を亡しては何にもならねエ、其も此も慾からの事、實に人間の慾は淺狭い物は無い、慎むべきは慾である、此から先は板子一枚の生計は出来ぬエ、又た爲る氣も無エ、と頻りに無常を感じて居ましたが遂に佐竹家より頂戴の十人扶持を返上致して自分は此より髪を剃して因果は廻る車の如くで有ると云ふ所から名を車禪房と改めまして何處と云ふ當もなく廻國修行に出でます、御話變つて此方では徳藏が出て行く跡では御扶持は悉く佐竹家に御返上しまして、鴻池に預け置たる銀子、此を取戻して尙後來の事共を頼で身を雲水に委せましたるから

桑名屋の粹徳之助、元服致しまして後に河内屋太郎兵衛の娘を娶る其名をお高と云ふ、廻船問屋太郎兵衛、人呼んで河太郎と申す、徳之助其娘を貰ひまして自己は名を桑名屋徳兵衛と改め、十二歳の時に親父に出られましたから今からは何を爲ると云ふ事も御座いませんでした矢張、親父の跡だから、と云ふので持船の古いのには手入修履も致し、新明神丸に若松丸と云ふ二艘の船を買取まして廻船問屋を始めますと大層繁昌致しまして夫婦仲も好く家富榮れて参ります、夫より享保の八年までには何もお嘲は御座いません、享保の八年は丁度徳藏が海坊主を斬りましたる十三年に當りますから徳兵衛に於ては親父徳藏の家出してより十三年、母お房の年忌にも當りますから御出家を呼んで心ばかりの追善をもし近所の者をも招きまして精進料理ではあるが何

百おの妃姐

か取集めた御馳走を致し出入の者にもソレ相應に手當をも濟して徳ヤレノ形ばかり法事でも此で清淨した、モウ斯う成たら好からうお父さんがアノ腰物は昔佐竹様から拜領の品で勿体ないから決して指では成らぬ、と被仰たから佛壇の下に投り込ではあるが何時までも塵に埋らして置くのも……と云ふので、桑名屋徳兵衛、何の氣なしに取出して引抜で見ますと、不思議なる哉刀尖よりして線香の煙のやうな氣がズツと立ち昇りました、是にて海坊主の悪念が全く去つたものと心得ましたがナカノ去る所ではなくして徳藏の子孫に祟ると云ふ是が抑も發端の御話に相成ります、

(第一一席)

大阪に雑魚場と云ふ處があります、新川と云ふ魚河岸で雑魚場の新助と云ふのが、東都ならポテ振

を致して居る身分、併し御當所のは身装もキリ、ツと致して居るが大阪の魚屋は何となく先づ賣方からして可笑なことを申します、ソレは餘事ゆゑ澤山は演べませんが刺身のことを造り身、飄飄引のテ、と云ふのは鯛の新しいのと云ふことです、此の新助と申すは廿五で妹は十三になりましてお百と申す、此のお百唯縹緞の好しい計りでなく心掛も素直で優しい娘、今は兩親とも死果ました……最も此のお百は父親が二度の妻を娶つた時の連ッ子だが其は名計りで實の兄弟よりも親しく、新助もお百やノと愛して居りますから不血族をる兄妹だ杯と見えません、お長屋の衆も實に羨ましいと云ふ程に褒て居る、此の十三になるお百、恰度享保八年の十二月大晦日の夕方の事でございます、油さしを持って油を買ひに往き其の歸路に自分の家の路次口に入らうとす

ると薄暗い壁の隅にボーツと何やら立て居る、色の黒い否ア坊さんがベツタリ壁に寄懸つて起て居て坊主「お前は新助の妹のお百坊だらう お百「アイ坊「叔父さんに坊の身体を少し貸してお呉れ 百「アラ否な叔父さんだ、とバラ／＼と駈け出すと後から猿轡を延して首頸を扼んで引反される「キヤーツ」と云たなり其儘倒れて生氣を失つた、家へ居た新助は妹がモウ油を買って歸る時分だと上り端に行燈を出し太い燈心を入れて待て居たが歸つて来ない、スルと、キヤツと云ふ聲が聞えたから「ハ、ア犬にでも追れた事かど出て見ますと油注は向ふの方に轉つて去郎さんの犬と次郎さんの犬かペロ／＼紙て居りお百は其處に顛倒つて氣絶して居りますから驚いた、此から長屋の者も大勢出てども／＼介抱致しまするとお百は漸く眼をパチリ明た 皆々「お百さん氣

が附たかエ 百「ハイ……モシ其處に厭ア坊さんが居はしませんかエ 新助「イ、ヤ何も居はしない 百「今子色の黒ウ坊さんが其處に立居て私か油注を持つて歸つて来ると其坊さんが、お前は魚屋の新助の妹のお百坊ぢやア無いかと云から、アイと言ふとテ、少しお前の身体を貸して呉れッて……ア、厭た餘り怖くなつたから私か逃出さうとするど首筋をコウ捉まへて……恐ろしいと思つたからキヤツと云たと迄は知つて居りますが、其先は些ども覺わがもありません 皆々「其やア大方風の神か疫病神でも有らうから今夜わたりは熱でも出るかも知れぬエ、マア風呂に行くのは止たが宜からう」などと申しましたが其儘で別に熱も出ない、外に變つた事も御座いませんでしたが、三日ばかり経てから「私の身体は斯ナ悲か出来たが兄さん可笑ぢやアありませんか」と

見せものを見ると右の肩から捲り上た腕まで赤い痣が出来た、是か一ツの不思議、併し此の不思議と致した痣によりて此が証據で後年橋場の総泉寺でお召捕に相成る 新「何だらう此りやア大方引抓れた疵であらう、日柄も経たら癒るだらう」と言聞せて妙な痣だと思つたなりに此年の暮まで何も御断はございません、其翌年の事でございます、前申上げましたる廻船問屋の桑名屋へ或る日右の雜魚塙の新助は参りまして台所の障子を開て 新助「今日は、何か御用は…… 高「魚屋さん一寸待て下さい 新「ハイ 高「今御客様が御出でに成て料理屋に訛へ物をした處が待ても／＼御着が来ないので、二度計り使を遣たが未だ持つて来ない、大層繁雜て居ると見えて家でも困つて居る處だから刺身があるなら二人前大急ぎで……」畏まりました、と新助は直ぐに二人前を造り

まして 新「ハイお刺身が出来ました、と其處で御飯を貰つて「有難うございます」と魚屋の新助は歸り掛ると 高「オやお前は新助ぢやア無いか 新「此れは／＼申譯もおまへん、すツかり變つて居やはりますさかい、見ても一寸と解りまへんでナア、貴婦はんは泉州界の河内屋の令嬢はんでやすか」關東では御嬢さんですかと云ふ處を關西では令嬢はんでやすかと申します 高「私は彼の河内屋の…… 新「ヨイマア御立派な令室家はんに成らしやツた、私はナア貴婦の御家へ十八の年まで奉公してしやツたが猶且魚屋の子は魚屋で、蛙がお玉杓子を産んで已は龍を産んだと喜んで居たやら成長くなつたら矢張り己の子は已に似て居ると言たと云ふ聲があるが、魚屋の息子は魚屋に成て居ますが、マア令嬢はんナア、好エ令室はんはんに成しやつたナア、ろして堺の海嘯の時にマ

ア好う助かりなはッて……ソソテ跡のお方さんはエ
 ……ヘーエ御兄弟と御親類も……ヘーエ、まア何と
 も申さう様も御座へん事で、ヘーエ……其りやア左
 様と何卒マア又此れから毎日來ますでナア御惣菜物
 でも御用を御願ひ申します」と言つて新助は其日は
 歸つたが此より毎日出入を致して居ります、或日
 の事でございましてが新助は例の如く「今日は、と
 言つて桑名屋へ参ると女房のお高は端近く出て参り
 まして、高、新助さん附ぬ事だがお前の得意先に十四
 五に成る三味線も弾き一寸手踊の一つも踊れて、餘
 り下品でない女の兒を小間遣に置きたいと思ふのだ
 が有るなら世話をしてお呉でないか、と云ふのは子
 私共の商賣では鴻池さんを始め常々御最負になる歴
 々の衆も折節見ゆる其時に毎も御酒を上るが其の御
 座敷には御酌人も無ればならん、ソソには立入た事

だが手藝妓杯を呼ぶと手當も十分にせんければ成ら
 ぬからドウか其代りに程の好女兒を家に雇つて置
 たいと思ふの、何だらう御客様の御好みだと踊も一
 寸出來て三味線も引け何家の御嬢さんと云ふ令室粧
 にして御酒の御酌をさせる奇麗な娘はあるまいか
 「ハ、ア、令室はん、私の口からは申し悪いが私の
 妹にお百と云ふのが有りまして、今年十四で御座い
 ますが近所の衆も好い縹緞ヒやと斯う褒て下はりま
 す、私の眼から見ましても十人並の相場よりは少と
 好やうに見えますが何うでございませしよ、私が貴婦
 の御器家に御奉公致しました御縁を以て差上りました
 いと思ひますが、妹と云ふても内々は義理ある中ゆ
 る何時迄も家に遊ばせて置きますと近所の口も八釜
 しようござりますで、ドウか何處ぞに好口が有つたら
 と丁度思ふて居る所で……高、オ、其は此方でも恰

度好い、それではお前其の妹を遊ばせに遣しナ 新
 イエ遊ばせ所では御座いません何うか此つて御遣ひ
 成されて」と新助は十四になる義理の妹お百を桑名
 屋の家へ伴て参つてくれくれも女房お高に頼み込で
 歸りました、此が桑名屋に仇なす根源とは神ならぬ
 身の誰も露知らぬ、お百は十四の年の暮で、明て十
 五に成りますると日陰の豆もはじける頃、況てや怜
 惻なお百ですから美しい縹緞か猶一倍美しく見え、
 途に主人徳兵衛は手を附けて幕所や土蔵の二階で密
 かに咄をする事もある、阿漕が浦に引く網の度重な
 れば顯れて本妻のお高の眼にも入りませすけれどもお
 高は誠に結構な氣質で格無嫉妬と云ふ様な事は露は
 かりも無いが、女も下等社會には寄ると障ると嫉妬
 喧嘩の有るもので毎度新聞杯にも不休裁の醜聞が現
 はれ升、されば女も男も慎むべきは嫉妬の念で實に

恐るべきの一つで有るが、ナンボ氣質の好い女でも
 人間ですから此をお高が見たり聞たりするのが度重
 なるに餘り心に面白くも無い底を貸して本家の叱咄
 の通りでこんな詰らない話はない、高尼の文句にも
 ある通も泣いて明さぬ夜半とてもなし、此情煩を消す
 ためには先祖の墓所で愚痴を並べるより外はない、
 そこで両親や兄弟杯の菩提の爲にチヨツ、と泉州
 堺の御寺に詣ります、今日も小僧を伴て参詣に往く
 實家は海嘯で死絶て誰も居りません、既に前にも申
 す實に氣質は結構な優しいお高、何でも自分の衣類
 から帯から頭の物まで似合しい物はお百に皆な遣て
 有るので御座います、お百の方では又彼の女房を
 逐出して未だ残つて居る那の衣物は斯うして、斯
 う取らうと云ふ様な、大悪心、海坊主が魅て居りま
 すから、今までの柔和とはガラリと變つた、外面如

菩薩内心如夜叉の此の毒婦の生育で御座います、恰
 とお百の十七の正月三日の日に藏前の小座敷に酒機
 嫌で當家の主人徳兵衛が好い心持に寝て居ります、
 處へ「お百旦那へ〜」徳兵衛「何んだ」「アノ鴻池さ
 んが御年頭に「徳兵衛、オ、左様か、ナゼ起さなかつた
 百「イエ御起し申さうと思ひましたらイヤ〜御起
 し申すには及ばん春永に又緩くも伺ふから、今日は
 ホンの年始迄に参つたのだと被仰つて御年玉を置いて
 御出で遊ばしました、徳兵衛「ア、左様か、ウ、好
 い心持だつた、モウ彼是れ日が暮れ様かナ、お高は
 何うした」「未だ令室は御歸りに成りません」「徳兵衛
 寺詣りに行くど何時も遅いがナア……オヤ何だ貴様
 泣顔をして、正月の三日から泣く奴があるか止さつ
 しゃい」「百「何卒旦那、私は御暇を……」徳兵衛「今迄
 機嫌好くして居たのに急に暇を呉れとは一向解らん

ぢや無いか」「百「御奉公して居る日に成りますと貴郎
 の御爲に成らん事があると御耳にも入んければ成り
 ません、入れますと又令室を讒言するとか陰言を言
 ふとか何うも私が怨まれる様な事に成ります、たか
 ら寧ろ私の身を引くより外に仕方が御座いません」
 ナンだア」「百「眞に貴郎はお痛しい事で……」徳兵衛「フ
 ー、何だつて」「百「何にも知らないで居らつしやるから
 お痛しいと思ふんです」「徳「ナニ、何だつて……」百「
 去年の暮行方知れずに成りました番頭の善兵衛子、徳
 「オ、善兵衛」「百「彼人と令室と、貴君が備後の尾の
 道に何時ぞやソレ廿七八日御逗留になつた事が御座
 いました子」「徳「オ、有た」「百「アノ後で御土藏に御吸
 物椀を片附る時番頭さんと細君か何の御咄しか知れ
 ないがゴト〜」咄をして居らしやつたが、私の姿を
 見ると急に番頭さんは下て来る、其から以來は令室

の調子がガラリと變つて貴郎の居る前では彼のマア
 猫撫聲で「お百や」杯と被仰るが出て御仕舞なされると
 私を打たり殴いたり一々云ふ日に成りますとモウ數
 へ立られさせんから辛抱して居ました、モウ貴郎
 も御承知でせう、折々佛參だ〜と言つては泉州堺
 へお出でです、アレは其の善兵衛さんを彼方の方に
 置つて置てお寺詣に托附ては其の善兵衛さんの所へ
 行て情話をして入つしやる事と私は存じます、徳
 「フーン……彼の音吉は……」百「音吉には何か鼻薬
 でも興てあつて彼ナ盆桶した男ですから平氣に令室
 と一緒に歸つて来るのでせう」「徳「フーン成程左様云
 ふ事が世間にもある、畜生奴ド、ドウするか見やが
 れ」と秋風の吹て居る處へ氣に好て居る愛妾同様の
 お百に煽動られましたから堪りません、一途に其れ
 と思ひ込だので、可哀想なのは此方のお高、飼犬に

手を噛れた様な目に遇たのだから口惜つて〜堪り
 ません、服紐も悉皆自分の衣服を縫直して遣て頭
 飾の道具から何から何迄不足なく呉て遣て、外に出
 る時に自分で帯をも締直して遣ると云ふ位にして居
 る結構人のお高だから口では何とも言せせんが心で
 泣て居る、好く世間にも有る事です右の飼犬に手を
 咬れると云ふ事、實に當人は腹が立て傍から見ると
 氣の毒なもので、モウ日も暮れ掛りましたることで
 歸つて参りましたるお高は、静かに手を支へ、お高
 旦那様只今歸りました、大きに遅く成りました、恰
 度懇意の者に遇まして其是れの咄しに手間取まして
 「と云ふ撥揆をも待たず徳兵衛は「徳「フーン此處で
 は談話が成らねエ一寸と二階へ來い」「高「アラ旦那様
 へ何か御用で」驚くに掛はす遽だしく手を執まして
 土藏の二階に引摺り上げ、徳「汝知るめと思ふが好

百おの姫姐

くもく亭主の面に泥を塗りやアがつたナア 高「ア
 レマア貴君、何で私が…… 徳「白らくしい歌りや
 アのれ、巳の尾の道に行た後、去年の暮に金を盗ん
 で逃亡した番頭の善兵衛と汝密通りやアゴツて、小
 間使のお百に見附ツて 高「マアどうも此は驚きです
 よ……お百くお百や……お前何だぞ私と善兵衛と
 …… 百「アノ令室へ、隠れたるより願もくは無しと
 か申すすよ、モウ仕方有りやア仕ません、真直に
 言て御仕舞ひ遊ばせナ 高「此は何うも……是は仕た
 りお百」結構人のお高も腹に据へ難て立上る「ナ
 ニ仕やアある、と徳兵衛が横顔をかカーリ、ガツク
 リと前に俯倒ますお高をグルく巻に縛り上げ猿
 轡を箱て土藏の梁に吊しわけました、其上に猶他足
 でか可哀想にも撲てく撲据へた、妊娠で居るのを
 撲れましたから溜ませせん、お高はウンく呻る

計り死なば死ねよ、とお百と徳兵衛は土藏の二階か
 ら下て参つて八疊の小座敷で酒宴を始めました、處
 へ歸つて来たのは能登の七尾から奉公に参つて居る
 飯焚の佐吉、忠義者のことで塵片一本も危末にしな
 い、洗ひ流し杯も棄てる様な事はなく奇麗に流して
 猫や犬の食物とする、好處は自分で食べると云ふ様
 にして紙屑が有ても使用する丈は氣を附けると云ふ此
 上もなき意思ひ、遠國者には珍らしい男、今風呂か
 ら歸つて来て小倉の帯を猫戯しにブラ下げて高足駄
 をガラく引摺つて参りました 佐吉「音吉せんエ、
 音吉「佐吉せんかへ 佐「ア、主婦さんは歸つて御
 座ツしやツたかノ 音「アイ、主婦さんが歸つて御座
 ツしやると旦那様か直ぐ土藏の二階へ連れてツて、其
 ぎり何でもお百と八疊の座敷で酒飲んで御座ツしや
 るが主婦さん何の御用が有たやら 佐「へエ、主

百おの姫姐

婦さんナ土藏の二階に、何だらう」と首をひねつて
 意思ひの佐吉が土藏の二階に燈火を持って登つて見る
 と無惨やお高は猿轡で梁に吊つて氣絶して居る、
 愕くり驚いて、繩を解き猿轡を外して 佐「主婦はん
 へのう、と呼び活ました、未だ身体が温かいから
 背中を撫水を與へましたから漸々に氣が附た お高
 「アイ……ツ、ツ、…… 佐吉せんかへ 佐「主婦
 さま、氣を確かに、氣を確かになすツて、モウ私し
 が居りますから大丈夫…… お高「アイお前の御恩は
 忘れない…… 佐吉や私しやア口惜い、斯れ斯れの譯
 で此目も遇た話を聞いた佐吉は 佐「マア何てエ憎
 さい料見だらうお百の阿魔ア、御前様が頭の上から
 着物まで直して肯な彼の阿魔アに遣しやるな近所
 の評判ぢやア寶の妹と云つても此迄には出来な、
 本統に感心に可愛がツて居なると云つてる、何て

エマア悪い阿魔か、汝何うするか見ろ」と駈出しさ
 うにするからお高は「佐吉、一寸待てお呉れ、お前
 がお百を撲つか杯すると私がお前に吩咐て彼女を撲
 たした様に世間の人には言はれる、又た身位ひの身
 上に妾様妻の一人位居たツて何も身上に障る程で
 も無い、縦令彼女を本妻に直しても私は隠居同様に
 別戸しさへすれば好から免れ角世間の人口の懸ら
 ない様にしてお呉れ」と斯な目に遇しても良人を
 思ふお高の節貞「佐吉や、私ア斯なに撲れて旦那
 に立てる操を破りは爲ない何卒此儘にして置いて」
 と聞いて佐吉も涙を流し、握ッ拳で頻りに眼の縁を擦
 つて居る中に、お高は又もや齒を食切ツて「ウーン
 と取迫たのは積だ 佐「エ、主婦さん、ドウ爲なされ
 た、コレ確り成すツて……」お百は手水場に参りま
 すると土藏の戸前にチラリと火影が見える「誰れが

百おの姫

登ッて彼の山の神を介抱して居るのか、と思ひました。それから急にバタ／＼座敷に戻つて「旦那へ、徳一何だ」「誰か二階に上つて居りますねえ」「フウ／＼大きに御世話な奴だナ、何奴か知らん、よし此奴奸夫だと言懸けて素裸にして逐出して遣らう、と突如刃物を持まして土藏の二階へ駆登つた徳兵衛、今苦んで居るお高の癪を推へて居る佐吉の背後から出抜に「オ、オ、汝ア大それた主人の女房と重り合へ……佐「オ、當事も無エ、此りや私が何時重り合ひました、可愛想に主婦はんが御前様方に苛エ目に遇てンレで苦しんで今癪を起して居るのを推エてる所を捉へて……」徳「馬鹿ア云へ、汝平日から奇怪しいと思つてたが見附けたからには許さねエ、此女ア犬猫にも劣つた奴だが併し正直に奸夫を仕ましたと云へば命だけは助けるが、仕ねエ杯ぞと強情張れば重ねて

置て四ツにする、サア何うだ」「佐「ハ、ハ、ハ、ハ、奸夫を仕たと云へば助けるし、仕ねエと云ふと切ると云ふ其様な表裏反對な判断が有りやすか、私にやア一圓解らねエ」「お高「佐吉、ソレはもう偽計とぞだからお前黙つてお居で、下手に争ふと怪我をする、私は前世の宿業と断念するが、お前は未だ兄弟も國にあると云ふこと、辛抱して後になれば濡衣も晴れる、お前の日頃の心立が好から誰も何とも云ふ人は有るまい」「モウ何しても此場は仕方が無い、覺悟をおし、まだ誰にも話はないが三月程前から私も奸娘の様子、身二つになる迄はせん難題をかけられても辛抱をしたいと思います、居たものゝ、斯くまで奸謀としてはモウ仕方がない、ハイ旦那私には不義密通を致しました」「佐「コレ飛でもねエ主婦マア何を……」お高「宜からお前決して此所は點つて居て争ひなさるな

百おの姫

争ひ立するとお前の身体に怪我を爲んでは成ぬから、遂に奸通に陥落せられたらと云ふは實以て氣の毒千萬、徳兵衛素より仕組だ事が甘く行たんでから腹の中では六喜ひで情も容捨も有りませぬ兩人を素裸にして逐出しました、佐吉とね高は赤裸体で出ました折悪しく頼りに突が降る「お高「佐吉へ、此から何う仕様……」佐「主婦さん下ッしませう、巴ア竈に残念だ」「高「イエ佐吉、旦那が彼の意氣組ではお前の命も取り兼ねない、自分の明りを立やうとするとお前の命も兼ねばならん、私が悪い様には仕ないから断念してお仕舞ひ、本統にお前には氣の毒だが御へ行てお寺の方丈様を頼んで何とかして貰はう」「佐「其な事を仰しやつて此から堺までは二里の餘もござります、裸体で行く中に凍死んで仕舞ひます」「お高「其では徳吉お前の必當

の家は有るまいか」「佐「左様さ貴婦のお實家に先に奉公して居たお百の兄の新助子、お百は悪い根性骨の女だが兄の新助は誠に心立てもよし兄弟でも雪どきはどの邊にです、彼れア此頃お百の阿魔が悪い事計りして居たのを怒つて御店に來やア仕ません、地体が親切な男で以前は貴婦の所の家來でせう」「高「成る程さう、私もボンとして忘れて居た、ソレでは佐吉お前の云ふ通り新助の家に行う」と此から二人して雑魚場の家に參つて委く話を致します、新助「ヤレ／＼まア主婦様を裸体にして逐出すとは何たること今まで衣類から頭の支度まで爲て下すつた其恩報しを此様な事せしやアがるとは、太エ奴だ、好うございます、親の無い後は妹の成敗は兄の役目だ下ッするか見やがれ」と總切庵丁を持つて驅出さうとするのを漸々に取鎮めて、此より三人が棟御

長屋でございしますから小さな蒲團が僅に一枚、ど
うして寝たか抱附き合せて寒さに震えて明しました、
が、三人とも心の關が確と据て御座りますから決し
て淫りな事は無い、實に女の第一の實は貞操と云ふ
ものでございします、彼是れする中に夜が明けまする
、先に起た佐吉は何より先にお高に着物と帯を買つて
進せ度いと思ふが資本はない、依て早速に奉公口を
尋ねました、すると御方便なもので聞ゆる天が助け
るか神々が御救ひなるものかして直ぐに奉公人の給
金には珍しう二兩の前金を貸て呉ましたから、この
二兩の金で帯から着物から合切買求めてお高に着せ
まする様な譯で、此中で日々の暮しも漸々に立つと
云ふのも此も天の恤みと云ふものでがな御座いませ
う、新助は女房替りに朝早く起きて御飯を焚き「主
婦さん御早う御座いますと手を支へて云ふ、夜も夜

具か不足だから一つ夜着にもぐり込で寝る様にして
も禮の一字は又貴い者で寝まする時にも「主婦さん
御免を蒙りますと云ふ、其禮が正しいから男女の間
一點の乱れがましい事は御座いません、夫故に禮の
一字は五常の中でも中央に檢束をして居る、禮義が
正しく有りませんからして「一寸貴郎へ一口召上り
ました、好じやア有りませんか御散しに……ナカと
云ふ此が破廉耻の源で御座いますから女子の慎むべ
きは禮の一字、禮が破れますると不品行の基になり
ます、餘事は擬措いて昨日と暮し明日と明して今は
月満てお高に小兒が産れますると云ふ、新助に於て
は種々産襁被其他の心懸も御座います、内々で金
子も少々心懸けて居ります、中々新助と云ひ佐吉
と云ひ今日人間中の手本と成るべき者で悪むべき奴
はお百と徳兵衛、此は次々の條に至つて辯じまする

が積善の家には餘慶あり積不善の家には餘殃あり天
網は恢々として危なれども漏さず、昔しから悪事を
致した者のめで度し〜と榮えた例しは彦座いませ
んそれは又た追々申上げまする、

(第三席)

魚賣新助は中々心掛の善い男でございまして、お高
が出産の時の手當もせぬければならぬと、一生懸命
に稼ぎ居ります、又お高も朝早く起出で、御飯を炊
いたり、汁を拵たりして居ります、シテ見るとお
高は新助の女房のやうで歸る時刻には御茶を沸かし
て自分は有合ひのものを食べまして新助には何か
拵ねて食べさせるやうに致します、新助は又お魚を
残して来て是れをお高に食はせやうと互に思ひ思は
れて親切に世話を仕合つて居ります、然るところお
高は月満ち渡つて今日しも産氣附きました、テ豫々

用意して置きました産襁被其他産衣等をチャンと拵
ねて産所に着く、ソレ産れると云ふので新助は直ぐ
産婆の所へ往くと産婆も豫々話を聞て居り誠に
可哀想だと思つて居るから他の産婦よりは餘計見廻
つて能く介抱をして呉れますることゆゑ、直ぐ飛ん
で来て取上げます、ところが案じるより産むが安
いと云ふ譬喩の通り年を取つての初産、殊に懐妊で
居る所を強く打たれ裸体で追出されたから、嘔ぞ重
からうと思ひのほか産聲高く生れたのは男の子、
産所にかゝつて居りましたお高は「新助さん、アノ
男の子でございしますか、女の子でございしますか」新
「イヤ、モウ男の子も男の子、人形のやうな美しい男
の子で、成るほど赤兒と云ひますが眞赤でございま
す、高「アノ此處へ連れて来て見せては呉れませぬか
」と云ふから何心なく新助は「ハイ」と産婆さんが汚

物を洗ひに往つた後で麻の産衣を着せて其處へ寐かして置いた赤兒を抱いて往つて「新へー、細君さん御覽なさら」

懐妊で居たところを強く眞張棒で打たれたからヒヨツとして身体に傷でもあつたはしないかどそは親子の情ヒヨいと産衣を解いて身体中を見ると背から足へ掛け、胸より腕へ掛けて宛ながら班點の櫛のやうな眞黒な痣がある、何ほ心善しの結構な令室さんでも「チエー、斯う云ふ苦しみさせ居つたのも彼のお百、情けないことをし居つたな」と思ふところからウーンと産後の血が上がる「新へー、主婦さん、御氣を確かに御持ちなさい」と呼ばつたがそれッ限り、藥水よと介抱いたしたがモウ絆切れて呼べど叫べど應へなしたから産後は餘ッほど傍に居る者が氣を附けて火事を見せたり悪いことを耳に入らせ

ぬやうにしなければなりませぬ、又産中の憤みと云つて小供を産落すまで十ヶ月の憤みと云ふものは中々婦人も容易な譯のものではございませぬ、産婆さんは之れを見ると横ッ飛びに飛んで逃げて仕舞つた、ボンヤリ赤兒を抱いて新助は男泣きに泣いた「殖ゑることに事をかへて死人に赤兒と一時は出家、七夜と七日を同じ日にして蒸物に配り物を洗へなければならぬ、愛さ世の中とは云ひながら、産湯と湯灌の湯を一緒に沸すことは知らなかつた、應已れが拾ひずりに連れて来て御目に懸けたのが悪るかつた、イヤサ已れが悪るいではない畢竟わのお百の妹めが悪いのだ、見やアがれ今に此の赤兒さんを見れば手で育つて敵を取つて主婦さんは草葉の蔭で御無念を晴らさせにやアならない、南無阿彌陀佛々々々々々々」處へ戸を開て其へ参つたのが差配の津國屋

喜兵衛さんと云ふ親切の人「新助さんアノ川口の細君が産後で死なつたさうだがお前も嘘を御困んなさるだらう及ばずながら私も一肩入て進せやう「新」此はく差配さん、サテ此家の細君も漸やく産を致しやしたが産湯と湯灌の湯を一所に沸して七夜と七日と一時に成つて仕舞やして、ドウも早や青エ草紙きやした、喜「左様だらう、其に就て新助さん、私が桑名屋の店に行て當人は兎も角も産み落した子供の養育金と云ふ事で幾許か取て来て上げやう、足ら無い處は問屋衆から又私か口を利て集めると云ふことにもでもして、何しろ子供は桑名屋の子供に違エ無エだから之から私が行て来て進せやう「新」差配さん其れア御止なせエ、それが解る様な男なりや斯な苦勞も仕やせんが、ホンにく人聞の心なしてエ物は此ン計りも無エので、貴方が行けは唯だ腹を立て歸

る丈さ、彼は兎か蛇か其様事の解る奴等じやさせエませぬ、唯腹ア立に行く計りもなら行ない方が好う御座いませう「喜」新助さんマア其様事を言はずに、兎に角私が試しに先つ行て咄して見やう」と津國屋喜兵衛親切な人だから出掛行たが、頓ての事にブンく怒つて歸つて来た「新」ドウです可けはすめエ其だから私が御止なせエと言たのが「喜」成る程解ら無エ奴等だ、丸で馬の耳に向つて咄をする様なもんだ好ワ已も津國屋喜兵衛だ、安心さつしやい、左様いふ譯なら青物市場の衆に向つて相談して見やうと此から親切な喜兵衛は此處に相談しました、此の市場の衆と云ふ者は第一氣前の好い者で、角力でも芝居でも市場からは第一番に蔭を遣るとか積物を爲るとか云ふ様な、競ひ肌の立引の強い御ゆる強さを挫いて翫さを助けると云ふ氣風な所で御座いますから、

忽ち問屋衆から己も幾許、我も幾許と云ふ様に思ひ
の外金が集つた、喜兵衛さん喜んで愈々其金を以て
葬禮を出す事となりました、

新助の寺は誠に庵相だから、喜兵衛さん、寧ろ己の
寺へ持て来いと云ふので方丈様に咄をすると、方丈
様も善い御人のゆゑ、「皆さんが御親切に立派の御葬禮
を爲さるなら其金は子供の養育金の方に向ふとして
出家は人を助けるが本分拙僧に於ては百ヶ日の間無
酬で法事をして進せやう」と誠に感心な和尚様、早
桶屋も何時か其事を聞たと見えて、左様云ふ譯の咄
なら桶屋は私の方でお負に致しませう、桶屋計りは
お負で貰つても仕方が無い、切當日と成りますと早
朝から致して長屋町内三十軒計りも揃ひまして、素
じも攝待、持合の葬禮だから彼方では南無妙法蓮華
經、此方は南無阿彌陀佛、法華と淨土の鉦と太鼓

の混淆の葬式だが中々立派の葬禮で、魚屋新助は棺
桶の後から子供を抱て出立ちますのを往來の者は
見て「おみつさん良人を持たなら心立の善い人を御待
ちなさいよ、此の御佛なんぞも何にも悪い事は爲さ
らない、お父さんは堺の廻船問屋で川口の桑名屋さ
んに御嫁に行たのだが旦那が小問使の女に手を附た
のと、此佛様は其はモウ自分の妹の機にして髪飾の
物から衣服から何から何まで御遊んぼすつたのを、
其恩を誓にして旦那を唆かしてトウ、無い難癖を有
る様につけて逐出して、ソレで生婦さんは舊の家來
の魚屋さんの處に来て居て坊ちやんを御産なすつた
のが悔い、産後にアンな成てお仕舞なすつた
其の坊ちやんはアレ彼處に新助さんが抱て居なざる
のがさうだ、
と女中衆は棺桶を見て皆ほろ／＼泣て居る、此方は

手々一杯機嫌と見ゆ、皆「オイぐるりと廻つて
桑名屋の前に棺桶を昇いでつて呉んなよ」「オヤ三町
辻路を仕やがる、喜「オイと棺桶を下して呉んな、
其處の門の前が好い、と津國屋喜兵衛が其前に出ま
して棺桶の蓋を叩いて、喜「主婦さんエ、お前さんの
家まで来たんだよ、此處は桑名屋徳兵衛の家だよ、
世の中此家の家の徳兵衛位エ理非の解らぬ奴ア無
エ、桑名屋徳兵衛と云ちやア近所の人にもお前さん
が居た頃は譽れもして居たがお前さんが出て仕舞
てから、お前の阿魔めが本妻の座に据りやアがつて
其からは出入の者も皆退て仕舞つた、眞に結構の
お方やツたが前世の宿業とやら佛法で言ひ居るが天
道様が午寐して御座ツしやるかと思ふ、貴婦は可畏
く化て出て根を晴して御遊んなせエ、私方達にア此
の身代の家藏にペン／＼草の花盛りと見せなせエよ

、細君さんヤレ御頼み申します、貴「ヤイナ此家の
潰れるを見て唯して遣れ、今に草が生るツ、目出度
エ／＼ナニ目出度エ事があるもんか、されども人
心の悪を悪んで善に興すると申すのは皆筒様な物で
誠に恐ろしい物でございませう、夫より棺桶を菩提寺
に昇ぎ込んで葬禮は形の如くに執り行ひました、一
時は中々の騒動だツたが先づ何やら角やら悉皆片付
けた、けれども後に残つたは悲ならけの男の兒名は
三之助と附まして里扶持の金子も幾許かは寄せした
が、差配さんから「此は坊ちやんが成長く成てから
入用の金だ」と云つて他に預けて仕舞つたから新助
の家には一文も無い、相も變らず一生懸命魚を賣
て歩いて毎日坊ちやんを背負て「魚は宜しか、と出
掛まするが渡る世間に鬼は無い」「オヤ好いお子だこ
と、此れが話に聞いた河口の桑名屋の坊ちやんかエ

お前さんは感心の人だが御乳が無くて困って居な
 さると聞いた、少妻の乳を上るから御遣し、オ、好
 い御子だ、笑っておいだで、叔母さんが抱こして今
 一乳上るからよ、オ、お前さんの慈母さんは酷い御
 苦勞なすつたさうで、魚屋さん惣菜物を」と云ふ様
 なこと坊ちやんが愛嬌者に成て大變魚が賣れる、
 中には「魚屋さん六人前下さい職人のは大切にして
 四人前、家内のは小切にして二切れ、魚さんかエ、
 此の御子かエ桑名屋の坊ちやんてエのは、新へエへ
 エ「ヤレ」マア彼の桑名屋と云ふのは、良人も子
 、出入場で有たが、此の御子さんの慈母さんの家出
 に成つてからは行なく成つたよ、眞實にモウお百と
 云ふ女は何う云ふ悪い畜生だらう、坊ちやんは叔母
 さんが乳を上るから抱こをし」と得意揚其外藝妓屋
 杯に至りますると猶更ら、坊ちやんくで新助の魚

を買って恤んで呉れる、其度學に新助は、有り難う御
 座いますると手を合せて拜むが、實以て左様めらう
 事で御座います、
 或日のこと新助は夕景に自分の宅に歸り「思つたよ
 も今日は魚が儲かつた、ドレ」一杯遣せせう」と
 残りの魚を肴に致して澤山も飲まない一合上戸だが
 新助はグビリグビリと一人で飲んで居る、御酒も程好
 く飲めば身体の薬にもなると申すことで、一合上戸
 が五勺位飲んで置き升ると氣血循環して齒を散
 します、其れを度を超して飲みますとブウウ
 と云ふ奴が始ります「ナンデエ餘糧めエ一体が氣に
 食ねエゾ、此ナ肴で酒の飲めるもんケエ」などと申
 す卷舌で、處で昨今は節酒と云ふ様な御論も起つて
 、皆様に於ても酒は飲むも飲るゝな杯と仰せられ
 ますが、實に其通り、一杯は人酒を呑み二杯は酒酒

を呑み三杯は酒人を呑むと申します、酒に呑れる様
 に成つては溜りません、大さくは國を興ひ中ごろで
 家を失ひ小さくて身亡ひズツと輕くても財布を空
 にして世間に義理を失ふ位の事には相成ります、元
 談はさて置きまして新助も一杯呑る口でござります
 から一寸した魚を膳の傍に置まして坊ちやんの顔を
 見ながら一人で呑や居る、新坊ちやんや、私は眞實
 に義理ある妹と云ひたいが義理は外れて敵同士と
 なつた様なもの、お百と云ふ女は坊ちやんの敵です
 よ、新助が助太刀申すから見事敵を討ちなさい、見
 事、アハ、好い心持に酔て来た」と坊ちやんを
 抱て其儘好い心持に成しグ〜と高聲、前後も知
 らず白河夜船と、眠に就きました、夜中にフツと
 目を覺して見ると新助が今まで抱て寐て居た赤さん
 が居ない「オヤ盗賊、……赤坊を盗賊する奴も無エ

もんだ、枕元の行燈の影に茫然と子供を抱て出て居
 る、新出た〜主婦さん、ウフハ、ハ、ハ、此奴に出
 られちやア溜らぬ、坊ちやんは私が御育て申します
 から決して御方には御出には及びません何うか桑名
 屋の方に每晚願ひたらございます、除り幽霊の御懸
 意なのは有難くございませぬ、門違ひをなさらねエ
 で毎晩桑名屋の方へ願ひます、南無阿彌陀佛々々々
 々々々」ボォン、鐘か何か其な聲か致し升とスー
 ツと抱て来て新助の懐中に入れたと思ふと姿か消ぬ
 て失なつた、ホツと云ふ息を吐て見るとコレは夢だ
 「ハテ夢だな厭アな夢を見たな、何うも此夢は正夢
 らしい、坊ちやんの口に乳粕が附いて居る」險香の
 話だ、此から毎晩の様に夢を見ます、ウト〜し
 て居る間に乳を飲せるかして一旦泣た子もビタリと
 止まる、此節左様な事を申しますと御度視に成りま

すが、勿論怪しい御咄は爲すべきものでは無い、それ
 ども亦其氣の残らんと云ふ事も御座いませんで其証
 據を引て書たものも古來幾許も御座ります、餘事は
 扱置きまして此方では廻船問屋名桑名屋の家から幽霊
 が毎晩出るに云ふので日が暮ると川口の通かビツタ
 リ止まる。甲「昨自己ア川口の桑名屋の前に幽霊が出
 るに云ふ話を聞いたが貴様聞たか。乙「已ア見た。甲「
 何時。乙「ソレ先度舟で手前の賭將基をして歸つて仕
 舞つた彼晩に、跡は已か。人残つて、おれから降つ
 來さうだから番傘の有た奴を引摺いで棧橋を渡つて
 川口の前を通るとボウーンと鳴物を入れてナ。甲「ム
 一幽霊の鳴物は附きものだ。乙「ト思ふと桑名屋の土
 藏の庇間からヒョロ〜〜。甲「嚇かしちやア好け
 ねエて「眞實によ、色の青い女が剃髪でよ……眞
 實だ、實際だ」と云ふ事で日暮から川口の桑名屋の

前を人っ子一人通らない。筒様になつて商賣の繁昌
 しやうがな、いから昨日に今日と得意は日々と減る計
 り、弱り目に祟り目だが又實は先妻お高の亡念か其
 の三年目に當り丁度お高の命日、火に縁の無い場所
 から、ソラ火事だと云ふ放火だか何だか分別らんが
 、モツ一面の火になつて燃上る、徳兵衛お首の男女
 に於ましては周章狼狽して盲目が杖を失つたる如く、
 金財布や帳面は愚か第一本持たぬ乞食同様の始末と
 成りましたが、それは又廻船問屋の事で、全焼と云
 ても悉皆船が残つて貨藏が無難で有るから明日から
 困る様なことはない。杯と負借みを云て居る。甲「ナア
 ニ無道と爲し悪事を爲たために本妻の亡念で火事が
 出來たのだ」と評判が立てても徳兵衛は、向平氣で居
 るから近所の者が憎みまして又火を摺ひ込んで貨藏
 迄も燃し附て仕舞ました、其でも「未だ船さへ有

れば」などと申してまた負借みを言つて居ると十
 四五日経て船頭兩人が眞青になつて打萎れ桑名屋の
 店に歸つて參つて、船頭「旦那、徳「ドウ爲た。船「三州
 伊良子崎の沖で明神丸と赤松丸と二艘、時に沈んで
 仕舞ひ私等二人が漸く残つたが此も金毘羅様の御利
 生だと思ふから、今讃州へ參つて歸つて來ましたと
 云ふ、其の難船の當日、日を経て見ますと、丁度
 桑名屋の焼た晩と同じ日だ、シテ見ますると人間の
 口惜い〜〜と思ひ詰めた、念の凝り固つたは恐ろし
 いものと流石の桑名屋徳兵衛もギョツとした、難船
 と來ては問屋衆や船頭の金の融通が止るから右の船
 頭二人には金を摺ませて口止をして、桑名屋も全焼
 には成たが古川に水絶すだから皆様ドウか身上を見
 込んで金を貸して遣て下さいと人を以ても頼ませ自
 身も頼んで歩きました、難船したとは夢さ知らな

いから、近頃評判は悪いが年來の馴染だからと何れ
 も幾許か宛貸し渡した、其金の百四十餘兩といふを
 懐中にして身の形容を拵へ徳兵衛お百夫婦して大阪
 を夜逃に致して東海道を江戸表に向つて下つて參り
 ます
 此時に何うした事だか國俊の脇差だけは他に拵へに
 ても遣て有た爲にかして助かつた、如何さま町人の
 脇差は常に身に附て居る物でもなく柄糸直しとか錆
 たから研ぎに遣るとか何れ宅には無つたもの見え
 て助かりました、斯く夫婦は東海道をだん〜下つ
 て參りますと道中で一緒に成た廿四五の小間物屋、
 別に悪意の有る様な人物でも無いから是れより此の
 小間物屋さんと一所に參つたのは三州池鯉鮒の吉田
 屋と云ふ旅籠屋、此家に相宿をして、旅の疲れでグ
 ッスリ寐て居る處を胴巻ぐるみ百四十餘兩の金子を

百おの妃姐

残らずチヨロマカされた、旅稼ぎと申して年中悪い事として居る胡麻の蠅といふ奴で、されば因果應報と云ふ事は毎々御耳を拜借して伺ひますが是は實に天理の自然で茄子を蒔けば茄子が生瓜を蒔けば瓜が生ると同じ事、併し此の應報のお話も講釈や出呂連で添聞きなると面白いが實際其の當人は成て見たらば嘘を難言な事でもございませう、トウ〜此の夫婦の者は一文無しに相成つて今更ら大阪へは歸られず仕方が無いから身の廻りの物を賣り拂ひ、或ひは頭の物などを手放しましたが此れが廻り廻つて來ると云ふ御話其れは後の條りに於て委しく辨じまする、漸々の事で旅籠屋を立出でまして其から伊豆の三嶋までは御咄は無、三嶋の宿の入口で東京から參れば出口、一寸と橋を渡らんとする彼の所で徳兵衛の草鞋の前蓋がフツと切れた、草鞋の前蓋が切れたから

「直すのも面倒だ、明日は何うせ山路に懸るから新草鞋を買はねば成らぬ、今更通つた道は一丁程歸れば賣つて居た店が有つた、足に當らぬ様に序でに買つて行えからお前だけは先刻一寸と話して置いた此の宿の萬屋、角萬と云ふ旅籠屋へ行て宿つて居な、私は草鞋を買つて直ぐ跡から行くからと、お百を先に遣て此から徳兵衛は草鞋を買つて足の尖に當らぬ様穿き直して、遅くなつたからお百の跡を逐つて再び康申堂の木の蔭に差懸る、誰や彼やの夕黄昏、ト參ると庚申堂の蔭の所から女乞食かヌーンと出て細い聲で後の方から「モン旦那、何處まで行きなされる」と聞けたのを振顧つて見ると先妻のお高で恨し氣に此方を睨んだ顔「ヒアツと云つて賑け出したが此處に幾分の恐怖が有ると氣の所爲で何かと色くに見える物で、然ればにや此節は神懸々々といふ事申し

百おの妃姐

ますが徳兵衛の目に見ふたは實に神懸か又幽霊か本統に出たのか知れませんが、草鞋を穿たまんま一目散、萬屋は店に飛び上つた、萬屋では驚いた「何卒御急なさらすに御静に願ひたい、徳「お百、お百、お百は居ねるか此處では話が出来ない座敷に行て……實にさうも其顔は凄さは再度では見られなかつたよ、夢中で此處までは逃げて来たが猶且お高の怨靈が身に附纏つて居ると見える、百「オホ、ハ、ハ、ハ、ナニサ怖いと思ふと帯も鬼と見えるよ、野暮と化物は箱根から京方には居ないどサ、徳「シテ見ると未だ山手前だから出るかも知れねエなア、百「お前さんの様な弱虫にやア化物も出好いだらうよオホ、ハ、ハ、ハ、實にお百は平氣な者だ皮肉に分け入りました海坊主の魂魄で此様な者になつちまつた、お百は化物の間屋の方だ

から平氣だがトウ〜徳兵衛は此の幽霊を見たのが神經の元でドツと煩ひ付た、二十四五日の間旅行に寝たつきり、やう〜に藥の御陰、大きに氣分は好くなつたツが其れや此れや折角拵へた路用も悉皆使ひ果し身動きも出来なくなつた、併し世に人鬼は無の當家の旅籠屋の細君と云ふ者がモツ年を重ねて居るが、縁わつて當家へお泊りなすつた客人のこと御亭主が不慮の御病氣嘸かし御難言な事であらうと夫婦の身上を酷く氣の毒かりまして旅宿代を負た上に小遣まで呉れて此家を立せました、是れが世に云ふ地獄で佛、お百は亭主の徳兵衛を連れて道を這ふ様に歩いて道々も百姓衆には其理由を云つて握飯や何かの食物を貰つて僅かの儲を凌ぎ、或時は夫婦して辻堂の中に夜明しを爲る事も度々有つて眞正の乞食同様と相成りましたが、漸々の事で遣つて參り

ましたのが品川の宿で、品川で芋を一本買て其れを食ひくゝ來ると丁度新橋の橋詰、チヨン〜チヨチヨンと四時の拍子木 徳「お百や……人間の一生は糾なへる繩の如しと云ふが斯う云ふ姿になつて江戸に來やうとは思はなかつた、右を見ても左を見ても知り人は無い、何う取り付くと云ふ嶋もなく業耻を曝すと思へばホンは情ない……コレ此川か三途の川だ手に手を取つてドンブリと、冥途に行て夫婦にならう 百「私しやア否 徳「否だつて……其れではお前亭主を捨ると云ふもんだ お百「否よ、お前、死にたくば勝手に死な、命有つての物種なものウ、其れウ捨ると云ふが有るもんか子 徳「それではお前亭主に濟むエが 百「濟むも濟まぬもあるもんか子」と議論真中に通り掛つたのは四十始好の男で、折詰を下けて一杯機嫌と見えてブラ〜遣つて來たが今橋の上で徳兵衛お百夫婦の者が、死ぬ死なぬの論判から欄干の側で取ッ組合を始めたのを見て 男「マア〜待なせエ、往來中で夫婦喧嘩をする奴が有るものか コレ何だ開違の元は、ナニお前方は大阪の衆で、道中で煩つて仕様が無いから死なうと云ふ、片方は否だと云ふからの喧嘩だど、飛でも無エ、そりやア細君の云ふ方が道理だ、好い私も仲へ入つたのが掛り合た、コレも相縁奇縁と云ふもの、何ぞの力に成るまいもんでも無い、何にしる私家が來るが好い、ナニ直き此の傍だ、旅小間物屋の重兵衛と云ふ者で家には雇婆アさんが一人居る切りだ、大きな家に誰も外にやア居る者もねエからマア此家へ來て當分氣を落付て、其中にやア好い風も吹くだらうマア一所に來るが好い、と重兵衛は夫婦の者を引張て參りました、徳兵衛は「渡る世間は鬼は無イヤレ〜御親

切なお方や、と涙を顔して禮を言ひながらシヨボ〜附て參ります、其道々にも前の女房お高や無實を言掛て遂出した佐吉の事杯を思ひ續けて、不覺の涙に暮れましたるが今更ら悔ても詮ない事、後悔先に立たず愚か者の致すことはいつも簡様なものでござります、

(第四席)

扱徳兵衛お百の兩人は是より旅小間物屋の家に參つて厄介に成りましたが命を助けられた恩人と云ふ所を旅の勢れも厭ひませず、翌朝鳥かガアと鳴くと直に飛起て臺所の掃除から家廻りの掃き清め迄、主人の起さない内にして仕舞ひました、雇婆アさんは大悦び、頓て朝御膳も濟ますと 重「ア、大阪の客人や、昨夕聞かうと思つたが心配の様子でも有たし私も心持が悪かつたから聞なんだが、大阪は何の邊だ

へ、大阪は…… 徳「河口で、ハイ…… 重「河口は二ツに成て居るが安治河口の方かへ 徳「ハイ、安治河口の方で…… 重「何商賣を爲て居なすツた 徳「廻船問屋で 重「河口では軒を並べて四軒の廻船問屋が有ツたが、彼の中かへ 徳「ハイ、入山形に徳と云ふ字の書いた河岸藏が有りましたが彼れが私しの藏で 重「へ、エ左様かエ、ソレではお前は桑名屋さんかい 徳「ハイ、桑名屋で…… 重「左様かい、へ、エ變れ變れ……イヤ私を以前正右衛門さんと云ふ彼の親方の所に居たが其時大變に難儀をして正右衛門さん助けられたんだが、今も折々昔の事を思出して何うか其の御世話に成つた恩返しを一度して上たいと思つて居たので、ドウも實に不思議な御縁だ……ソレは左様とお前さん處は佐竹の御船頭の家であつたが何うしたエ 徳「イエそれに附きましては種々とお

話がございませす」と徳兵衛は今迄の行立てを斯ううと云々筒様く〜と嘘と實と混合で涙ながらに二人が話しましたから憐れに思つた小間物屋の重兵衛「重それは何しても氣の毒だがソレではお前も都下の新川や新堀には随分知て居る人も有るだらう、お前方面から話して爲悪いなら私が方で先方に話をして金算段を上げて好いが……」徳「否ません子、重ナゼ徳一彼方を借いことをして参りましたんで、へエ、今頃公事沙汰成り居る頃で、其故私しが當家に居ると云ふ當知れましても困るので、何卒ソレは被仰つて遣りませ」云ふから重兵衛「れ前方面二人が迷惑と云ふなら仕方ないが、ろこで二人とも何とか方立を爲なければさうさう何時までも世話をする事も出来ないが、それにしても着物の一枚に帯の本位は買はずは成るまいが其の才覚だテ、古

川に水絶すだ何かお前方幾許にか成る金策の心當りがありさうなものだがドウだエ」徳「へエ、此にナ守札袋の中に貸金証文の一枚ありませすが此もや否やすまいかなア」重「ナニ」徳「貸金証文が有りやすが此れでは可ませんかなア」重「オイヤ〜お前、大阪の証文を此地で振たつて仕方仕様も有らぬメレやア無エカ」徳「處か子江戸の或御方がナ彼地へ御出の時、其の江戸にさへ歸れば直ぐ返すからツて借て行しやりました証文で、其れはナ江戸の御旗の石川主膳様と云ふお方をナア」重「オ、石川主膳様と云ふのは御旗で確か彼れは牛辻神樂坂若宮八幡前と思つたが、ドレ其証文を見せませい」徳「へエ此れが其の方の御認め爲さいましたので……」重「へア成る程牛辻若宮八幡前石川とある、ソレ無利息ながら恩金だ、右左に遣すだらう、其れで着物を通

りど帯でも買たら宜からう、左様しなさい」徳「ハイ重」ソレでは早く牛込に行きなせい」徳「其ならチャツと往つて來まはうがナ」重「行くならば着物と帯は悉皆私のを貸して進せるから早く行て來なせい」此から徳兵衛は重兵衛の家を出まして漸やく牛込神樂坂若宮八幡前石川主膳殿と尋ね當てますと甲州谷村に御用で行た云ふ、徳兵衛茫然して歸りて來た徳「好けまへんで……」重「上方の人は茫然だつて云ふが眞に茫然だなア、ドウ爲たんだエ」徳「甲州の谷村と云ふ所へ御出に成た云ふで、甲州の谷村迄行きまへんでは埒明さまへんせ」重「谷村には御給人の櫻村五郎兵衛と云ふ人が行てるのだが……」エ、もう乗掛つた船だ、それでは私が一兩貸して上げ様から金を受取つて來たら返すか好い、兎に角一兩だけは悉皆貸して上げやう、其中に私も商賣に出る用もあり荷

物はお前も肩は利くめエが人足替りに昇いでツて呉んなせエ、私は道を教へながら行らう、ソレでお前が東海道へ出るに私は中仙道と云ふ様にして、其から私は日光から成田の道に懸つて二ツに成ても歸りは一所位に遇ふことも出来るから、左様云ふ事に爲なせエ」徳「ドウも貴方の様に親切の御方が有るでナア私誠に助かりませす」と一兩の金を虎の子の様に大切に懐中して道中に出懸ける、万事に心を注る様には致すが大家の微祿した者は何うも馬鹿の様に見えるもので」重「好く氣を附てよ……」徳「有り難う御座います……」コレ百や百や、百何だエ」徳「死なうと云ふ所を助けて下はつた重兵衛さんは大恩人やから、三度々々の食事のお世話や蒲團の上下しのお世話はナンボでも爲るが好が、其外の飛でも無い御世話杯は爲ては成らんで好う氣を附てなア」と念には念を

推して此から谷村に行き聞かすと、石川様は此間身延に行かれたと云ふ、仕方が無いからエツチララツチラ身延に行つて見ると今度は飯澤へ行つたと云ふ、又仕方が無いから飯澤を指して尋ねて行くと今度は勝沼に御出になつたと云ふ、人間も間が悪くなると際限の無いもので廿一日目で漸々に石川氏に面會し事譯を話す、石川氏は見ると、御所持の金が八兩しか無い、恩金で無論返さなければ成らんが屋敷に歸れば直ぐ返す、唯今は出先で持合せは不足だから此次を持って行つて呉れると云ふ、仕方が無いから其八兩の金を持って足を引き摺り歸ります、昔は親船の二艘も有り店藏奥藏總て三四万兩の身代の者が、僅少の中に斯う云ふ事になつたのだから大家の傾くと云ふは更に仕方のないもので、漸々のことで八兩の金を持って道中を急いで歸りますと甲州街道、昨

日から川留だ杯といふ所が有て誠に道中も抄取らず、思ひの外手間取れて日の暮昏に新宿に着いた、ボオンと云ふ暮六時の天龍寺の鐘、本當なら新宿に泊つて明日翌朝にでも乗し歸るが好いのだが、ソレが仕方の無いもので當人一生懸命で先づ借金を一兩重兵衛さんに返して、帯と衣物の一枚宛も二人で引張らうと思ふ悦びだから、自分は一心不乱にお百の事計り考へて勞れ足を引摺り引摺り漸々にして来たのは新橋の橋詰、丁度時がチヨン／＼チヨチヨンと云ふ十時の報柝、喜怒哀樂の四ツの拍子木を聞いて又味き無い我が身の上、食客の悲しさは夜中に歸つて飯食して呉れ、と云ふも氣の毒で出来ないが何う仕様かと思つて「茶飯あんかけ豆腐」と云ふ看燈が有るから此に立寄つて茶飯と餡掛に有りついて、其から脇坂様の御屋敷前、角は米屋で隣家が頭取の家

、三軒目が旅小間物商の美濃屋重兵衛の家と其家の前へ來ると「間口三軒奥行五間雜作附貸店」と書た札が貼つて有る、徳ハテ間口三間奥行……雜作附貸店、ハテナ角の米屋で隣家が頭取、三軒目が小間物屋の美濃屋、人の女房を預かつて何處へ移轉なはつたやら、尤も廿日の上も懸つた事やか何と云ふ不都合な事じややら、江戸と云ふ所は悪い人が居ると云ふかまざか人の女房まで……否や斯う明店と見せ掛け、彼の人も商賣する身やから……、無駄と思ふて叩いて見やう、ドン／＼／＼、重兵衛さん重兵衛さん、ドン／＼／＼、大阪の徳兵衛でおますが今歸りました……好く寝やはつたこと……百や百……百や」拳骨の皮のむける程有や／＼と怒鳴り居りますから隣家の組の頭「明店」叩く鏡棒が有るもんか、と一杯機嫌でございませすから滅法

界に恐つた、頭ヤイ此ン鏡棒、貸屋の札が目へ入らぬエカへ、いけ騒々しい、真夜中明店をドシ／＼叩きやアがつて何をするんだ、寐られねエヤイ」大剣突を食せましたがそこは又女房すから頭取の女房は氣の毒さうに出て來まして、女房「お前さん隣家の明店を叩いて何にする氣か知らないが、良人のは今仲間の者と吞て來た一杯機嫌で、明日が早いから寐やうと思つて居た所だから、ソレに又お前さんがドン／＼／＼大騒ぎなされるもんだからツイ疝癪を起したんだが、マアお前さんもお前さんだよ誰か明店を叩く奴が有るものかな、徳ハテ……ヘエ……ヘエ……貴婦は頭さんの細君はんで、私はナお隣の小間物屋はんに大事な品を預けてナ甲州街道の谷村と云ふ所へ行つてナ、やうやうの事で今戻つて參りましたで、如何さま戸に札は貼つておますけれども、何ぞの間

違でもおますかいと斯う思ふてナ、戸を叩きました
 が頭取の御耳障りに成りまいたる段はえらう御氣の
 毒に存じます依てナ、何卒、御勘辨を願ひます、
 お隣の小間物屋は何處へ行きました貴婦さん御存じ
 はおまへんかナ 女「オヤオヤ左様かへそりやアオ
 お隣は子夜逃同様にして行れたもんだから妾共で
 も何なに迷惑したらうよ 徳「エ、夜逃……ア、色の
 白い上方の女中が一人居ました筈やが彼女も一所に
 往きましたらうか……又た彼女だけは何處にても預
 けておませうか其邊の處は御存じではおまへんかナ
 、ドウぞ細君さん教へて遣つて……」女「ア、居たが
 ナ、其りやア本統に彼娘が来てからね、久しい間履
 ひ女の替りをして居たが日が暮れると直ぐに三味線
 に合はして上方唄を唄ひなされるア、聲が善いのに節
 は少しダラリと延てるが品が好ので、毎晩唄ひなさ

るから妾なんでも日が暮れると直ぐ二階に上るのよ
 、ソレから四刻頃になるとソレは……二階がカラキ
 シ太陽氣、頭取も心配して間違へが無りやア……と
 言つて居なすつたが、トク……行方知れずに成ちま
 った……大方彼女、好い中にも小間物屋さんが爲
 たんだらうよ 徳「エ……何と、情ナナ情けない事に
 なつちまふた、彼女までが……聞ぬんそへ百、百や
 ——百や——、百やと云たが目が眩んだ物かして其
 場にバツタリ打倒れた 女「オヤ大變だよ此人が死ぢ
 まつたよ」寐て居た頭取も肝を潰して飛で来た 頭
 「オ……上方の入ッ……上方の人ウイ……」徳「エ、アツ
 ……ア、情ナない、お頭さん主婦はん、今お話
 の女は何を隠しませう私の女房で、ア、残念でござ
 います 頭「さうか其奴ア何しろ可哀さうだが、体
 あの小間物屋は年は老てるが粹な男だから、上方の

顔の輪の骨抜を天糞糞に揚げた様なのより好だらう
 、ソレでお前は置去りを食たんだ 徳「頭取、置いて
 下はれ、どうでおませう、二人共モウ此處には居り
 ますまいか 頭「左様よナア、田舎ア廣い様でも世間
 が狭エ、江戸は狭い様でも場所が廣いから江戸に隠
 れて居るにやア違エねエが、上方の人ア寸法が延び
 てるから滅多にやア捉まるめエ、何しろ江戸の真中
 へ連れて来た女房を失したナア縁日商人が燈火を無く
 したと同名じことだ 徳「親方へ何とか工夫はおまへ
 んかなア 頭「さればサ、人を尋るなら紙屑買か左も
 無きやア箕摺を背中に負つて、千日と日か書て遣る
 から笠を冠つて一文づゝ貰つて歩くが好い 徳「頭取
 置いて下はれ、鈕叩いての千日参は私も知ておます
 が其りや何ボでも出来んでなア」頭「ソレぢやア屑
 屋が宜からう」と云ふので此から徳兵衛は仕方な

いから鉄砲箆を擔いで「屑ウ……紙屑のお拂ひ」と
 江戸の隅から隅まで廻り廻つて足掛け二年の間、口
 惜い……で無理酒ばかり飲で歩いたからとんと中風
 の様になつて足が利ない、ヒョロ……歩行、不運が
 持上つて来ては又た仕方の無いもので御座います、
 處がある日の事深川に海老床と云ふがおります、此
 の頭の床には袖窓と云ふの有りまして、髪結と云
 ふ者は由緒の有るもので、日本の今の髪結は鉛棒計
 り立て置くが此の袖窓と云ふは取ては成らない物さ
 うに御座います、彼れは権現様から御許しになつた
 ので兩方の小さい障子を立てますと着物と干した
 通りの形、此は髪結さんの先祖が軍中に於て家康公
 の御髪を上げながら御服を懸けたと云ふ因縁で、髪
 結さんの最も然るべき由緒なさうでございます、其
 袖窓を崩して今日では只鉛棒ばかり有りますから

西洋人が参つて有平菓子を買ひたいと云つたさうだが、如何にもそんな者で、其の袖窓の下に徳兵衛が休んで居りますと髮結に來た若い衆が二三人話を爲ながら冷かして居ります 甲「オイ見ねエ、此處に居る紙屑買は元と大阪の安治川口で大層な廻船問屋をして居たと云ふことだが、旦那飽でも焼か廻つちやア仕方が無エ、ソレが元は伶俐な女房を眞裸体で逐ひ出したが、其細君は出されて何處に行て口惜い」と思つて口惜死に死んだが、其怨念で廻船問屋の方では火に縁の無エ所から火事が出トウ」と全焼となつて、流れ」と斯う云ふ身になり小唄使の女と一緒に江戸まで來たと云ふんだが、此の様子じやア女にも見放されたんだらう、鼻の穴が天井向いて輕業アして居らア 乙「コウく彼れを見ねエつてことよ、彼の女はな好い女だなア、彼れが此の新道

に居る上方藝妓、美濃屋の家の抱へど成つて居るんだが亭主は未だ有るめエカ 丙「誰かモウ占たらう 甲「出端から一度も御茶は挽たことねエと云ふのは素敵なもんだ、ドウだへ彼の顔の愛嬌は頭の髪が眞黒であれで以て小三と名乗て上方唄を唄うんだと云ふ 乙「徳兵衛は美濃屋に居て上方唄を唄ふ女と聞いて思はずチヨイと見るとホンノリとした櫻色で箱屋の肩に懸つて行く 小三「今日は大層酔んだよ」と甘たるい調子で丁度今座敷歸りの様子でございます、目尻の蔭から徳兵衛は顔を出て此小三と云ふ藝妓を見ると「ア」と云つた儘ま身体が利なくなつた、立上らうとしてドタリ倒れた 甲「オイく 乙「何だ 甲「紙屑買が藝妓と聞いて、コウ轉倒れやアがツた、然も半金拂ひだ色氣のねエ野郎じやアねエか、徳兵衛は漸うく、の事で腰を延しながら跡を狙るともお

百は知らない 百「お母アや今歸つたよ、雇ひ婆アの虎と云ふのが「姉さん御早う、と出て來る箱屋は「姉さん有り難う」と禮を云つて歸る、座敷着の儘でお百の小三はゴロリと轉がりますから 虎「姉さんや其着物ぢやア困、とすねエ……姉さん着物を替替て御寐なさいよ」と云つて小三を介抱して居る中に台所の水口から徳兵衛飛込んだ「此の阿嬭ア何うして呉れう」と潜り込だが平生か、野郎(重兵衛)でも阿嬭(お百)でも出遇した時には此儘で敵はんと思つたから鉄砲策の中に鯨切庖丁を研ぎ澄して突込で置きました、それを持てお出子の鉢巻、額の上でシツカリ結んだが其垂れが鼻の上までダラリと下つて居る、尻も八分三分なら好いが五分つとのチンく端折りお負に疝氣の罫九が半分はみ出して居る、ヨロヨロに飛込んで來たが馴ない人の家に狼狽て入つ

たから右の出子額を水煎に打附けてバツタリ「アイタ、ウーン」お百は喫驚り振返つて見ると臺所に仰向に倒れて居る中風病は現在自分の置去の亭主で、倒れた儘で急に起られないから手をはモヂく動かして鯨切庖丁を振廻して居る 百「堅からとしよう徳兵衛さん 徳「和女やア己を棄て……百「そりやア無理も無い處だが盗人にも三ツの理は有ると云ふから、好く氣を鎮めて聞いてお呉れよ、元來を云へば和しやアお前の家來たり其後は女房サ、成る程お前を棄た様なものだけれども、通り私の言ふ事をお聞き、其上で切るとも突くともお前の云ふ儘に任せるが、お前が甲州に金を取りに往てから廿日の餘も待て居たが何の音信もない、其時重兵衛さんの言ふのには徳兵衛さんは勝沼と云ふ所で金を取ては見たが未始終の目的は附かず、根が馬鹿で無い人だ

から勝沼か猷澤か、其處から東海道に出て大阪の知
 巳を頼み何とか取り附くと云ふ考案を出したに違ひ
 ない、ト云つてお前を連れて行つた日にやア物も費
 るし仕方がないから置去に爲たのだから、モウ此迄
 になれば徳兵衛さんが棄て行つたて相違ないから、
 私も便々とお前を預かつて居る譯にも行ない、お前
 か知つての通り徳兵衛さんにも一兩上げたが私も乗
 り懸つた舟で仕方がない、と云つて澤山は出来な
 がお前にも一兩上げるから、何卒此に大阪へ歸つて
 徳兵衛さんと夫婦にお成りと言ひなさるんだが、
 重兵衛さんだつて十兩か廿兩呉んなさるなら又方の
 附け様も有るけれども一兩二兩で体動かし様の無
 い、口惜いとは思つたが今更ら故障を言出すことも
 出来なから寧ろ雇ひ奉公に御念して、身を委し
 たのは悪かつた、悪かつたと言ふものゝ私は心ま

で委せは爲ない、ヨ宜いかい、一頃二合半に居る中
 に此地へ出る相談が出来て、ソレから支度の着物か
 ら履物やら又廣めの金銭やら彼此れ二百七八十兩は
 出て居るが其とても今日まで一日も休んだ事はな
 から、モウ彼はれ小一年に二百や三百の金は取返し
 たらう、縦合其の取返しを仕ない處がお前此から
 妾を連れて逃亡する氣なら、ナアに人の女房を抱寐
 こう仕ないが今迄自由一稼がして居た重兵衛、何と
 而倒を言つて来るも私は屹と立派に言聞いて見せる
 氣だよ、さうして私とお前と銚子と云ふ所が好き
 云ふ話だから銚子の町で一稼き、ソレから新潟に往
 て又越前の福井へ出て一稼き、其金を持つて大阪に
 立ち歸り二人暮しで私は江戸風に上方を取て押へ、
 お前さんは元の身分に迄仕上げて樂隠居にさせる目
 算、ソレで今日までお前さんの身の上安全の爲めに

客商賣だから酒は断れないか茶断ち断ちして居
 るの、清正公様の願を掛て此頃はナンだか夢見が好
 いと喜んで居る其悦びが表裏に、言ひ譯が届かずに
 ……ソレはもう家來なり女房なり家出を任たのは重
 々妻か悪かつたから、突くとも切るとも何うともお
 前の勝手にねし、私はモウそれ丈さへ云て仕舞へば
 残り惜いことも何にも無いから存分に…… 徳一ハア
 ……我方夫りや真かや、左様とは知らずに……」女
 が好いのには藝者に成つて居るからブーンと麝香の香
 をさせて首玉を腕に抱へ込れたから野郎スツパリ許
 され込で、細で細げた海鼠の様にうグタク〜に成
 て仕舞つた、杖に刺ありとも見ぬ薔薇の花、蛇食
 ふと聞けば恐ろし雉子の聲、憎むべきは毒婦のお百
 後年是れが姫姐のお百と唄はれます、彼の天竺にて
 は華陽夫人と云ひ、唐土にては姫姐と云ひ、日本に

於ては玉藻前と云ふ、名前が三度變りましたはせの
 悪狐に等しき女だと云ふので姫姐のお百と籍名をさ
 れまする、憐れむべし徳兵衛はお百の爲めに砂村と
 云ふ處に引き出たれ弄殺し同様に殺される、此も海
 坊主の怨念、恐ろしいは物の一念でございます、
 (第五席)
 深川の西横町と申すは八幡様の御鳥居、俗に深川の
 一の鳥居と云ふ、彼れから左へ切れる横町が西横町
 、其の西横町の角から二軒目の處、彼處に番紀の國
 屋文左衛門の井戸がございます、此處が紀文の舊地
 ださうで、左の角から二軒目が藝者小さんの家、家
 名を美濃屋と云ひ藝名が小さんで本名がお百、其時
 は廿四で御座います、標致は素よりの事、酒が飲け
 て調子が好つて唄が巧いと云ふのでございますから
 當時此邊切りの流行妓、彼の八幡鐘の「さぬ〜」の

百おの姫姐

情を知らば今一つ虚にも撞けや明け六ツの鐘」と云ふは三陀羅法師と云ふ近い頃の狂歌師の句で、其頃は明け六ツよも外に八幡鐘は撞きませんが今では何うございまするか、お百は徳兵衛を甘く欺めて逃亡てるご云ふので砂村と云ふ所ろまで伴れ出します百「徳兵衛さん此處は砂村と云ふ所ろだよ、上考から江戸へ來ても木場から砂村を見なければ江戸見物に成らないと云ふ位、晝間見たら何んな善い景色だらう 徳「百や、大層淋しいのウ 百「淋しいけれども景色は極く好い所ろだよ、併し此處を通らないと行徳へ往く船に乗ることは出来なから早くお出でよ、ソレに目方が些と重いが此の包にやア三味線や頭物の物から履物まで入つて居るよ、此さへあれば何處へ往ても稼業が出来るからお前辛抱して背負て御出でヨ」トウ、此の重荷を背負して欄干の無い土橋

の上に引き上げた 徳「百や危ねエなア、と云ふのを遣り過して背後から腰車をドーンと力任せに突ましかから溜らない、只さへ危ない中風だのに腰車を突かれてもんどり打てドブリー、ドブリー、ブリー、一時は沈みましたが水防杭に手を掛けてグーツと伸び上つて怖ろしい顔をして 徳「百、和女ア已を殺す氣だナ 百「殺す氣でも無いけれども、お前が其の汚ない中風で彼女は舊家來だの女房だのと評判される色を商なふ、蕪者稼業が出来ないから、背に腹は替られない、據るなく殺すのが長い間思を受けて其恩返しに痛い様には殺さない、二ツか三ツが皮切りだ辛抱おしよ」と吾妻下駄を振り上げて眼の上の邊をしたゝかにボカリ打据ましたから、又た水の底にズブ、ズブ、亭主を踏附にすると云ふことはありませすが、お亭主を踏潰したのはお百はか

百おの姫姐

り、暫らく水の面を眺めて居たが愈々安心したものと見えて、小袂さりと取上まして跡に証據の残りん様に西邊の物を取片附け悠々として立ち歸つたのは、なか／＼悪黨で無けりやア出来ません、處へ何所から出ましたか天窓の上をフワリ／＼と飛で居る八魂 百「徳兵衛さん大層早いねエ」と妖怪では海坊主が魅いて居るから恐れ無い、お百の方が本家だ、一の鳥居の西横町の巳れが家の水口から入ると、強の上をベタ／＼血泥の足痕が附いて居る、佛檀の位牌も落ちて居るから大概の者なら驚きますが、モウ魘魅では右に申す此方の方が問屋ですから吃驚も爲させん、翌日の朝 雇婆のお虎が來て 虎「姉さん今日は何…… 百「オヤ婆やさんかへ、昨夜は熊井町の娘の處へ泊つて來たのかへ 虎「ハオ昨夜は娘の處へ…… 百「婆やア、昨日の彼の紙屑買子、彼れは

大層上方で御恩になつた知己の人で、妾か蕪者をし居ると云ふのを聞いて尋ねて來て呉れたんだが、ア、落魄たので少し氣が變になつておんな根もないことを言つたんだが、妾か好く理解と言つたら自分が悪かつたと思つた様子、アから昨夜も御酒を飲せてお金を遣つて歸したが、併し今に義父さんが歸つて來なすつても知ての通り、苦勞人の旅小間物屋の重兵衛さん、迂可したことを言つて体好く身を引かれて仕舞ふと此迄の苦勞も水の泡、だから何卒老婆や、アノ重兵衛さんには紙屑買の來た咄なをしてお呉れでないよ、と幾許か紙に包んで御金を遣りませす、悪事をするだけに中々届いて居りませすから雇婆やお虎も微笑顔 虎「エ、も言へど仰つしやつても申上けるやうなことはございませんと」其日も彼是れ暮れてしまつた、十時近い頃「オイ」トン、

百おの妃姐

「帰つて来たのは旅小間物屋の美濃屋の重兵衛
 「小さん家か 百義父さん御歸り、妾は今座敷から
 歸つて来た所、さうして義父さんお前何處から……
 重「荷かつきの重吉を連れて、日光街道の糟壁から
 百「老婆や義父さんが歸つて来なすつたから、早く
 手傳つて荷物を座敷に上げる様におしよ」と格子戸
 を一枚抜取て旅小間物屋のことだから悉皆道具と家
 に上げる 重「ア、草臥れた、小さん一寸湯に行て来
 るから酒と肴の趣向をして置て呉れ、と此から重兵
 衛は着物を着換しドテラに平くげと云ふ容で手拭を
 下げ徳井町の潮ッばい湯に浴て歸つて来る、此方は
 藝者屋ですから何か一寸ビリした二三品で酒肴の趣
 向もチャンと出来て居る、重兵衛は座蒲團の上に胡
 座を掻て 重「コレ重吉 重吉「ハイ 重兵「日光街道の
 宇都宮が好いの中仙遊の高崎が好いのが京都が好いのが

大阪が好いのだ云ふが、姉婦附で旨い物を食ふなア
 江戸に限るせ、酒が好いに肴が好い、澤山飲め……
 重吉「リニ被仰る通り結構で、親方ドウも有難うが
 す 重兵「小さんや、今日は座敷を断つての、久し振
 だから緩くり一盃飲ひが好い……、此男ア已れが荷
 擔をして貰つて居る重吉と云つて元は佐竹様の御領
 分出羽の園秋田郡小町村の百姓よ……此女ア手前に
 已が咄として置いた娘の小さんだ、此も妙な縁で親
 となり子となつて斯うやつて此女が藝者稼業をして
 留守をして呉れるのだ、マア近縁になつて呉んな」
 と引合せたから小さんと重吉は何心なく顔を合せた
 がどうした譯かハツと驚いて左右に退いた、變だナ
 と思つたが流石は勞苦人の小間物屋の重兵衛何にも
 言はんで酒を飲んで居たが 重兵「重吉、明日が早い
 から飯を食て寢ろよ 重吉「親方へ私は御酒を戴くと

百おの妃姐

モウ御膳を戴く方角もございません、久し振で結構
 の御酒を戴きましたから、エー、十分に酔ひました
 ……姉さん御先に御免なせエ、と荷擔の重吉は二階
 に上がる、後は小間物屋の美濃屋重兵衛と小さんと
 二人ぎりの差對ひ、雇婆アのお虎は能井町の娘の處
 に往つて仕舞ひ、是から二人で獻へつ酬へつ酒を飲
 んで居たが 重兵「小さん 小「エ 重兵「アの荷擔ぎの
 重吉と先刻顔と顔を見合せた時に重吉も汝も後へ身
 を退いたナ、何だか拍子が抜けか様な素振をしたが
 アリやア一体何う云ふ譯だ 小「お父さんへ、お前さ
 んにもいつか御話申した通り前の桑名屋の旦那と一
 緒に大阪を後に出て来る時に、三州の池鯉鮒の吉田
 屋に泊つた時、小間物屋に百四十餘兩と云ふお金を
 胡魔かさられたと云ふ事はお前さんにも言ひました
 が、其の胡魔ぐるみ盗た胡麻の細は那男ですよ、ソ

レで妾も吃驚りしたし彼の人も吃驚したと見て暫
 時何の咄も……ソレで當人も妾も身を退たんだヨ、
 その泥棒はアレでさアね 重兵「さうか、伊小さん
 や和女アア、世間に似た人も有るから人遣エかは
 知れねエが、あの桑名屋徳兵衛と云ふ人は大坂川口
 の廻船問屋で、和女の爲には主なり亭主なり、大恩
 のある人ヒヤア無エか 小「さうサ、 重兵「其の大恩
 の人か甲州に金を取りに行つた此後で、氣まづい事
 を言ふ様だが俺の方から和女に酒の酌をして呉れ、
 今夜は同衾に寝て呉れなると言つた事は無エせ、い
 つも和女の方から膳を据わ面白う好笑く綾なされた
 から其處は年を老ても男だ、若けエ女に膳を据へら
 れちやアのう、ウンと言ひもするだらう、所が和女
 の亭主の徳兵衛さんが甲州へ金の才覺に行つた後で
 二合半に身体を隠して丁度足掛二年、モウ徳兵衛の

熱も脱けたらうと云ふ處から此家を買つて、着物から物の頭から長襦袢から二百六十何兩と云ふ御金を出して其から毎日の様に和女か座敷へ出て稼いで呉れる、ソレは好いワ、ソレは可い己が留守へ前の亭主が紙屑買は成つて尋ねて来たものを、何も砂村へ連れ出して……和女が殺して仕舞には及ぶめエ小「エ、……妻が、お父さん何時其様なことを……」

重兵「白を切るなら言つて聞せやう、己が甲州から日光街道の粕壁に居て、和女が前の亭主を殺した事を知てる譯がねへちやア無エか、己の身体が元と通常の身体で無エからこそ粕壁に居て和女の悪事を知つて居るのだ……和女も知つて居るだらう家の門に毎日御餘飯をと言つて来る乞食の、ソラ好く門口に寝て居らア、彼の乞食はノウ、己が子分の甲州身延無宿の金五郎と云つて元は彦根の掃部頭様の浪人、

悪事を働いた爲めに江州を永のお暇、浪々中に宇都谷峠の人殺し、仔細の七乃公と兄弟の好をした彦根無宿の金五郎、乞食になつて家の容子をアノ金か見て居るのだ、スルと昨日のこと紙屑買が鐵砲旅を連れて来たが暫らく経つて和女と二人で戸外に出で往く、流石に金も悪事を爲て居る身体だからこいつ變だと思つて跡を狙つて砂村まで行くと、土橋の上からお前が其の紙屑買を引提へて、二ツか三ツが皮切もた永い間恩を受けたから痛い様には殺さんさ辛抱をしよう、と云ふ様子を直ぐに粕壁まで金が知せに來て呉れた、それから俺が、金やうりやア前の良人の桑名屋徳兵衛と云ふ者だらう、甲州に金の才覚に出で行つた其後で二合半に身を隠し、それから女に深川の家を持たせたのだが多分野郎が尋ねて來たのを小さんが騙くらかして砂村で打殺したんだら

う、好い腕だ、己は娶めたが他の者は娶めは仕ねエヨ、小遣でも遣つて騙かして歸して遣れば別に斯うと云ふ騒も有るめエに砂村まで連れ出して殺すとは、と云つたが兎に角度胸と仕打にやア驚いた、扱此から此方等の身の上だ、之を言はなきやア安心しめエ、二階に居る奴は秋田無宿の重吉と云つて先刻言つた佐竹様の領分の百姓、東海道の胡麻の蠅、戸外に居る奴は彦根無宿の金五郎、己が甲州の半破り荒川無宿の彦五郎、甲斐の國でも人に知られや悪黨だが獄舎を逃げる時周章で追れ抜いて、それから旅小間物屋の重兵衛と姿を變へて斯う濟しちやア居るが、甲州の荒川の彦五郎とは己の事だ、和女は亭主殺し、己は半破り、丁度好い夫婦が出來た、改めて和女も二階の重吉と昵懇に成んなせエ……重吉……重吉「穴倉に檢使の下りた様にニコノ笑ひ

ながら下て來た、重吉「姉さんへ、御免なせエ、池鯉鮒の吉田屋で胴巻ぐるみ百四十餘兩をチヨロまかしましたけれども其時に、好い纏致だナア此れを江戸に連れて行つて磨いたならば、滅切り水際立つて美しい女に成るだらうと思つたが、其の通り大層纏致を上げなすつたが、腕も確かり上げなさいましたナ、アノ時の御方が御亭主だらうが、其の御亭主を砂村でお殺しなさる程の腕があらうとは思はなかつたが……」

重兵「マア重吉、餘計な事を言はなエで戸外に寝て居る金を呼べ」と言はれて重吉は立つて潜戸を開けて、重吉「金や、……金……金五「何だ、重吉「親分が用があるよ、金「用があるなら静かにして此方へ來い……親分からして其様な事だから食エ込むのだ、重吉「寐て居る癖に半間な事を云ふナ、金「手前の方が半間だ、先刻から厭ナ奴がチヨロノ通るから己

ア考へてる處だ……毎度御餘飯を有り難う、へい唯今立つて参ります、へい私も病氣でさいますから、ア、ア、苦しい」と四邊を見廻して産根無宿の金五郎が美濃屋の台所の水口をコックと叩く、内からは締を開ける、着て居る筈を脱ぎ棄て乱れた髪を撫で上げ其處に手を突いて「金へい親分……宇都谷峠の人殺し、其の時お前さんに助けられたから何處までもお前さんの仰しやう附けは遣る積りだが、乞巧だけは何うか後役に吩咐て貰れエてへもの……姉さん、へ、度々御餘飯を有り難う、ダガ一昨日の鱈は腐つて居りましたチ 小「オ、お父さんの親縁ならアンな物上げるのぢやア無かつたが……金姉さん、二ツ三ツが皮切だ、永い間御恩に成つたから痛い様には殺さねエ辛抱しなよ、と云つた時は脊後へ廻つて已ア音羽屋——と言ひたくなつたつけ、好

度胸だ、流石の私も其時は驚きましたよ、斯んな可愛顔をして彼んな事を爲なされるかと思ふと實に恐れ入りました、親分へ盗人は晝寢も心無くては仕無エと云ふが、何か御見込があつて日光街道糟壺から歸いて來なすつたかい 重兵衛「外の事でも無エがナ、壁槽の常盤屋の家で重吉を相手に己が酒を飲んで居ると、戶外を通るのが佐竹様の御飛脚を追駈けたが情けねエかな味方は重吉、他の者と違つて劍術を知らぬエから、金を持って夜道を恐れぬ彼の奴を遣損なつては一大事と思ふから、ソロソロ跡を狙つて見ると小名木川の屋敷まで引き入れたが、其時己が思ふには、金が居たらば力もあり劍術も出来る、此の御飛脚の持金を分奪くるのは遣作もねエが重吉じやア仕様が無エと、看すく小名木川の下屋敷まで突留といひ急いで此處まで引返して來たのだ、金、此

から手前手を貸して呉れ、引返して行つて彼の飛脚が金を渡して手元に無エならば行掛けの駄賃だ、下谷の佐竹の金藏の戸前を折破つて金を盗らうてんだが、ドツ金……金親分、貴公が思ふ通り、小名木川の下屋敷か退しは下谷の金藏を打破つて、首尾克くマア盗んだとして其時は割前は……マア何んな物でせう 重兵衛「己の見込みは先づ五百兩だ、千兩と云ひてエが五百兩として、其れからは順割だ、五百兩なら半割が百兩、重吉が百兩小さんだつて兎狀持ち、若しも御用だつと十手風を喰つた日にや三尺高へ木の上で田薬刺にならねやアならねエ身体、だから此れを百兩遣ることにして、ソレで残つた二百兩、其の二百兩は己が紀州の高野山から和歌の浦へ出て彼處から周防の錦帯橋、歸り掛けには有馬の温泉、京大阪を経廻つて見物したる後のこと、運かれ

速かれ善提所は鈴ヶ森か小塚原……金「其れでは親分、見込み通りに行たら私か百兩重が百兩、姉さんが百兩に親分が二百兩、金を取つて攝州有馬の温泉で湯治をし中因筋を経廻つて始終は小塚原か鈴ヶ森御仕置の覺悟をするからにやア、親分善は急げですなア」窃盗をするに善は急げと云ふ事、無いがさう云ふ量り方だから悪事をすると見えや、甲州の半破り荒川無宿の彦五郎、出羽の國秋田の郡小町村無宿の重吉、江州彦根井伊家の浪人彦根無宿の金五郎と云ふ此の三人が打連れ小名木川、佐竹様の御金藏を目指して参つた、佐竹の七ツ藏と申して、御土藏が七ツ並んで居る、此は右の小名木川の方の七ツ藏、其中の右から三番目の御金藏、扉に手を打掛けたがと思ふと跳越た重吉、舊當屋敷に居りましたものですから邸内の容子は委しい暫らくして練

塀を再び跳越してヒラリと門外へ出て、重吉、飛脚は金奉行に金を渡して心が緩んだんが好い心持に寢込んで居やすが、肝腎の金が無エから仕方が無エ、それから金奉行の預つて居る金蔵の合鍵を此の通り用箱から引出して来たから、サア、斯うなれば千兩盗うと二千兩盗らうと乗る命は同じ事、親分御金蔵に入りやせう……ヤイ金……手前先刻何んど言つた、些と位、劍術が出来たつて已れが合鍵を盗んで来たさやア、手前なんを幾ら威張つたつて仕方がねエ」と是れから佐竹様の御金蔵の戸前を左右に押開いて御金を盗み取りまする

御咄變つて此方は御金奉行の戸塚九郎兵衛どの永らく御留守居役を勤めましたが其御役を御免になつて御下屋敷の金藏番方は會計を致して居る、會計とは當今の言葉で昔は御屋敷御元締、其元締が算盤を取

つて万端の御入用を濟して遣はされる、其の御預りの金蔵を破られては藩主に對して申譯も御座いません、今小名木川の金蔵に賊が掛るとワソワソ、ワソと云ふ犬の吠へ方、合點行かじと岸破と刎起き金蔵の合鍵の入つて居る皮文庫の鍵を調べて見ると無残やナもうない、扱ては賊が掛つたなと思ふから傍に寢て居りました、御子息の戸塚四郎三郎に向ひ起さろ、と聲を揚げたなら賊に氣が附れんと、八尺柄の小槍を挿込んで石突を以て枕をドーンと突きましたから、四郎三郎ハツと兩眼を開いて見ると父親はモウ槍を小脇に挿込んで椽側傳ひに駈け行く様子、扱てを盗賊をさんなれと後を慕うて續いて出まする、戸塚九郎兵衛どのに於ては兩戸を蹴破つて飛び出しさま矢庭に、ソレツと目に留つたは甲州の半破り荒川無宿の彦五郎、今は偽名的美濃屋重兵衛を目掛けて

ドーンと面部を突上げた、ヒラリと体を換はす機曾に小鬚の所をブツリ突切つた、アツと言ひ様剛氣な奴ではあるが後の方に踏跟ツと踏げるを今一足踏込んで再び突掛やうとする九郎兵衛、アハや彦五郎はど思ふ突端に江州彦根無宿の金五郎、何時の間にか懐ろに種ヶ嶋を用意して居つた者と見てドーンと一發、響と共に九郎兵衛どのウーンと言つて其處に倒れる、御子息なる戸塚四郎三郎どの、父上が今銃音と共に倒れるを見さや否や、鉄砲の煙の未だ消ぬない中にオツと叫んで金五郎を自掛けて切り込んだが、名に負ふ彦根の藩主掃部頭様の浪人とあつて劍術も好く遣へる者ですから心得たると受け流した、けれども小さな種ヶ島だから十分に受け切れません、ヒラリと體を外したから斜に流れて横巻の外れを斬下られた、アツと云ふのを飛び込んで今一刀バ

サアリ、即座に父の仇は血煙立つて斬り落しましたからうれに驚いたる重兵衛の彦五郎、金五郎の死骸の倒れるより早く、逆も敵はんと松の枝に手を掛けてヒラリ彼方の塀を飛び踰た、追駆け来りし四郎三郎、汝と云ひ様小柄を手裏劍に打ち掛けたかヒラリ體を轉したから其小柄は袖下を縫つて彼方に飛ぶ、此方も後れと遣らじと松の枝に乗り上つて八方をキツと睨み付けたが、其前にある小名木川の流れ、件の曲者は「水音高く飛び込んださぎも何う逃げたか後白浪と消え失せてそれツきり、名にし負ふ甲州の荒川と云ふ川で水練を習つた彦五郎だから川下に降つたら、後を狙けられ様と故と川上に水底を潜つて橋の下に行つて様子を窺つて居た、暫らく經つて漸々のことで濡鼠のやうになつて右の深川の藝者屋小三の家立歸つて来た、

其前に千兩は重吉が引擔いで歸り、二度目に引擔いで居たのが一乾兒の例の金五郎、第三度目の處を金奉行の九郎兵衛に、曲者と槍を附けられその槍を切ッ張つて逃げやうとする所を金五郎の援けによつて、鉄砲で打殺したが右の騒動、サア其處で盗んで来た金を取り出して見ると刻印打ちだ、佐竹の刻印打だから使ふことは勿論出来ず仕方がない、今夜の中に立退かないでは危険と思つたから例の重吉を連れて重兵衛は夜立ちで御座います、信州の戸隠を隠んで身を逃げて参ります、此方は前の佐竹の屋敷では上を下への大騒動、戸塚九郎兵衛は殺されましたから、戸塚四郎三郎政伸は父九郎兵衛の御預りの千兩、御上の金子紛失に付き向ふ五年の御暇を願ひまして、父を殺害したる仇を討ちたうとござる願ひ出ましたから、佐竹様よりは早速御暇に相成り立出でます

と云ふ、
扱て御話變つて例の姐妃のお百藝妓の名前小さん、今の良人の小間物屋重兵衛は甲州の半破り、巨摩郡荒川無宿の彦五郎、佐竹の寶藏を破つて大金を持つて来たならば、當分商賣も休んで病氣と托附け樂に浮世を送つて行かうと思ふ、其の考へは皆外れて折角盗んだ千兩は刻印つき、遣ふことが出来なから四年と五年は何うか工夫をして居て呉れど、小さんに話しを致し其金は重兵衛が皆持つて往つて仕舞たから後に残つた小さん、亭主殺の罪で寸手風を食やア三尺高い木の上で田樂串になる身の上だから何をすることも手が付きませぬ、纏まつた金が欲しい〜と思ふから二分や一兩の祝儀で、酔狂人の機嫌は取れない是れや無理もありませぬ、延享の元年正月の七草に戸外の方には散ら〜〜〜雪は散ら附く〜

…大層雪が降るなアと獨語を言ひながら、藝者の小さんは御客様の御座敷を断はり、女中は用かあつて舞家へ歸りましたからタツタ一人、藝妓のことでゆゑ爪弾で小歌を詠ひながら御酒を呑んで居る、折柄入口へ門附が来ました、唯今の門附けと云ふものは新内節でございするの、或は義太夫だのと云ふのを語り申すが、昔の門附けは小唄を誦つて一錢二錢と貰つて歩きましたもの、だから極上品でございす、どうも今の新内節など云ふものは甚だ下等でございとして、聞かれたものではありませぬ、新内節だからと云つて何にも無暗に鼻へ掛けるには及ばす、さう轉がすには及ませぬ、悪口は新内無理こそろがしと云ふ、彼れは上等社合には余り聞きませぬで、下等社合の裏店などの珍にするのが新内節、其の古へ鶴賀新内と云ふものが落毒で鼻が落ちました

、けれども聲が大層美うございしましたから附鼻をして語りましたのが新内の初め、うれゆる妙に鼻に掛け調子、この延享、元文頃には小唄の誦つて一錢二錢と貰つて歩きました、其の頃の端唄に
雪はしん〜夜もその通り、どうせ来まいと
まんなかに一人ごろりと肱枕、ポーン、ア、
寝られぬ
と云ふのが昔の小唄、オヨイと聞くと間拔のやうに思召しませうけれども如何にて高尚なもの、種々小唄の御話もございすけれども長ければ之れを省くことに仕り申す、さて其間附の音調が病後と見えて聲はしわ噁て居る、三味線も破れても居るか胸鳴と云ふものがしまするが、音締と云ひ聲の取廻しと云ひ確かな胸前な者、自分も藝妓嫁業で今日を送るから末聲は變つて往くと云ふものは言ふに

言はれぬ音締の調子に感心して聞いて居るところへ
 入口をがらりと開けて「金」エー御免なさいまし」亭
 主殺しの兇場持ちだからガラリ開られても少しも油
 断を致しませぬで、煙草盆の火入に手を掛けて「百
 誰様エ」御用と言へば其火入を眼潰しに打つて逃げ
 やうと云ふ覺悟「金」姉さん、私で……「何んだね
 エ、ビックリした、お前は金どんぢやアないか」金
 「へイ箱屋の金でございます」百「何んの用だエ」金
 「へイ此の間子、八幡様の額堂の御修復で頭か姉さん
 かど御金を集めました、見込通りより大變廉く出
 来ました、度々皆さんに厄介になるからこゝは割返
 して置かうと云ふので半分の割返しになりましたが
 、御隣家小金さんは御留守ですから、姉さん恐れ入
 りましたか明日御届けなすつて下さい、貴女の分が
 これ、是れが小金さんの分で一分二朱づと」小「金

どん、頭も堅人だねい、藝妓のあぶく銭だ餘計に取
 つて置いたが宜い、ナニ構ふことがあるものぢやア
 ない、けれども小金坊は親がよりだから明日私か届
 けて遣る、私の分は御遣ひ賃として金どんね前に上
 げるよ」金「さうですか、是はせうも有難うござい
 ます」小三「先刻から一人でお酒を呑んで居るが一人
 で飲むとサツパリ旨くない、何んだか酒が酸なるや
 うだから、止さうか止さうかと考へて居るところへ
 今門附が来た、音締が宜くて聲の取廻しが宜いから
 感心して聞きながら一杯旨く飲んで居る途端にお前
 が来たのよ、マア一杯御上り」金「へい、さうですか
 、御金を戴き御馳走になつて小歌を聞くなんて、甘
 酒で行水を使ひ牡丹餅で頬脣を敲かれ砂糖の木へ登
 るやうだ、有難うございませす」
 又もや彈出す三味線に

待乳沈んで梢乗込む山谷堀、土手の合傘、か
 たみがはりの夕日暮
 なぞ、語りましたが實に感服なもの「金」姉さん、さ
 うもエライものですな「小三」私ア先刻から大變に聞
 いて居るんだよ、私もマア上方歌の小三と言はれて
 上方歌でせうか斯うか皆さんに姉さんと言はれるや
 うになつたが、せうも彼の門附けの節の取廻しには
 感心するよ」と云ふ内に箱屋の金公は何思ひけん戸
 外へ出ましたが眞背になつて「金」姉さん入口に立つ
 て居るのは大變なものです「小三」何んだい、戸外
 に立つて居るのは大變なもたなんて眼でも二ツある
 のかい「金」ウン、其の癖一ツで……「小三」腰から下
 でもないのかエ「金」腰から下もあるがね……彼りや
 ア此の御姉さんに御話申した太田屋の峯吉と言つて
 深川七塲所で隨一の藝妓、齡こそ取つて纏致は悪い

が木塲の旦那衆や十株の旦那、御留守居方は皆な太
 田屋は峯吉の三味線でなけりやア酒は旨くないと言
 つたはせ、其のお方が日光街道精壁の近江屋さんと
 云ふ大した米屋の旦那に落籍されましたゆゑに峯吉
 さんは幸福せだ、全体彼の人は心懸けが宜いからと
 褒めちぎつて居た其峯吉さんが今見りやア眼が潰れ
 て彼の通りの門附け、藝妓や遊女の果は姉さんの前
 で済ませせぬが彼様ものか知ら、其の上汁を吸つて
 居る箱屋の金が考へたらジツとして、今の内鍋
 屋横町の地面でも買つて置かうかと、私は妙に考へ
 込んだら急に寒気がしました「百」何んだねへ、お前
 はくだらないことを言ふ、それぢやア太田屋の峯吉
 さんと云ふ評判の姉さんが其様になつたのか子、
 氣の毒なこと、御酒は好きか子「金」エ、モウ御酒は
 飲みます、一つはそれで眼が潰れたのかも知れませ

ぬ、確か近江屋さんに落籍されるまでには峯さんは懐妊で居りましたが、丁度十三四年前でしたから一緒に附いて居る女の子は其時の子供でせうが、竊に人の盛衰は知れないものです」百「金さん、喚込んで一口飲ませてお上げ」金「さうして下さるやア姉さん有難うございます、私、彼のお方では大變金を儲けました」と話をして居る中に此方は「有難うございませう」と向ひ側の家で鳥目を貫ひ子供の手を引かれて往かうとするから 金「ア、モシ峯吉さん……お峯さんや」と呼ばれまして 蜂「オヤマアせうしたら宜うございませう、アノ私を御存知で……」金「オヤ箱屋の金です、峯「オヤマア金さんでございませうか」昔は金さんと喚捨てても今は金さんと言はなければならぬ非人の境界、金「エ、マア色々御話がありますから峯さん此方へお遣入んなさい、坊やサアお母さ

んの手を取つて此方へお遣入り、娘は前垂を被つて雪を凌いで居たが其の前垂を取つて母の雪を拂ひ勞もくく「サアお母さんお遣入りなさい……有難うございませう」と其處へ両手を突いた十三歳ばかりの女の子、ドゥも美しい細致だから毒婦小さんのお首はチロリと眼を着け、ア、美しい娘だ、コイツ種に使へば一狂言言けると忽ち胸に浮んだ 金「母もお前さんの噂、此方の家の御主人は美濃屋小さんと言つて七福所隨一の彈手の姉さんだが、お前さんの三味線聞いて感心なすつた、それでお前さんは姿を見て驚き方が殿しいから、さう云ふ身分の人だと尋ねるゆゑお前さんの話をすると、さう云ふ人なら喚んで一口上げたいと斯う姉さんが言ひなすつた、さうです、相變らず飲みますか 蜂「オヤさうですか、それは有難うございませう、モウ久しいこと眼を病つて居りま

すゆゑ廢めましたが迎ても惹りませぬから折々五匁づも買つて三日位に呑みます、マア御言葉に甘へて久し振りで深川の美味ひ御酒と御肴を戴きます 百「金さん美しい娘だ、幾歳だエ」金「さうです……峯さん此の娘ッ子は幾歳です、十三歳になすつたが年弱の十三歳、金「マア丈恰好から顔容と云ひお母さんよ、遙か上だ、峯さんエお前さんは日光街道糺壁の近江屋さんの御家内におなんなすつたと云ふことを聞きましたが、それからどうなすつた 峯「トウ、身代が潰れかけた 金「ヘエ、日光界限での近江屋さんが……」峯「それはチヨイと相場に手を出したのが夫の過失、先に勝つたのが病付でそれからスツかり財産を潰し夫は去年死くなりました、後借金でドウにも斯うにも法が付きませぬ、途端に私は眼が潰れ、是れが世に謂ふ泣顔に蜂、始めて上つた

御宅様で斯様な御話を申すのは恐入りますが今金さんの御尋ねですから申上げました、是れは私の娘で芳と云ふ者でございまして能くマア孝行をして呉れます 百「金さん、此のお金を、坊に上げてお呉れ 金「坊や當家の小さん様からお金を二分下すつたよそれからは是れが私に今買ひ際のホヤ、で煙の出る一分二朱のお金、頭梁から奉納の割返しになつたのを使からと言つて姉さんが下すつた、私か若い中からお母さんの御世話になすつた、サア坊や是れを上げるよ、芳有難うございませう、眼が見えませぬゆゑに何方に御居でなさるか、さうもお金を澤山に下さいます有難うございませう 百「サア有つた限りのものだが……」と肴を取り娘に食べさせて呉れましたから峯吉は誠に親切なんだと喜んで居る 百「金さんから委細は聞きましたが誠にさうも御氣の毒な

ことでございませぬ……金でん今何處に居なさるか知れないが、私の家は二階か二間ソツクリ明いて居る家のお父さんは旅小間物商で四月に一度九月に一度でなければやア歸つて来なさらないから姉さんは私の家へ来て居て近所の藝妓衆に稽古をして遣り、又此の坊には私が踊を仕込んで遣る、モウ十四五歳になりやア立派なお酌か勤まら十六七歳になつて一本にたり良い御客が付きやア直ぐ奥さんとか何とか言はれるやうになるドウだ子、私の家の二階を一間スツカリ貸して遣るから此處で稽古をしたら、金さうして下さりやア峯さんも大喜びで……峯さん、お前さんもお聞きなすつたらう、峯、モウどうも涙が溢れるはさ有難うございませぬ、實は材木屋の納屋を借りて居りますが、犬小屋とも何んども中さうやうもございませぬ、さうして下さりやア母子が浮み上ります

誠に御禮の申さうやうもございませぬ、後には爲め命を捨てるやうなことになるとは夢にも知らぬゆゑ有難いと禮を述べ、是れからお峯は世帯をしまつて小さんの二階に住むと云ふことに成りました、

(第六席)

「峯」と後には籍名を取る毒婦と知らぬ太田屋の峯吉は、親切の言葉に其の二階を借も受け、是から致して近處の藝者衆に覺えて居るだけの藝を教へ、小さんのお百は上方の端唄や手踊自分の知つて居る丈の事を十三に成るおよしと云ふ娘に教へる、其の月は空しく過ぎ去つて三月迄御話はない、四月の月の初旬小さんのお百が二階に上つて来て、小三「峯さん峯」
小三「ア、上杉様の御留守居役の山田幸兵衛様と云ふのを知つて御居るかへ、峯、知つて居ますか、アノ御方は御廣間の御留守居役で六十位の方で、

「其れでは今の山田さんと云ふのは其の旦那の御子息でせう、三十三で御留守居衆と云ふ者は粹な者だが分ても御容子の好い御方、其の御方が昨日お前の家に太田家の峯吉が居さうだが、已の父親杯も平生養めて居る藝者で、彼の位に出来る者は小さんの前だが七惣所にあるまいと思ふと山田の旦那が仰しやる位では何れ御最負にも成つたのでせうが、當時の所では眼が潰れ十三に成る子供を連れて、妻方に同居、近所の藝者衆に稽古をして居ます、がと云ふと其の山田さんが年を老てもどうか眼を癒して遣りたいと云ふので、それに付ては上杉様の御抱への醫者に樋口源良と云ふ御方がある、京橋での眼科の御上手な御醫者だが、それに手紙を遣るから十分と療治を爲せると左様仰しやるんですが、それでは峯さん上杉様の御醫者、數寄屋川岸に出療治をして

御在でなさる樋口源良と云ふ御醫者の處へ往つて一つ療治をして御貰ひな、峯「姐さん有難う……除り苦勞に苦勞をして血の集る途端に流行眼に取附かれ、うれ是れして居る中に見えなくなつたんだが、珠には何の仔細も無いから御醫者様からは能く療治するやうにと言はれても、御聞の通りの次第で療治がすることも出来ずに居りましたが、仰しやる通り樋口源良様の處まで参つて来ませう」と言つて出て往つた、それから三日計り經つと戸外の潜戸を開けて往つたから、小三「方誰、男、私は日光街道精進宿、殺物問屋近江屋半右衛門の同家近江屋半六と申します、少々御願ひがございまして……小三「何でございませるか、半六「少々御願ひの筋が……小三「何の御用かは存じませんが女主人でございませぬから、其れに適ひ

申すことなら承諾を申しませうし適はんことなら御断はり申さなければなりません、マア御話を成すつて御聞かせなさい 半他事でもございませぬが日光街道 糶壁宿 穀物渡世近江屋半右衛門の女房と申すは以前深川七場所や名を賣りました太田屋の峯吉と云ふ者でございませぬが、それをば半右衛門が身受をして連れて歸り妾にして置きました、それから云々の事により本妻に直した處、去年の春に近江屋半右衛門が没しまして御座います、其の没しまする前に相場でございませぬが、其の相場の爲めに悉かり取られ、随分江戸から日光迄の身代だど人にも云はれた半右衛門が田地畑山林も残らず取られて仕舞つて、私しの店の方は一生懸命に正米を商ひましたから何うなも斯うなり暮して居る處に右申す様な譯で、何うか金子が七十兩なければ命にも拘はる大層と

申しますから無証文で七十兩貸しました、すると其の後又五十兩貸して呉れ、其替りに娘のおよしを書入にするると云ふ事で、マア娘を書入にしましたが親子の中でも貸金は他人ですから娘のおよしを抵當に二度目に貸した五十兩、到頭去年の春半右衛門が没しまして子、峯吉さんに向つて何うして下さる最初のが七十兩二度目のが五十兩、然かも後の娘が書入に成つて居ると掛合ひましたら江戸には幾らも親類も御座いますから、それと相談して決してお前さんに御損を掛ける様な事は致しません、今兎や角う云ふと佛が行く處にも往かれないから初七日の過ぎる迄打棄つて置いて下さりませぬ、決して御損を掛けないからと云ひますから、同家の事で有つて見れば私も施主に立つて見事葬禮は出しましたからそれから初七日経つか過たない中に今の峯吉は娘を連れて何

處へか逐電、餘も仕打か惜らしいから草を分けて詮索すると今では御當家の二階を拜借して居ると云ふ事、それ故私しはお峯に遇つて後の五十兩、其の金が出兼ねエなら娘およしを連れて往くと云ふ咄を仕様と思つたのですが、御留守の趣きは承知致したが貴婦様から當人へ糶壁宿の近江屋半六と云ふ者が、前金七十兩後金五十兩棒を引いたが、其の代り彼の娘を連れて歸つたつて仰つしやつて下さいますし、証文が此通も物を言ひますので、小二「初めて御目に懸りますか、お峯さんと云ふ方は眼が不自由で日外や門附を仕て居なさるから昔しの名前もある一近所の藝者衆に稽古を爲せたら幾らかの助力にも成らうし、妾の覺えて居るだけはおよし坊に稽古をして遣つて來年になれば美事御酌に出られる、二三年も経てば一本の藝者に成られるだらうと斯う遣つて親

切に世話をして居る、處か、峯さんは背く眼が悪くなられるから或る御醫者様の處に療治に往つてなる所なのです、ソレに今其の留守に書入に成つて居るから娘を連れて行くと云ひなさるが、當人が承知の上なら兎も角もそれでは妾の親切も無になる、只だ証文か物を云ふと仰しやつて証文敷を叩いたつて何にも証文か此のおよし坊を引張つて往かうと云ひはしない、ヘン妾は未だ証文か物を言たのを聞いた事もなし見た事も無いよ、兩國じやア膝で煙草を吸ふのは見たが、証文の口を利くなんて有るもんか子 半六「馬鹿な事を言ひなさるな」と一つ云ひつ云ひ争つて居る中段々劇しくなるから、長家の衆も出て來ましてからは、何う云ふ事か知らないが様子子と聞けば是れくだ、それに煙を叩いて泡を吹いて言ひ掛けても仕方があるまい、何れお峯さんでも

療治をして歸つて來てから十分本人同士で話を
 が好う御座いませう、と長屋の者が話をし呉れま
 したから不承不勝に近江屋半六は、それでは何れ二
 三日経つて参りませう、と戶外に出た後に熟者の小
 三「およい坊や、今の叔父さんをお前知つて居るだ
 らう よし、エ存じません 小三「知らない事はあ
 るまいがね、お前のお父さんの分家だとか言つたが
 お父さんの方は相場をして損て仕舞つたが那の方は
 正米問屋で立派に遣つて居る其の時に、お父さんや
 お母さんが苦勞して家も何も滅茶々になつたから
 半六さんに叫して証文の表面にお前が書入になつて
 居るのだが、妾も彼の權幕で二三日内に又來られる
 と長屋の衆などにも心持の善い事でもない、妾もお
 前をお酌でも一本に迄仕立て上げて善い旦那を取ら
 うと思つて居たが斯うなれば仕方が無い、今も云ふ

通り前金の七十兩は別段だが跡金五十兩を叩きつけ
 て此方で禮証文を一つ取つて遣らうと思ふのだが、
 茲はお前の言ふ事を聞いて暫らくお金の融通に出
 てお呉れないか、証文を取返して禮証文迄取つて置
 かうと思つても母親さんはア、云ふ氣の小さい人だ
 から、此様な野暮を聞かせるも又元のやうに成ると
 御醫者様が折角治した處を悪くして、心持も亦悪く
 するから暫らくお前は吉原と云ふ所に五十兩の質に
 往つて居て御呉れ」ソコは利發の様でも世間知らず
 の娘子で、近江屋の半六と云ふ人は知らないが父親
 さんの借りがあるには違ひ有るまいし、妾しを書入
 にしたと云ふなら妾の身代金を五十兩返して二通の
 証文を姉さんが取つて下されば、妾はお酌に出でか
 ら少し宛でも御返し申す様ナことに仕ませうから何
 うぞ宜しきやうにして頼む 小三「家の主人さんが

居もさへすりやア吉原に遣るなんてへ事は無いが、
 久しい間御留守で今の所内輪が困る、歸りさへすり
 やア、御駕籠で姐さんが迎に往くから少しの内辛棒
 して居てお呉れ、言はれ是れは御金の融通で長屋の
 手前面目もあるからだ、往つてまへ呉れとば姐
 さんは直ぐに後から吉原へ迎に往くよ「唯今の様
 に箱が八釜敷ない時分だから年一杯五十兩、附け込
 みで種々の入費もあるが、詰り手取り九十六兩の奉
 公金、十三や十四では餘程美くないやア買ひませ
 ん百五十兩の奉公金です、世の中に遊女屋渡世程質
 の悪い渡世は御座いませんが、トウ〜九十五兩
 渡しました、元と此の半六と云ふのは本所二ツ目の
 遠摩の久六と云ふ者で、美濃屋重兵衛即ち甲州荒川
 無宿の彦五郎の乾兒で、是れが江戸に來やアがつて
 巾着切り或は胡魔の蜘蛛をして居たが落所から半

「御免遊ばせ、と這入つて來た近江屋半六、前には
 旅人の風体をして來たが今度は怪しい服装をして久
 三「姐さん御免なせエ…… 小三「盲く往つたよ……
 九十五兩手取りだからお前に十五兩遣るよ 久六「エ
 、御用と十手風を食やア三尺高へ木の上は首に乗せ
 にやアならねエのだから、九十五兩の内十五兩とは
 安い物だナア」二ツ目の遠摩の久六には十五兩遣つ
 て残り八十兩、盲目婆の娘を賣つて、姐妃のお百
 錢名の小さんは首尾よく大金を懐ろに入れたが、四
 五日すると峯吉の眼病は大層に宜しくなつて深川西
 横町小三の家へ歸つて來た 一姐さん御陰さまで大
 きに眼が宜うございます、樋口先生の仰つしやいま
 するには身に一人用が足りるやうにならうと斯う申
 します、それに付きましてはアのおよしはどうしま
 した子」と歸る早々小さんに聞きますと 小三「ア、

およし坊から、およし坊は木場の三浦屋さんと云ふ
 材木問屋のお娘さんの踊の相手で、向嶋木母寺の御
 寮へ往つて居るからお前のやうな汚ない婆さんが尋
 ねて往くといかんよ、彼の醜もモウ色氣が出て居る
 から嫌がるゆゑおよし坊の所へ尋ねて往くのはお止
 しなさいよ」と言はれて、茶「さうでございますか
 併し御蔭さまで彼れも大仕合、私も眼は追々宜くな
 ります、生涯此の御恩は忘れませぬ、有難うござ
 います」と其日も過ぎました、それで五六日経ちま
 したけれども何の沙汰もございませぬから「お婆も
 大層心配致しまして恐る恐る、茶「姐さん、ア、およ
 し坊の所へ往つて様子を聞いて来ちやア悪うござい
 ますか、百「お止しなす、お前の様な汚ない婆さん
 が往くと嫌やがるから」と云ふのにお前私の言ふこと
 をお聞なす、茶「さうでございますか」と根が人が

好いものだからお百に言はれまするとりれなりで、
 唾も反へさず唯クヨク娘に遇ひたいと思ふところ
 より、折角宜くなつて来た眼がグツと逆上したの
 で又もどの通りになつて仕舞ひました、殊に氣が變
 になりまして「姉さん、およし坊はさうしましたら
 うね、姉さん、お芳はさうしましたらうす頻りに
 一つことを繰返し繰返し言ふので、下には置かれま
 せぬから二階へ追上げ、階子段が危ふないからと細
 繩で降りられないやうに致し、ハテ困つたものだ、
 此の邊を活して置けば行く、此の婆の爲めに食ひ
 込むが困つたもの、さうしたら宜からうとお百は頻
 りに心配をして居ります
 或日のこと入口の潜り戸をガラリ開けて、重「姉さん
 今日、百「オ、誰かと思つたら重さん、マア珍らし
 い子、昨夜お前は何處へ泊つたエ、重「エ、二つ目

の久の家へ泊りました、久から話を聞きましたが目
 目婆の娘を姉さん吉原へ賣つてミツチリ御儲けなす
 つたさうで……、小三「シッ……静かにおしよ、彼處
 にネ、ソラ頭を伸して婆が居ませう、彼の娘だア子
 處が子それから氣が狂れたと見て余程奇妙のヨ
 妾も困つて居る處だがお前にお金を十兩進げるから
 アノ婆アを殺して御呉れでないか、重「十兩の御金
 は欲しいが、アノ顔で重吉、さん是は御氣の毒だが
 御断りを……、小三「お前だつて小名木川の御金蔵を
 破つて御金を盗つたのみならず、主殺しの悪事も有
 る身だから、御用と十手風を食やア三尺高い木の上
 に磔刑にされる兇状持ちやアないか、十兩だつて二
 十兩だつて取り得じやないか、それに今度のは前金
 十兩手渡しだよ、重「ヘ、十兩手渡しの前金、それ
 じやヤ一番遣りませう」と台所に往つて重吉は懇切

をゴリ、と研いて居る小三のお百は、小三「お婆
 さん、およし坊の處から直ぐ来て御呉れと云ふ手簡
 が来たんだが、今駕籠を聞きに遣つたら頼み附けの
 は皆な居ないで、知らない人では滅法駕籠賃が高い
 のだから、佐賀河原の船宿から小舟で往けば極く
 廉いと云ふから、潮入の棧橋まで往つてそれから土
 手通りを往くと三浦屋さんの御寮は直さだが子、丁
 度重吉さんと云ふ人が好い折柄で綾瀬迄往くと云ふ
 から良い撫梅、重吉さんは泊り掛けで綾瀬の悪意な
 處に往くのだから三浦屋さんの御寮なら僅かの廻り
 道だから送つて往つて上げやうと云ひなさるんだが
 茶さんお前一緒に御出でないか、茶「姐さんへ妾は、
 眞に夢を見て居る様な心持ちがして、蒼蠅さやう
 におよし坊の事を言ひましたから、お前さんの氣に
 障つた事が有るかも知れないが堪忍をして下さいよ

アノ重吉さんとやらが其處に御居でなさいますか、
 頼だマア貴所の御親切で目の不自由の者を連れて往
 つて下さると云ふ有り難いことで、重「支度が宜けれ
 ば直ぐ参りませう、幸吉「ソレでは佐賀町の船宿から
 一緒に往させよう」と殺されるとは夢にも知らぬ白
 髪のお女、佐賀町の泉屋と云ふ船宿から小舟に乗り
 込んで大川の通りを真直に本母寺の湖入の橋橋に來
 た時が恰度観音様の成刻の鐘がボーン、重「オ、五
 鼓の鐘が鳴った、船頭さん私は綾瀬の橋まで往けば
 善いのだが、少しばかりだが此處に煙草の錢を置く
 から買つて飲んで下さい、若し西横町的美濃屋から
 此れ〳〵の人はと聞きに來たらば斯う〳〵云ふ人は
 本母寺から綾瀬に往つたとさう云つて御呉れ、船「有
 り難う御座います承知致しました、重「老婆や危ねエ
 よ」と隅田川の川口まで來ると提灯をフツと消した

重「オヤ何で提灯を消しなすつたの、重「提灯を消し
 たつて善いじやねエか」提灯が消れて盲人に道を聞
 く程の危難をしやしね、重「……重「老婆、全躰お
 前何處に往く積りだい、重「眼の見ぬない者と思つて
 馬鹿にしなされるな、木場三浦屋さんと云ふ本母寺
 の御寮に居る娘の處に送り届けると云つて出て來な
 すつたぢやア無いか、重「ハ、ア、此奴は可笑い、お
 前の娘は三浦屋だ、それア違つてらア、吉原の三浦
 屋だ、踊の相手處か年一杯が五十兩、マア百五十兩
 の奉公金だなア、太したもんだ、斯う老婆言つて聞
 かせるがねエ、慈者の小三と云ふは元と大阪の難魚
 場の魚賣り新助の妹でお百と云ふ悪黨だ、此の間砂
 村で本夫を殺した兇狀持、今の良人は小間物屋重
 兵衛、實は甲州の半破り荒川無宿の彦五郎と云つて
 甲州ぢやア随分の男だ、巴ア又出羽の國秋田の郡小

町村無宿の重吉、東海道の胡魔の蠅だよ、而かも重
 兵衛の乾兒だ、今姐さんからお前を殺して呉れと云
 つて十兩の金を貰つたから可哀想だが仕方ねエ、
 痛くは殺さねエニツか三ツが皮切りだ、少しの間辛
 抱しなよと聲を掛けられましたから、アレー人殺
 し——と云ふ奴を胸ツ腹に懸切れをズブーリツと突
 ツ掛けた、ウアツ——聲が切れ〳〵になるやつ
 を力一杯に抉り立てられましたから口が利けない、
 バク〳〵、要活を刺して土手の上から入水ン！
 ……重吉は尙も四邊を見る中に水底で「小よし——小
 よし——重吉さんとやら一目でいふから娘に會つ
 てから殺して下さい」と云ふ聲が聞ゆると思ふと水
 の面から人魂がフハリ〳〵と飛び出して土手通を吉
 原の方に向つて飛んで行く、思はず總身が水を浴び
 たるやうにブル〳〵と震へた、重吉は堪らないから

急いで懸切を拭ひクル〳〵と手拭に巻いて懐ろに納
 め、土手通りを駆け出さうとするどズドーンと云ッ
 たのが櫻の木、幹に天窓を打突けた音、天窓と櫻の
 木と鉢合せた、重「已れも人殺しは度々したが今度の
 様に物凄いと思つたことは無い、モウ人殺しは止め
 だ、左様度々人殺しを爲れては堪るものでない、そ
 れから深川の慈者小さんの家に守歸るには彼れから
 店の薬師様の前通りを抜けて夫婦石の前から真直に
 石原の通りを切つて二ツ目の橋を渡り靈岸に出ると
 直だが、彼の顔色でバク〳〵とやられた時は……ウ
 、一寒氣がする、靈岸の方へは往けない、吉原へ往
 つて寝込むも善いが夜中に「重吉ッさん」なんて
 出られちやア堪まらぬ、船に乗らうか……船縁でバ
 クツカれちやア是れも堪まらぬエ、とだん〳〵來ま
 して丁度吾妻橋まで來ると駕籠屋が、身夫「旦那御都

此の野郎、身首那うれでも……アイラ、……引張ッちやア往けはエゼ、身首ナンで引張るもんが已が前に眼の潰れた婦人が来て、左に避けりやア左に寄り、右に避けりやア先向も右に避けるだらうじやねエ、か、婦人へ、オイ眼の見ねエ婦人さん」鶴籠の中に居る重吉は「重、デ、出たなア……何うも鶴籠を引き廻す様子が合點が往かねエと思つた」して居る中に昇夫はナニを見たかキヤツと云つて轉々拍子に鶴籠を溝の中へ投込んで「身首、南無阿彌陀佛、と云つて雲を霞と逃げて仕舞つた、跡には鶴籠ぐるみ溝の中に投り込れて重吉は「ヤイ這奴等アドウしやアがつたんだ」呼べば返事はない漸く這ひ出して見る所か溝泥の中二進三進も行けない「重、お、喚い、ドードツと云ふ雨にやう／＼の事で溝の中から這い上がるゝ先方から燈火がチラ／＼見ゆる地獄で佛

と云ふのは是れだ、重「若し旦那様旦那様、御武家に於ては從者を一人召し連れて興立寺の石橋を渡つて急いで來懸かる奴を、旦那へ／＼と喚ばれたから提灯をさし附けて來て見ると這い上つたのが眞黒の黒ん坊侍「ド何うした、重「へい……友達が吉原に遊んで居りませすから幸町から鶴籠を雇つて、遣つて來ました處が此の溝縁に落ちますとコロ／＼と轉がって失足する突端に此の溝の中に鶴籠ぐるみ放り込まれたんで鶴籠屋は私に濟まねエと思つてか、鶴籠も私も棄てた儘何ツかに逃げちのいたいで……旦那様は是から何地へ、侍「身共は田町二丁目迄參るが怪我は無かつたか、重「負傷はございせんが……侍「夫れはマア／＼結構、紛失物は無いか、重「澤山な物は持つて居りませんかつたが、草履が片足見えませんで侍「草履位は何うでも可い、然らば身共の燈火で往く

様に致せ」と云ふので此れから重吉は吉原の方に往きまして、計らず妻子にめぐり合ひ老婆お峯の怨念で一刀の下に妻子を突殺すと云ふお話

第七席

さて重吉は溝の中から這出して漸く通りかゝりの武士に助けて貰ひ、重吉「へエ、モウ御蔭様で助かりましたでございます、おや旦那様、其處まで御供を……」「ドツ／＼と云ふ雨降にビショ濡れ、其の雨で溝泥は取れ、大きに臭氣も取れました、テ田町の横で重「旦那様難有うございませしか、左様なら……」と禮を述まして御武家は右に切れ、重吉は眞ッ直に向ふへ抜ける、此處を孔雀長屋と申します、堤へ上ると筑波嵐でヒモ／＼と云ふ風、雨はザー／＼と益々強く暴風雨同様でございます、ビッシヨリ濡れまして大きに溝泥の臭氣は取れたとは云ふせのさう

れでも堪らぬ臭氣、成程悪いことは出來ない、金を貰つて婆を殺したところは宜かつたが斯う云ふドシヤ降りて遇ひ、是れで貰つた金を落しや世話アねへと重吉は獨語を言ひながら大門を潜り、仲の町の通りをビショ／＼、ビヨシ／＼やつて來た、それは昨夜は更けたとは思はなかつたが人ッ子、人通らず仲の町通りはシン／＼として居る水道尻の秋葉の常燈明を見當て來て突當つて左へ切れて角から二軒目の一番小さい遊女屋、斯う云ふ見世なら客に焦れて居るから此の溝泥の始末をして呉るだらうと思ひ、重「オイ若衆」トン／＼／＼／＼、重「オイ若衆」トン／＼、案に違はず客に焦がれて居るゆゑ、若「入ッしやア」とがらり戸を開ける途端にブーンと云ふ臭氣、若「ヤツ……旦那様込合つて居りますから今夜は御断りでございます、オイと仰しやうが何んぞ

仰しやらうが違も臭くて法が附きませぬ」と潜戸を締めながら、若衆はおどろいた、世の中に臭い客も随分あるが今夜のやうな臭い客に出會したことはない」と口叱言を申して居る、重吉は仕方がないからスタ〜スタ〜と河岸の方へ往つたが皆ビツシヤリ入口を締て何處でも客にしない、丁度伏見町の角の所へ來ると、タンタ一人見世に遊女が眠かけをして居て「若しエ、若しエ」と格子の間から顔を半分出して胡瓜を食ひ損なつた蟋蟀みたいな頻りに客を喚んで居る、重吉はモウ此家より外に遊女所はないと思ふから「花魁々々、女上んなまし、重上りていかな、大恩寺前で友達と喧嘩をして鐵漿溝へ轉がり落ちて溝泥で始末に可いねい、溝泥の始末さい附きやア遊んで往くが、ドウか溝泥の始末をして呉れるか、女郎」どうにか始末をするから上んなをし……喜

助ごん御客だよ、喜「へー……入らつしやいまし」と云つたがブーンと云ふ臭氣だから鼻を摘みましたから、重吉「それだから斷つて置いたんだ、鉄漿溝へ轉がも落ちて始末に可いねい、それだからドウかして呉れりやア登樓ると云つたら、ちやアどうかしますから上つてと言ふから登つたんだ、無代で上るんぢやアねいや、客人の顔を見て鼻を摘む奴があるか喜「賊に恐入りました、御臭から御臭いと……」重「御臭い何んだと、臭い〜と言ふな、それだから初めから世話をして呉れつて言ふんだ、喜「へ旦那ドウして是れぢやア浴位ぢやア駄目です、河岸へ御出でなさい、頭から水を掛けますから……」と河岸の井戸端へ連れて往きまして、水の百杯も打ッ掛けてスツカリ身体を洗ひました、四月のことですからそれ程寒くもございませぬ、衣服もスツカリ若衆か洗

ひ込の堅く絞つて、喜「旦那御歸りまでには御石物も乾かして置きます、重「ア、どうか頼むよ」其の内に喜「汚らうございませすが私の單衣に半纏を御召しなさいまし、モウ直ぐに御床を敷ますに依つて此處で御煙草でも召わがれ、重「若衆、是りやア少ねいが洗濯貸だよ」と金子を二分遣りました、小格子の若衆「だから大喜びで、喜「是は旦那様、有難うございませす、重「時に若衆、酒は無いかい、喜「どうも此のビシヤ降りで大引け過ぎでございませすから誂へてやつても逆も寄越しやアしませぬ、もうトロ〜とする内、夜が明けますから明日一日御遊びなさいまし、大門外の奥田が一番酒が良うございませす、此家へ往つて貴方が召上るだけ取つて参りますから御風呂を召して御居の中は桶豆腐が出来ますゆる御豆腐で召上つて居ますれば又直きに河岸が参ります、マア

明日一日御遊び遊ばせ、重「けれども酒が無くちやア寝られない、酒が無けりやア味淋でも宜い、喜「御氣の毒さまでございませすが、味淋もございませぬ、重「いよ〜なけりやア酔でも可い、喜「酔を飲むなんて角兵衛獅子ぢやアございませすまし……それぢやア旦那、斯う致しませう、私の飲料に買つて置いた御酒がございませすから、これを旦那の方へ廻しませう、金「そりやア有難いな、どうかさう云ふことにして呉れ」と二合の酒を冷で持つて來て、喜「旦那、御煙は出来ませぬが御勘辨を……、重「ア、煙は出来なくても宜いとも〜、喜「肴は何にもございませぬが香物が少々……、重「ウ、香物で冷酒が宜い、有難い、ア、サテ斯うなつて見ると酒は貴いな、酒がなけりやア逆も寝られやアしねい」と胡座を組込んで重吉はチピーリ〜呑み始め、有難いな先刻落とされた

ときによアせうしやうかと思つた、明日までに衣服を乾かして呉れると云ふがスツカリ洗ひ抜いだらば臭氣はわるめい、中々良い若衆だ、此家で晝間一日居て夜直してそれからブラ〜小三の家へ往つて今夜の話をしやうと、色々考へながら香んで居る、スルと障子をガラリ開けて「御客様御出なまし御酌しませう」と云ふのを見ると八歳か九歳の禿、寝て居るのを起されましたことゆゑ、鼻の下はツカも長くなつて眼がチツとも開かぬ、青彫れの丁度青楓簾に爪の痕を附けたやうな顔をしてシヨンポリ嶋田で洗ひ晒した單衣を着て「御酌しませう」と言はれたから「重」オヤ〜、ア、酷へ家へ上り込んだなアマ

すから、御酌しませぬと明日内所の旦那に叱られます」と云ひますから「重」ム、さうか幾歳になる「酌女」八歳「容貌が宜いから今に良い女郎に成たらう」酌女「ウ、ン、己ア御客取るんぢやアないや」重「何んだと」酌女「己らア御客を取るんぢやアないヨ」重「御客を取らない奴があるもんか」酌女「ウ、ン己らア男だ」重「男がシヨンポリ嶋田を結ぶか」酌女「是もやア御客が来ると頭へ乗掛るんだ」重「オヤツ嶋田の取り外しが出来るのか、是りやア愈々化物屋敷だ、名は何んて言ふんだ」酌女「己れかい、己れは金太ツと言ふんだ」重「父や母アは無いのか」金「父もありやア、阿母もあらア子、阿母はお女郎をして今伯父さんの處へ出て来るのが己の阿母だ」重「是はしたりお前の阿母か、阿母の名は何と云ふんだ」金「吉野ツてんだ」重「鼻は缺てはしねエか」金「鼻は缺てはしね

エが喉に穴が二ツあらア「重」オヤ〜……阿父の名は「金」父の名は重吉ツて言ふんだ「重」エ、ア、重吉……父は何處に居た「金」本郷の菊坂で小間物商をして居た「重」小間物商を……「金」父は博奕が好きで深山お金を取られ謀判どやらで腰掛紛失とか言ふんだ、己ア知らぬいがおツかアが能く話をした、それを返さなければ父は御處刑に就くツてエので阿母が此の家へ来て譯を言つて御女郎になつて其の父の金を返すちまつたから父か何時歸つても謀判兇状にはならない、父さへ居れば金太も此様なところに置きやアしねエ、父に逢ひてツて能く阿母が言ふ……」

ツ〜して居る内に願ひ附けられりやアこいつ面倒と腰掛紛失、ヤレ〜可哀想に女房が亭主を助けやうと歳を取ての勤め奉公、女房子供が此家に居るとは露知らず登つて開けば女房のお瀧に悴の金太であつたかどビックリした、途端に「金」伯父さん、伯父さん、お前御連れがあるかい「重」ウ、ン己らア連れは無い「金」色か青くて眼か飛出して髪か抜けた嫌な伯母さんが覗いて居らア「重」吉はブル〜つと慄へながら「ム、何處に」金「ア、何處かへ往つちまつた重」此の野郎、悪戯を言ふなよ此畜生、さう斯ふする内に下からバタ〜バタ〜と云ふ上草履の音、ガラリ障子を開けて「女郎」御客様、御待遠でございしました「向ふから聲を掛けられない内に此方から重」お瀧やアねいか」と聲を掛けた「瀧」オヤマアお前は重吉さん、どうして此處へ「重」吉「今此處に居る

百おの妃姐

金太の話を手前が此家へ已れが爲めに歳を取つて勤めをして居ると云ふことを聞いて、ア、面目次第もねい、已か悪るいばかりで女房子供に苦勞をさせ、それや是れやをチツとも知らねいで諸方を漫附き歩き吉原五町の其中で撰りに撰つて手前と金太の居る所へ上つたのも是は夫婦の縁の盡きないところ、ア女房子供に遇たのは喜ばしいがナニか借金は澤山あるのか「瀧」ナニ、お前歳を取つて女郎をするのに借金なんぞ拵へて堪るものかチ、大概返して仕舞つて何時でも僅かのお金で身拔が出来るのだが、唯御茶屋さんに少し借りがあつて、遣手婆さんに借財がある具様なものだ、さうさねー、三兩と出やアしない、重「そりやア豪氣だ、うれぢやア、明日緩くは是れまでの身の上話を聞いて達つて内所の旦那に話をし手前を連れてさうして箕輪遊りの裏店を借り

一生懸命に已れもやる、手前も女髪結でもして夫婦共稼ぎ、せめて金太の資本を拵へ是れまで爲した悪事の罪滅ぼしに手前にも樂をさせ、金太にも樂をさせるやうに已れが胸限り稼ぐから其積りで居る、歳老た此の已が永い間手前達に苦勞をさせぬいたが歳が異見の総じまい、勘忍して呉れこれお瀧、金太「ア、お前は父か、伯父さんお前が本當の父か嬉しう〜」と云ひながら無けなしの香の物を小僧一人で食らまつた、どうせ降りも強いことだから重吉も緩々明日の晝までも居ることにして、世に謂ふ夫婦に子で川の字なりに寝ました金太は「右方が父で左方が阿母、明日から旨いものが食へる」と頑是もなく喜んで居る、重吉は眠むらうとするとサア睡れない、ウツ〜眠りかゝるとド、ド、と云ふ胸騒ぎ、ア、胸苦し、又眠らうとするとド、ド、ド、

百おの妃姐

と動悸が烈しくつてどうしても寐られないスルト遙かに聞ゆる淺草寺の鐘聲がボンと云ふ日頃は冴て聞えしが、真ッ北風で雨が強うございますから鐘聲が微かに聞ゆる、櫛子に當る雨の音がザアザアツとして居る、重ウ吉さん〜と何處ともなく喚ぶ聲に総身はゾーツと宛から水を掛られるやうだ、見ると枕頭に座つて居るのが殺して沈めに掛けたる峯吉婆か左も怨めしうに重吉を見詰、バーク〜バークと口を開く「重「エ、ーコ、ナ」と言ひながらお茶を殺した例の齧切を取直してブツ〜リ、狙ひ狂つて寝て居る女房お瀧の胸膈へ柄まで突込んだ、お瀧は急所の重傷にワツと一聲叫びもやらず其の儘穢が切れ、傍らに寐し居りました金太は驚いて目を覺し金「ア、父か阿母を」と云ふ、是も峯吉に見惚たるから血に染みて居る齧切にて腦天から鼻漿までザ

ク〜リと裁割たから鼻漿が出てウーンと云つた、殺して見ると女房と子供でありますから、重吉はハツと氣がついてヤレ〜可哀想なことをした、七年目に逢た其の喜びの顔が目先きにチラ附いて居る、何んにも知らぬ頑是なき金太まで此の死に様、ア、峯吉婆の怨念にて撰に撰つて此家へ引附けられ現在の女房と子供を殺したのは已れが爲した罪ゆゑに仕方はないが、餘りと云へば無慘の殺し方、併し峯吉婆も一人の娘に逢たい、目が見えないゆゑお母さんと云ふ一ト聲が聞きたい、聞いてから殺して下さい御金はドウでもする、助けて下さいと兩手を合せて拜んだとき不惑とは思へど是非もなく十兩の金が欲しいばかりで無慘に殺したのがア、己れの生涯の過失だ、南無阿彌陀佛々々々々々、我身で我が身の愛想が盡きると言ふは此のことだ、已れは是から

クリクリ坊主になり紀州の高野へ往つて女房子供や
 峯吉の菩提を弔ふ、赦して呉れい、南無陀彌阿佛々
 々々々々々、併し女房な子供だからと言って兎も角も
 向ふでは金を出して是れまで抱へて置いた奉公人、
 死人に口なし誠に殺したのは済まねい長居は無用却
 て事の破れになると思つたから二階よりトーン／＼ト
 ン／＼と下て来て 重「若衆 一へ旦那様、晝間一
 日御遊びして奥田の御酒に山谷の桶豆腐、其の内に
 は河岸が参ります、私も一杯御相手を仕やうと樂し
 んで居りましたところ何んで今頃御歸り、せめて夜
 でも明けてから御歸り遊ばせ 重「エ、急にナ仕掛た
 用事のことを考へ出した酒呑みは罪は無い、それを
 忘れて仕舞つて上つたが今酔が醒てから考へるとド
 ウも大變な手違ひになる一件だからマア今夜は歸つ
 て様子が宜けりやア緩くも又二三日中に遊びに来る

からマア是れは少ねいがホンノお前の酒料、是れが
 勤めの代と酒の代だよ、敵娼は宜い心持ちに寐て居
 る可哀想に内所の旦那に聞ゆると面倒だから黙つて
 居て呉れる」と云ひながらポーンと投つたのが二分
 の金 重「大引過に入らつしやつて酸っぱい酒が二合
 に香物の尻尾を少々それに此様なに大尉鼓いては濟
 みません 重「何に宜いつてことよ」喜「ア、御召物を
 乾して置きました 重「ア、さうか」と着物を着換へ
 てポーンと飛出した 喜「ア、何んとマア氣の短い客
 人があればあるもんだ一日逗留すると云ふから二三
 日打流しで宜い客人を捉まへたと思つて喜んで居た
 が、相方の彼の婆かグツスリ寐込んで仕舞やアがつ
 て初會の客人を構はねいもんだから客人が怒つて職
 出したんだらう、又主人もさうだ子供附きの女郎な
 んか抱へるもんがあるものぢやアない、歳を取つて

女郎になるやうな無意氣女がさうして旨く務まるも
 んか、明日見ろ内所の旦那に叱られにやアならねい、
 氣前が宜い客人だ、大引け過ぎに上つて洗濯賃だ
 と言つて二分呉れてそれから又二分呉れて都合で
 一兩内所へ出す金は僅かだから大變に已ア儲かつ
 たナ、だから悪所場稼業と云ふものは忘れられねい
 、チヨツと上つた客人で小一兩は儲つてらア併し
 まだ夜明けは程もある、一ト寐入りやるとしやう」
 と見世を締めて若衆は廊下傳いに往く、途端に頭
 上へポツリ掛つた、ホーラ巴れが言はねいことぢや
 アねい押打を打たないで大剣しに持つて往かれる、
 と巴れが口の酸っぱくなるほど言ふのに旦那がやき
 が廻つて居るから押打を打つにやア及ばないと言つ
 て打たずに置いたから廊下が一杯水になつたらう……
 …ヤア是りやア雨ぢやアない血だ、ヤア旦那様大變

でございます二階に何かあもやすせ、旦那様起きて
 下さい」と喜助が叫びましたので伊勢屋の主人夫婦
 は二階へ駈上つて見ると芳野と云ふ女郎が腋腹の急
 所を突通されて死んで居る、金太と云ふ小僧は頭
 鉢が割れて腦漿が出て死んで居る、大引過に上つた
 客人が遺恨で殺す譯もない、物取りで仕向吏らなし
 氣違ひの様子もなくして、何で此様な酷い殺しやう
 をしたか分らぬと、直ぐに是れから吉原五町へズツ
 と手を廻しましたが何處へ往つたか行衛が知れませ
 ぬ、
 御話變つて此方は重吉、宛から夢路を辿るが如く、
 ボンヤリとして二ツ目の久六と云ふ兄弟分の家へ來
 て 重吉「旦那、哥兄は居なさるか 女房「オオ重吉さ
 ん、家の人は今朝早く用があつて丸の内細川の部
 屋まで往つたよ 重「さうか、さうも眠くて堪らねい

から二階をチツと貸して呉れ、掛けるものは薄くて
 宜い 女房「宜いとも、宜いとも」途中で二三杯ヒッ
 かけた其の勢で歸つて来て二階へ上り好い心持で寝
 込んで仕舞ひました、人間は悪事を働かうが何を仕
 やうが寝て居る内は何も彼も忘れさせるもので、重
 吉はグーグーと云ふ大肝、其の内に津摩の久六が歸
 つて来て「久重吉……重吉 重ア、哥兄已らアお前
 の留守にナ、姉御にさう言つて二階を借りグッスリ
 寝込んで仕舞つた 久今歸つて家の女房に聞いたん
 だお前の来ると云ふことをヨ、巳らは昨夜泊つて
 引返して往つたんだが、家の女房の言ふにやアどう
 もお前の様子が異いと言ふから俺ア案じられる、
 どうかしたか 重イヤ、是れには色々話があるが、
 何は兎もあれ一杯呑う」悪事を働いてもそこは兄弟一
 分、互に献しつ酬へつ呑みながら峯吉婆のことを一

ト通り話した 久「ウ、彼の小さんのお白と云ふ奴は
 宜い悪黨だ、顔を見ると蟲も殺さぬいやうな猫搦で
 聲をして居やアがるが、先の亭主を殺して我々共の
 親分の荒川の彦五郎を亭手にして是れからせめて
 な悪事を働か知れない、重吉手前は是れから何處へ行
 くんだ 重「已ア是れから小さんの家へ往つて、それか
 ら先刻お前に話をした通り身延へ往つて坊主になり
 、猷澤から早船に乗つて直ぐに京都へ往つて有難い
 と云ふ有難い佛様や神様へ參詣してうれから四國へ
 往つて四國からグルリと廻つて、高野山へ往つて弘
 法大師の御弟子となりて長者の萬燈、貧の燈、高
 野で終焉を取らうと思ふのだ 久「さうか 重「哥兄、
 お前ア澤山悪事をしねエ、悪黨の情心が出た日
 にやアモウ盛りは無へ」と四方八方の話をして別れ
 を告げて重吉は深川の一の鳥居、西横町のお百の家

へ歸つて来て 重吉「姐エさん、唯今 百「オヤ重吉さ
 ん、サア此方へ御道入、どうしたの 重「姐さん話を
 繪に書いたやうです、彼の婆アを連れ出して、木
 母寺の堤で殺し、隅田の深川へ死骸を沈めると人魂
 が吉原の方へ飛んで往く、それからお前さん駕籠に
 乗つて當家へ歸らうとするその駕籠かマゴくし
 て揚句の果てに吉原へ往つて女房と子供に遇つた、
 ところでその峰吉婆に見わたのでトウく殺して仕
 舞つた今まで久の所でグッスリ寝込、日が暮れたを
 幸ひに久の家から歸つて来たが實に姐さん今度は私
 もフツく我が身で我が身が嫌になつたよ、ト言つ
 て今更ら首を縊つて死ぬの腹を切るの身を投げるの
 と云ふ譯にも行きませぬから、身延へ往つて御祖師
 さまの御弟子となり紀州へ往つて高野山の油注ぎ坊
 主をして壘の上で往生が出来たら壘の上で往生し

たいと思つて居るんですが、逆も往生は出来ずめ
 へ 百「オヤアアさうかい、それは氣の毒なことをし
 たね、私やア人を殺すのは蚤か虱を殺すのと同じや
 うに思つて居るから怖いとも恐ろしいとも思ひはせ
 ないが、私のところへは何にも出て来ないよ」重吉
 は呆れた、人を殺すのは蚤か虱を殺すやうだなんて
 、成程どうも好い悪黨だ、けれども悪事をするだけ
 あつて氣前は宜うございます 百「重吉さん、どうか
 するのだが勘辨してお呉れよ」と金子五兩出した重
 「姐さん有難う、じゃア、アノ親分がお歸りになり
 ましたら段々のことをお話しなすつて下さい、今夜
 は泊つて往ます、ア〜今夜は深川の旨い魚も食
 終いだ、マア明日八王子を泊り掛けに見物してそれ
 から甲斐國へ往つて身延へ二夜も泊り、それから東
 海道く下る、サテどうも斯うなつて慾を捨て色慾を

百おの妃姐

捨てれば金佛同様です、姐さん、それぢやアお先へ御免を蒙ります」と引下つて別室でグビグビやうながらゴロリと横になつてもなかく寐られません、見るとまだ小三のお百は起きて居て行燈の火光を揺立てながら頻りに書物を見て居る、戸外をピーピーと笛を吹いて通るのが女按摩、百「あゝ大層肩に凝が来た、書物と云ふものはそれからそれと面白くなつて行くもので、併し餘り斯う詰めて見せいか肩の凝が来て眼が大層朦朧で来た、マア明日一日御休みをして是れからミツチリ一ツ揉んで貰はうかな」と獨り言を言ひながら小三は立上り「按摩さん、按摩さん、御喚ばされたは此方までございますか」と這入つて来たのが女按摩、行燈の薄暗いところへ向ふ向きになつてシヨンばり座つて居る、重吉は今夜女按摩を喚込むのは殺生だナア眼の見ぬねへ

者を殺し、それから女房子供を殺したに依つて坊主になつて殺した者の菩提を吊はうと云ふのに女按摩を喚込むとは他の氣も知らぬエで困つたものだ」怖いから時頭を擧て按摩の様子を見るとドウも判然とは分らぬけれども殺した峯吉婆に能く姿形が背て居る「揉んで貰ひながら小三のお百が「按摩さん、お前は何處だへ」按摩「へい、私は橋向うでございます」百「橋向うと言へば永代向うかへ」按摩「え、モエ」百「問魔堂橋向うの寺町通りかエ」按摩「え、モウ少々遠方でございます」百「高橋邊りかエ」按摩「モウ少々遠方で」百「オヤ、林町邊りかエ」按摩「モウ少々遠方……」百「龜澤町邊りかエ」按摩「モウ少々遠方で……」百「大變遠くだか何處だエ」按摩「木母寺の背後でございます」重吉はエ、一出たなど思ふと思ふで居た女按摩が小三のお百の首筋へグツと喰ひ付きツプー

百おの妃姐

リと喰ひ切つて「重吉さん」と伸上る、行燈へ血がポタ／＼ポタ／＼垂れて来た、重「ヤッ峯さん、オイお前を殺したのは己が殺したんだが殺して来れど十兩の金を渡したのは其處に居る小さんだ、已アお前の御蔭で女房子供を殺したからクリ／＼坊主になつてお前と女房子供の菩提を吊り積らな、コレサ峯さん、首へ……アッ首ツ玉へ……アレ／＼」百「重吉さん、何をお前寢言を言ふんだ子」重「姐さん、寢言を言ひましたかエ」百「寢言も寢言もノベツ押通し切なしと云ふ寢言だよ」と言はれたので、重「へー姐さん、お前さんは首がわりますかへ」百「戲言ッちやアおけないよ、首がなけりやア口は利ないはず重「女按摩を喚込んだでせう」百「按摩などは喚込みやアしないよ」重「何か出でしかかエ」百「何も出やアしない」重「弱い者だに已れのところへばかり出て来

やアがつたな」さう斯うする中にカア、カア、カアと夜明けを告ぐる鴉の聲、ゴーンと冴えて聞ゆる八幡の鐘聲、八幡鐘は明け六時よりはかに撞きませぬきぬ／＼の情けを知らば今一つ嘘をも撞けや明六つの鐘モツ重吉は夜の明けるのが待遠うで東方が白むか否や飛越して、重「ア、姐さん御免なさいまし」ソコンコに挨拶をして飯をも食はずポーンと飛出し、永代橋を渡つたつてホツと云ふ息を吐き「ア、怖はかつた、昨夜已ア既に首を喰切れるかと思つた、彼の小さんの首を啣へて」重「吉さん、ウ、い、い、」姓来の者は獨り言を言つて往くから笑つて見て居る、野郎氣が往いて膽を潰し横ッ飛びに飛出した、途中でエツカリ朝飯の支度をしてスタ／＼スタ／＼やツて来たのが日野の河原、是れから八王子へ一泊

又々寝言で身の」を白状すると云ふお話

第八席

重吉は是れから甲州身延に参り御祖母様の前で間願法師に成り東海道から紀州の高野山に往かうと、橋から甲州街道へ出てスタ／＼道ッて往く日野の河原と云ふ川、彼處まで往くと重吉は足を痛めて足を曳き／＼八王子まで来ると右側の鶴屋と云ふ宿屋がありませす、ボチャ／＼と仕カ林檎の魁見カ様な女中がそれに出て 女中「御泊りや御座いますか御泊りなら御風呂の仕度も充分出来て居ります 重一姉さん 女中「ハイ 重吉「今夜ア御厄介に成られませうか子 女中「貴郎の御侍侶さんは 重一同伴は無エサ 女中「一人旅では御氣の毒様ですが間違か有つた時に宿役人に申し譯がありませせん、宿役人から固く相對で御泊め申すことは出来な御布令になつて居ります、

是は旅籠屋の法でございますから御氣の毒様ですが御断りを…… 重一一人旅は泊らせせんかね、私は深川の一の鳥居の重吉と云ふ者で節々此方に來て御厄介に成るんですが、四十恰好の左の首尻に黒痣の有つて世辭の善い主婦さんが居たが、アレは今も居るかね 女中「イエ、アレはお姉御さんで 重吉「ハ、ア姉御さんか子 今の主婦さんも體か姉さんがあつてソレが死没なんなすつたから御屋敷から歸んなすつた方で、それにア、左の小鬘に禿のあるお松さんは何うしたい 女中「ハイ、アレは縁附きまして……ア

主婦「それは御願ひ申しても稼業でございますが御泊め申したいのですが、常宿の法でございますから、それで御断り申したので御座います、左様な

「お上り遊ばせ 重吉「そんなら御願ひ申されやうかね 主婦「市目で御座いますから下座敷は満客、御二階は八州様が御兩人御出成さいます、それが御合宿では…… 重「イヤ／＼其様な處では眞ッ平／＼ 主婦「それでは離れの八疊に御武家様が一人居らつしやいます、大變座敷が込ますから先刻申上たら町人ならば苦くない、一人か二人なら連し來いと仰しやつてございます、何ぞせう八疊の御武家様と御合宿では 重「主婦さんへ、御侍様願つて下さい 主婦「おけいや八疊の御武家様が先刻當家で懇意にして能く身元の判然ツた者なら遣しても宜いと仰しやツたが、姉の存生中に度々御出になつた御方だと云ふから御武家様に願つて來て御呉れ畏まらした」どバタ／＼往つて武家に話をしたのか間もなく女中が出て來て「主婦さんへ、アノ御願ひ申したら町

人なら苦しくない直ぐ宜しいと仰しやいますから、サア旦那様御荷物を持つて参りませう「何卒それで御合宿を」と隙子をガラリと開けて 女中「旦那様、唯今御願ひ申した町人様は此の御方で…… 侍「左様か町人此方へズツと……ア、汝で有つたか日野川で足を痛めて身共が業を造つたのは…… 重「ハイ旦那様でございしましたか、痛い／＼で下ばかり向いて居ましたでアんな結構な御薬を頂いて、御顔も覺めて居りませんだツた、ハイ夫れでは旦那様で、如何にも仰しやる通りの其時の町人めで御座います、又た其節は何ども有難うございます、ハイ／＼旦那様は大層お早う……御風呂へも最う御召し成さいまして…… 侍「最う風呂へも退入つた、大分道中に草臥れたから當地にも肩を揉む者があらう、女按摩でも頼まうかしらと思ふて居る所だ 重「エ、女按摩

百おの妃姐

摩がバクく侍ナニ重「ナアに當地のことで、へ
 イ旦那女按摩を八王子で頼むと火に祟ると申しませ
 ので……侍ハ、ア左様か、俺は初旅のこと故少し
 も知らぬが、八王子で女按摩を頼むと火に祟ると云
 ふのか、ハテ不思議なことぢやナ、が差して草臥た
 と云ふ程でもないから、それでは俺は先へ寝ませう
 、併し町人の前だが女按摩が火に祟るとは妙な縁因
 だなナ重「へエ、ソレがどうも何でも實際と見ゆま
 すんで、へエ、時に姉さんく湯は何うだい 女「少
 く過ちますと御風呂が混みますから今の中に御召し
 遊ばして重「夫れでは姐さん直ぐ湯に入らう、ダガ
 湯に這入ると酒が遅くなるが、湯室で酒は飲み、エ
 ねエ 女「御氣の毒様ですが八王子では湯室で御酒は
 差上げませんで重「ソレでは肴を誂へて置くから湯
 から出たら直ぐに飯にして呉れる様、何が出来るエ

、物は何んだ 女「鮪の初物 重「此りやア旨いナア、
 其外の肴は 女「小鮪で重「ナニ怖い肴 女「へい小鮪
 い鮪で、只今の處では掛け焼か何んぞでは如何でこ
 さいませう 重「ハ、ア鮪の掛け焼か、鮪の掛け焼に
 鮪の刺身と来ちやア堪らねエ……山方へ往くと雉子
 を打つて食はせるが雉子は無エか 女「へい雉子の焼
 鳥もございませうが…… 重「何うも打ち立ての雉子は
 氣が利て居るナ、それぢやア頼むよ已らア性急だか
 ら鮪の刺身に雉子の熬鳥、ソレと鮪の掛け焼で早や
 く遣ッといてくれ、旦那御免なせい」と一ト風呂飛
 び込んで出て来たが八王子と申す處は近在では贅澤
 の所で、食物も青磁か何かで本山葵が二切ればかり
 に鮪の焼焼、未だ小さいけれども中々風味の宜しい
 もの 重「何うぞげす旦那、ア、善い心持になつて來
 た、旦那様は最う御就眠になつたと見ゆる……ア、

百おの妃姐

善い心持だ、是れから寢込もうとすると重「吉さん
 ……バクバク、エ、思ひ出してもゾツトする、正可
 今夜は今處までは來は仕めいと思ふが……オイ姉さ
 ん、今の中に聞いて置くが常家の便所は何處だつて
 女中「左へ行らして右に曲つてそれから又左に
 御出なさると直ぐで御座います 重「常家の手水場は
 淋しくはゐるめいね 女中「繁家には別に賑やかなの手
 水場はございませんで、恰度高妙寺の埋葬場の前
 此の御座敷は湯灌場の後ろで重「オヤア……此の座
 敷は湯灌場の後ろで重「重吉怖くツて堪らないから
 行燈に油を充分注いで燈心を拾本計り放り込んで滅
 法界に明るく仕たが、未だ淋しいから起たり座たり
 して見ると床の間に面壁達摩の掛け物、アノ達摩が
 夜中にバクく化け出して……重「吉さん……其様
 な事を言はれちや堪ら無エと、立つて往つて掛け物

を取り外して見ると欄間の透か波の透になつて居る
 重吉「厭悪だナア欄間の透を取る譯には往かんし、
 サア何う仕様か」是れも神威で怖いと思ふと仕様の
 ないもので、當今は神經の論があつて幽霊杯と云ふ
 も語りには氣で見ると云ふ、成程盲目婆を殺し女房も
 子供も殺したと云ふ恐懼の氣が胸にわつて去りませ
 んから何んでも怖くて成らない、酒を飲んで目眩
 ない、それより床を延べて貫つてゴロリと寝たが寢
 て見るとドロくくを履される、ア、胸苦しいと
 目が醒めて見ると枕元に誰れか坐つて居は仕ないか
 と考へる、又睡るとも無く幻夢ともなく道中様々の
 事を考へて居るとドロくく、フツと眼を覺
 します誰も居ない、又寝やうとするとバクくど人
 の來る様子 下女「御容様へ、アノ御連れ様か御
 出なさいました 重「ナニ乃公に連れの有る筈はねエ

が「アノ深川からと仰しやつて、先刻御名前を御書き遊ばした帳面を見て此の方に御目に掛り度いと云ふ、御眼の悪い御女中で高井戸から夜駕籠に乗つて「ヤ、最う此處まで来たか、同伴で無いと云ふど八州様が側に居るから、怪しい奴だと引上げられると又大變だ、儘よ一人も同伴は無いが連れて御出でと言つたまんま夜具を被つて睡ふりをして居る、隔間の障子をスラツと開けて「下女「御草臥れ様、只今御膳を……」女「イエ御膳には及びません、途中で仕度を仕て来ましたから「下女「それでは直ぐ御床を延べませう」女「ハイ」女中が床を延べまするけれども枕が有る迄のことで別に人影も見えない彼れ是れして居る中に「女「重「吉さん」鐵柵れ群で呼ばれました、夜具の袖から透して見ると行燈の影に出て居る、是れが神経で目に見ゆるので中々幽的な感じが本

統に出て堪まる者で御座いません「重「お峯さんア、お前は一途に己に附き纏つて居るが、小荷はお百の小さんに頼まれて、お前を殺して呉れいと呉れた十兩の金故に、どうくお前を殺すやうな譯になつたんだから恨みがあるならお百の方へ出て下さい、ナニ巳れの來歴を言つて聞かせると、來歴を云つて堪忍して呉れるなら此の上もない、小荷は實は出羽の國秋田の郡小町村の百姓で吉右衛門の忤の重吉よ、十九の時に院内金山の金掘り人足、二十二の時佐竹の戸塚九郎兵衛様に抱ひられ、小名木川の御屋敷に奉公して居たんだが、其の中に詰まらねエ事を仕出かして旦那の金を二拾二兩持ち出して逃げたのが恰度十三年前の事、それから本郷の菊坂に女房を持つて子供も出来たが六兩の謀判で腰掛から逃亡、目的も無いから東海道で胡魔の蠅を仕て居る中に甲州荒

川無宿の彦五郎と云ふ者と、兄弟の盃をして悪事を仕掛けて働く中、小名木川の佐竹の御金蔵を破ふらうと云ふ相談の時、己ア以前に奉公して容子を知つて居るから戸塚九郎兵衛様の合鍵の在る處を知つて居るので、俺が盗んで破り盗たが千兩サ、其の時江州の浪人金五郎は九郎兵衛様を小銃で殺害、自分も其場で殺された、俺が手で殺した譯でも無いが元の御主人様を手を以てせずとも先づは此の重吉が殺したと同様、うれこそ倒礫にも遇うべき悪事、疾に生命が亡る等のを今日まで存命へ居るのが却て不思議と云ふ位、それ故是れから佛様に御奉公をすれば何うか斯うか定劫は助かるだらうと思つて此から紀州の高野に往つて大師様に一生懸命に信心し、お前の菩提や女房や子供の菩提をも吊らはうと思ふのだ、峯さんや、何うぞ……俺が悪いのぢやアね

い、オ、苦るしい、峯さん喰い附いては往けぬいマア堪忍して……侍「町人、々々何だ、其方の様に寝言を言はれては逆も堪まるもので無い」重「ヘエエ……寝言を申しましたかな「侍「申しましたつて申さないつで、身共には寝られんわナ「重「ヘエ……恐入りました、先刻此の御座敷が湯灌場の後だと聞かされたので、それが胸に在るもんですから、誠に恐入りましてヘイ、それが胸に在つて寝言を申すやうな事が出来致しました恐れ入りましたる事で「侍「ナニ其方が寐言を言ふたとて汝も矢張り客人故差支へないが、身共は餘り寝られん故最う出立致すで「重「貴所様が御出立とあれば私も何うぞ御一緒に、私しは甲州の御祖師様に参らうと存じまするのが貴所様も身延に御出でたとか申すことで、どうぞ御一緒に侍「宜しい然らば同道致さう」是から女中を呼んで勘

定を拂ひ御待は小田原提灯を吊ら下げ燈を點けて八王子の中宿の鶴屋と云ふ旅籠屋を出て参ります、好結搦と云ふ鶏の聲、東天紅と一番を告げる、遙かに聞ゆるは夢搦き唄、ヒ、ンと云ふは早立の馬の嘶く聲、一旦那樣早立ちに限りませすナ、洵に好い心持でブラ〜と八王子の小橋まで往けば東天が自らみそうなものですナア、小佛峠は何卒夜が明けてから越え度いもので、何うでせう旦那、彼處に辻堂が有るが辻堂の縁側にでも掛けて一ふく喫み度いもので、へイ朝の空気を吸ふと身体の爲めだと言います善うございませすナ、だから晏起は毒で朝起は長壽をすると言いますが、新鮮の空気を吸ふは何となく善い心持のもんで、へイ大邊な營養なさうでげすヨ」辻堂へ腰打かけて侍、コソ町人、其方は身共を知つて居らだらうナ 重「エ、侍、其方は手を能く知つて居

るだらうナ 重「日野の河原で御薬を頂いて昨夜八王子の中宿の鶴屋で御合宿をした切り、別に貴所を見覚えては……侍「イヤ以前より身共を知つて居る筈ぢやが 重「へい成程、どうか御見受申したやうでもございませすが想ひ出せませぬ 侍「ヤイ、佐竹の戸塚九郎兵衛の悴戸塚四郎三郎を忘れたか 重「へい、四郎「昨夜の寐言で残らず明解つた、小名木川の佐竹の金藏を切破つた事まで残らず白状によき其折の賊は汝重吉である事を承知致した、父九郎兵衛を死に致したる江州彦根無宿の金五郎を手引を致した奴は手前、汝が屋敷の案内を能く知つて居る故に恩を仇にて主殺し、重吉覺悟致せ」と言ひさせアツと驚き逃げんとする重吉の頭筋を掴んでヤツと云ふ聲と共に三間ばかり向ふへ背負投を食はしたドーンと向ふに倒れて起上らうとする處を取つて抑へ下緒を扱ひ

て後ろ手に細を掛けました、どう〜昨夜の夢で一杯箱められた、が天の配劑は實に恐るべきもの重吉め驚いた、

居りませせん、引返して来て重吉は傳馬町の御牢内に打ち込まれました、扱ても深川一の鳥居の藝者小さんは亭主殺しの兇狀が有るから是れも直ちに女牢に打ち込まれる、重吉は傳馬町お百も傳馬町の御牢内に這入りましたが、雇い婆アのおとらと云ふは御手先の犬と云ふものに成つて、御手先から頼まれて彦五郎が歸つて来たならば知らせる様、おとら婆は留守を守つて主人重兵衛が歸つて来たならばと歸つて来るのを待つて居ると或る時の事 重兵「小さん居るか、小さん……とら「親方さん御歸りなさいませ 重兵「おとらか、小さんは何うした とら「アノ姐さんは平清さんの御座敷で今朝早く出て往きなさいました 重兵「幾人だ とら「五人で 重兵「御客は とら「二人 重兵「馴染の御客かへ とら「アの上杉様の御家来たさうで、姐さんの

是れより重吉を佐竹様の御屋敷に引きましたが先に申上げましたる處の殿様は中興佐竹左典義宣と云はれた其の義宣の世子左兵衛亮義政公の時代だが、其の左兵衛亮義政公に委細を申上げたる事で、大層戸塚四郎三郎覺召しに與かり當時は堀田相摸守政時が御月番、御老中に願ひ出で北の御月番明奉行が依田豊前守政次、南の方が堀田政時、御奉行から捕縛者の名人で藍田五郎助、馬籠藤十郎の兩人、此の藍田馬籠の兩人が御吟味の上捕縛として八州様二頭が、御手先は御選み人で重吉を案内者として甲州の半破り荒川無宿の彦五郎を信州戸隠に居りますからと云ふので尋ねましたが、風を食つて彦五郎は戸隠に

居りませせん、引返して来て重吉は傳馬町の御牢内に打ち込まれました、扱ても深川一の鳥居の藝者小さんは亭主殺しの兇狀が有るから是れも直ちに女牢に打ち込まれる、重吉は傳馬町お百も傳馬町の御牢内に這入りましたが、雇い婆アのおとらと云ふは御手先の犬と云ふものに成つて、御手先から頼まれて彦五郎が歸つて来たならば知らせる様、おとら婆は留守を守つて主人重兵衛が歸つて来たならばと歸つて来るのを待つて居ると或る時の事 重兵「小さん居るか、小さん……とら「親方さん御歸りなさいませ 重兵「おとらか、小さんは何うした とら「アノ姐さんは平清さんの御座敷で今朝早く出て往きなさいました 重兵「幾人だ とら「五人で 重兵「御客は とら「二人 重兵「馴染の御客かへ とら「アの上杉様の御家来たさうで、姐さんの

御馴染の御客だと申しました。重兵「さうか、アノ重吉は歸つて来たかエ」とら「重吉さんは何時か姉さんと御断しをなすつて甲州に往くと仰しやつて……重兵「小さんは平清の座敷、重吉は甲州へ往つて、おとらお前一人かへ」とら「左様で、アノ姐さんが若し主人さんが歸つて来なすつたら直ぐ知らせしてお呉れと言つて早く御出でなすつたんですが、それでは御歸りなすつた姐さんに御咄して参りませう一人じやアなし何んとか言つて御座敷を貰つて歸らつしやるで御座いませう、鳥渡妾は平清さんに往て来ませう、生憎平生取も滞りの魚屋が来ませんで、貴所は愚鈍の乾したのが御咄さすからソレと蛤子の大きいのを買つて参りませう、何時貴所は東葉貝のジャ〜が御咄さだと云ふので、姐さんが此の間大きいのを買つて置きなすつたけれども、何時迄待つても

御出で無いもんだから、姐さんがジレ出して此の御殿して仕舞なすつてオホ、ハ、ハ、ハ、ジャ〜、後にして食ひますが、それでは香物を出して置きますから、一杯飲んで居らつしやア中姉さんは直御座敷を引いてテ……序でに平清さんで御存を折か何かに詰めて貰つて来ませうか、往き掛けに御酒もさう言いますよ、姉さんだつて何んなに待つて居らつたか知れやしません、それではチョツくら往き掛に御酒もさう云々往きませうから、とおとらは欣然して居た二合ばかりの酒を重兵衛に當てがひます。重兵「流石はおとらだ、人間は若いうちに苦勞をした者でなければ飲酒家の食物でしらへなごは旨いかねエ、ちやア獨酌でチビ〜飲つて居るから御苦勞だ平清まで迎いに往つて来て呉れ」とら「畏れました、オヤ及物が此處に出て居ますねエ……危ない

から抽斗へ仕舞つて置ませう。重「オ、さうして呉んな」と簀笥へ仕舞はせましたのが彦五郎の運の盡きた、此方は雇婆のおとら、圓形提灯を點けて戸外に出て参ります、悪黨の木刀だのと云つても天の網てい大きな網に掛つちやア仕様かねいと雇婆アは十二軒の武藏屋庄五郎、有名の捕方で集の庄五郎とも云ふ、其の十二軒の武藏屋の庄の家へ来てとら「親分へ〜庄五郎」おとら「へイ、アノ彦五郎の重兵衛が歸つて来ましたよ。庄「ナニ重兵衛が歸つて来た」とら「甲州から今歸つて来ましたよ、小三は何うしたつと言ひますから平清さんの家に五人ばかりして往つたから暇を貰つて歸らせる、酒と肴は妾か買つて来るからと云つて出て来ました、大層御術が出来るつて云ふから及物も簀笥の抽斗へ藏まつて鏡をかけて来ました。庄「手前も本所の御用聞

石橋勘太の女房だ、其の道に當つて見ねエヒやア解ねエが及物を引上たなんざア感心だ、及物か有るとさう旨くは働け無エ、おとら二階に上つて待つて居ろ……長太、長太「へい、庄「下りて来い、長「何でがす。庄「荒川の彦五郎が歸つて来て御手當に成る處だから、是れから佐賀町の馬籠藤十郎様か蓋田五郎様か屹度御一方は御出勤に成つて居るから、捕者が有るから庄五郎方迄来て下さる様と言つて旦那様の御供して来い……金次「金「へい、庄「砂内の新太の處へ往つて来い……幸太や汝は何處に往つて来い」とズツと手が廻つて仕舞ふ、彦五郎の重兵衛はソレな事とは夢にも知らず女房のお百か今歸つて来たならば久瀬でシッポリと懇談もしやうとグビリ〜と一人酒を飲んで居ると、飛脚「フシ〜〜〜ドン〜〜、御頼ん申す、御頼ん申しやす。重「オ、飛脚「

深川西横町の美濃屋と云ふ藝妓屋さんの御宅様は當家様で……重吉の美濃屋とは此方だが何處から飛脚「私には中宿の鶴屋に泊つて御在で成さいます重吉さん」と云ふ人から頼まれました、手筒で差し置きて善い御しやいました。が最う八王子に歸りますから何うせ戻り足、御返事でも有るなら持つて参りませう」と手筒を持つて立つて居る。重「左様で、それは御苦勞でした」と彦五郎の重兵衛が扱ては重吉が甲州に往つたと云ふが八王子邊で病罹て小さんに金でも貸して呉れと云ふのじや無いかしら、彼れも久しい乾兒、少しの金なら已れから飛脚に渡して遣つても善いと思つて手筒を請取らうと、御苦勞様と云つて左の手に潜戸をガラリと明けたが兎狀持ながら油断がございませんチリ、ツと飛脚夫の容子を見ると十字の字がすりの袖合羽を被つて道中差しを一本差して

眞田の一番の緒を裸に文どツたが、法被の爲めに暗らくて見えない、淺黄の甲掛け手ツ甲脇に泥の上ツた容子は言はずと知れた飛脚「重「御飛脚御苦勞様」と先方から出す當地では請取らうと云ふ右の手を出す其の拍子に手を執つて「御用だツ」とグイと前へ曳かれた、斯う出す手を斯う取りドオンと曳き止めたから流石の彦五郎も全くの飛脚と思ふ油断から搦斗切て墮ちる奴をエイト捕へる、アツと體を換はず奴を「神妙にしる御用だ御細に掛かれ 重「是は人間違ひ……役人「黙まれツ、私郎ア荒川無宿の甲州半破りだ、よ、未練のことを云ふナ 重「是れはしたり、旦那様、私は一向に覺悟がございません」何と申しても劍術と柔術で鍛錬したマル腕と云ふので肥太りかへて撥切る程の腕、マル腕と云ふ者は張たなり後にも廻りません者で兩手を開ける、ウツと云を突

端にドーンと蹴ました、悪黨だけに始終懐刀は懐中に入れて居る、此の懐刀を抜くが否ブツツり突き飛しました、御用だツと又後ろから取ツ掛かる奴を懐中から懐刀を取り直さすブツツり、何にしる一刀流と練ねわけた荒川無宿の彦五郎、切拂ツて格子の内へ飛んで廻り表の潜戸をガラリとビシイリ、ピン「既に食ひ込む處であつた……重吉は甲州に往き小さんは平清の座敷に……サテは重吉も御用に成り小さんも御捕縛に成つたか知らん、テは雇婆のおどらめ、小さんの迎ひに往くと伴つて已れの歸つた事を密告したナ、フム八方十方に手が廻つたからは最う已れも年貢の上り時だ、が逃れるだけは逃がれて見なみやアおどら婆に恨みが遺る、アノ婆の肉を食はずにア腹が癒ない、小才覚に己れの及物を仕舞込みやがツて此處にあらうと筒筒の抽斗を開けや

うとするど錠の下りて居る、フ、ンと鼻の先で笑つてド、ンと一つ叩くとピンと錠が明いてしまつた、不思議なものでございませぬ、取り出した一刀と云ふのが國俊の長脇差、彼の海坊主を斬つカ刀が祟りに祟つて茲に血の雨を降らすと云ふのも因縁でございませぬ、鯉口寛けて行燈の燈火をフツツ吹き消し、悪黨だから屹驚りとも仕ない階下段を静かに上つて表の雨戸を密と一枚く開けて戸外の様子を見る」と云ふと櫓の下に一人、此方の櫓の下に二人、右も左りも十分に手配りが届いてある迎も尋常の事ではと裏窓の戸透から覗いて見ると折節隣の地蔵に土藏の修葺中で足代が組立て、ある是れ屈竟と心を定め窓の戸を密ツと明け飛び出でんと思ひしが斯う云ふ都合にも事に馴たる彦五郎少しも油断は御座いません、冠つて居た手拭を刀の尖先へ引懸け体を固

めて突出せば兼て待設けたる捕方打て懸るを引外し横打に切つて落しひらりと飛び出す、又もや潜みし捕方が不意にかゝるを事ともせず難なく蹴落し屋根傳ひに土藏の足場へ飛び移り責ての事に彼のおとら婆の密告した舌の根を引抜き間麗の土産に爲ん者と大膽にも嚴重に手配のある多人数の捕方の中へ切込むと云ふ一段で御座います

第九席

エ、甲州巨摩郡荒川無宿の彦五郎即ち旅小間物屋の重兵衛御召捕に相成りますると云ふ所迄言上致しました、倍て御捕頭として葦田五郎作、馬籠藤十郎總て斯う云ふ激しき捕者に爲りますと南北に拘らず原田和太五郎と云ふ人がございました、是れが同心ではございませすが關東一の居合の先生、劍術は眞影流を遣へ早く云へば其古の丸橋忠彌、或は由井正

馬とか云ふやうな人を御召捕になる時に御座ひ入れになると云ふことでございます原田和太五郎と云ふ人は南北同心の方々に劍術の師匠を爲し、南八丁堀に道場を開いて居る、此の原田が今日の捕方の手先きは十二軒の武藏屋の庄五郎一名を隼鳥の庄と云ふて松平隠岐守の家来村上庄五郎、此人も道樂で御用を聞いて居りまするが、乾兒の二百人もありやして武藏屋の庄五郎と云ふ名代の人、その乾兒も今は或は討たれ或は怪我を致したるから葦田馬籠の兩氏左右から上つて召捕らふと云ふ所に、十九歳か二十歳位の若侍走り出で、侍一恐れながら御願ひ申します、私は佐竹の家来戸塚九郎兵衛の伴四郎三郎と申す者、去歳の春小名木川に於て父を殺害されたるのみか主人の金子を奪ひ取られ、艱難辛勞して之を捜索する中に遂に甲州街道八王子驛に於て彦五

郎の子分重吉と云ふ者を手前に於て召捕りました彦五郎は唯今爰に御捕縛に相成るよし冀くは私に捕方仰せ付下されば有難い仕合、忠孝二ツの捕者にござりまする」と申入れましたる時に葦田五郎作殿「イヤそれは相我らぬ、重吉は召捕つたで有らうが我々は又此の捕方を仰せ付られたるもの、御覽の如く御傷者死人もある、然るに之を畏れて他の家來に召捕られたとあれば公儀の御耻辱にも相成るから此方で召捕つて御手前に引渡さう、其上にて繩を取つて奉行所に引立てられよ、四「デは御座いませうが何うか私をして忠孝二ツの路を全ふせしめ下さる様、又た十手捕繩を御貸し下さらば有難い仕合武士の情けにござりまする」原田殿之を聞いて「アイヤ葦田殿、佐竹の家来戸塚殿の申すも至極道理でござるから是れは御渡しなされて然るべし、此義に就

て公儀より御谷めがあらば和太五郎切腹致して宜う御座る、武士の情けと云ふ事は容易ならん義ぢや委細承知」と十手捕繩を貸す、三郎四郎喜び勇で梯子の桁に足を懸け、四「ヤア甲州荒川無宿の彦五郎汝の悪事の仔細は委細重吉より承知致した、覺悟をひるげ忠孝二ツの捕方なり」と呼ばつて進みましたから彦五郎の重兵衛も「與力同心の手先の捕方ならば刀を背身の續くまで切つて斬つて切りまくら敵はぬ時には立腹切つて死なふ」と思つて居た所が「忠孝二ツの捕方と聲を懸けられては、何うせ刑戮につく身体然らば一層此の人の繩に懸り一命を落したならば」と中々此の彦五郎と云ふ男は賊は働かすすけれど天晴れ氣象の勝れた者故、四郎三郎が梯子を登りくるを見済して敢て油断につけ入る様のことには致しません、愈々体を堅めたと云ふ所で二ツ三ツ打合ひ

百おの妃姐

ますうちに自分は刃物を後ろに放つて遂に彦五郎は忠孝二ツの繩にかかりしと云ふ、曾我の五郎十郎が伊豆の御館に打入りし砌り、御所の五郎丸是れにわりと呼はつたる時に曾我の五郎は後に手を廻して遂に其情けの繩にかかりしと云ふ、是は東鑑に於るが「曾我物語」曾我の仇討」とか云ふ假名書ものにはさうは御座いませんが武士の情けと云ふは毎もあるもの、原田和太五郎殿は四郎三郎に十手捕繩を渡ししが結局此處で戸塚四郎三郎殿若年ながら重兵衛に繩をかけ、梯子を下して繩尻をどつて其夜の中に奉行所に引き立てます、総て斯う云ふ召捕者になると夜中でも奉行所に於て御吟味がある、直ぐに其晩に於て傳馬町に参り假半に留め置いて嚴重に夜番を致させます、夜が明けてから引き渡すものあります、が今は彦五郎を傳馬町御牢内に引立てと参ります、

半と申しましても東の大牢東の二間半、西の大牢西の二間半、女牢、ズーワと並んで居ります、洵に唯今の所では萬事政府より致して囚人にもソレ御仕着は下さり厚き御手當てもあります、其の古への處置と申すものはなかく激しい誠に死なば死ぬよと云ふ様なるなされ方でございましてが有難いのは當今の御治世、愈々御牢内に差し立てになると戸前と云ふ所がある、此處で聲を懸けます「遮斷有り申アす」「オ、……鬼も恐れる十二人の役人と云つて大勢居る、頭領住役それから二番役の三番役の云ふて穴の隠居隅の隠居、詰の本番詰の助番、詰の番と云ふは盡小便を守り始末する所で、俗にハメ通りと云ふ何んな娑婆で幅を利したものでも高名の者でも牢内へ参りますと一時ハメ通りに往つて一夜を明すが習慣、それから二番役から三番役にも詰の隠

百おの妃姐

居にもなります、所が其御戸前口でボンと突かれる、卒然ボオンと一つ撲て御牢法を言ひ聽かせる俗に之を「サグリ」と云ふ、局り用が無いからソンの事を機關にして牢法なんぞを言ひ聞かせる「御牢法聽かう」と判板で撲うとするを二枚疊の上から三番役が聲をかけて「旦那が恩を受け囚人だ、負て呉んな」三番役が聲をかけるので撲つたねをして其晩は其儘ハメ通りに置き夜が明けると三番役が一同の者に挨拶をして「旦那は娑婆で大層恩義を受け方だから」高い疊の上に居た是れは張疊と云ふて疊の数が多ただけ重役、其晩呼びかけたのは剛の三次と云ふ上州木崎宿の者、此剛の三次が下りて来て彦五郎の前へ手をつき「三久しう御目に懸りませんでしたか甲州の頭、お前さん私をお忘れなさいましたか彦一へ何誰でございしましたか」と私は覺て居りませ

んが「三御存知の無いのは御尤も、俺は上州木崎宿の鬼の源太郎の乾兒で三次郎と申しやすが、小者が親分に殺されやうとした時に貴所がお出なすつて、巴れが久しぶりに甲州から来た土産だと思つて、好若壯な命を助けて遣れと仰ッしやつたので今日まで命が助かりました、其の三次郎で御座エやす彦一さうでございませうかさう、久しい後木崎の源太郎所に往つた時、何でも源太が叩き切つて仕舞ふと起立つた所に出逢つて俺が執裁て……さうさう其様な事が有つた様に覺えます、シテお前さんは久しい事御牢内に御出でなされるのか「三へエ恰度三年越しになりませう、何うせ御刑罰に就く体でございませうが今日深川の一の鳥居で藝者小さんとかの亭主、甲州の六悪徳と云へば人も知つて荒川の貸元、甲州の半を破つて行衛知れずになつた者だが、此間召捕りに

なつて女牢に來なすつた藝者の小さんと云ふ女は甲州の貸元の女房など云ふことをチラリと聞きましたから、うれじやア甲州の貸元荒川の親方が召捕りに成つたのだらう、纏て小町の御預りの御牢内に來なされば其時こそ御恩返しが出来が、若し西の半か東の二間に往きなると自分の支配でないから、張番に頼んで斯う云ふ人だからと頼まうと思つて居やした、所がマア私のお預りの半に御出でになりましたのは、小町が平生からどうか一度は御恩返しを致したいと思つて居た念力の届たんで、斯う云ふ所で御目に懸りましたのも矢ッ張り悪事をした故でございませうが、お前さんの内儀さんの藝者の小さんの這入つて居なさる所には私の女房が女牢の取締りをして居るから、是れにも聲を懸けまして充分に御手當を致して居ります」と誠に深切に致し呉れます、地

獄で佛と云ふことがあるが是等のことでございませうか、就ては此の馴染の三次と云ふ者の御話をしなればお百が佐渡に流されると云ふ起因が解りません、亭主殺しの凶状持ちに盲人婆ア峯吉の娘を誘拐して金子を取りました事が残らず成順に及んだ日には何うして娑婆に無いらだ、それには少し仔細がわつて馴染の三次の女房天人お六と云ふ者が女牢の取締りをして居て、亭主を助けやうと云ふ所から何うかして火を放し、火事に乘れて逃げ出さう、お前さんも同意して彦五郎さんと一緒に逃げ様じやアないかと云ふ、是をばお百が諾と承知をして置いて這出願ひをした、役人が牢内に來て「變つた事はないか」「牢内に變つた事はないか」とぐるぐる廻ります其時に「斯う云ふ者が火を放けると云ふ相談をして居りまする」ア、云ふ謀策を致して居ります」と訴

人する、之を這出し願と云つて一格罪が下ります、是れが一ツと今一ツ他に佐渡に參ります手續がございませうから是れをば申しませねば斯かる大悪人が遠島と云ふ筈がない、女にして佐渡に流されると云ふ事はお百を除いては決して例がございませぬ、お百に始つてお百に終る、此の外に八丈に流され三宅に流されたのはございませぬ、既に大阪の花蝶と云ふ者が芳原に火を放つて三宅嶋に流されたが、遂に佐原の喜三郎と云ふ者と三宅に於て心を合せて其の御牢を破りましたが、是れは佐原の喜三郎の傳にありませぬ、佐渡に往つたのはお百に始つてお百に終るから「佐渡に女の往つた例が無い嘘言をつけ其様な事がある者か」と或人は申します、けれども確乎と佐渡に行きました証據もあり且つお百が佐渡で破嶋を致し役人を殺害致したる所より、女の嶋往

きと云ふものは御差止めとなりましたのに相違ございませぬ、依つて天人お六の傳を鳥渡言上致したうございませうから是れは外傳として姑らく御聴取りを願ひます、此の馴染の三次と云ふ者は日本橋の西河岸に親父と二人で所帯を持ちてかせぎ」と申して世に云ふ此等奴が金着切り渡世、馴染の三次は年は若いけれども男も好し乾兒も少しはあり鳥渡見るとなかく「かせぎ」の様ではございませぬ、丁度唯今の御話しより三年前に本所の津輕の屋敷に往つて博奕をして、大層出來がよく金子を手に入れましたからそれを懐中に入れて一杯機嫌でブラリと來ましたのは例の玄治店にございませぬ、其玄治店に參りますと美しい女が十二三になる女に裕衣を持たして如何様湯から歸つて來たものと見えて背恰如と云ひ眼鼻立ちは固より、髪

の色に云ひ姿と云ひ何處と云つて非を打つ處のない
 婦人、招遣ひながら三次は「嗚呼、美しい女だ、ア、
 已れも上州木崎の百姓で十六の時に江戸に来て二十
 五の曉まで此様な美しい女を見たことは無い、繪に
 もこんな美しい女は見えたことはねエが、女房かしら娘
 かしら……それとも人の圍者になつて居るのかしら
 ん」余り美しい女だから三次が後を跟けて往くと女は
 氣が注ぎませんでか路次を突當つて立派な家の格子
 戸を開けて這入つて仕舞つた、止せば好いに三次は
 井戸端で洗濯をして居る婆さんがありますから「三
 ネエ、若し阿母さん、今彼の格子戸を這入つた年増
 、彼れは内儀さんでございすか、娘御でございす
 すか」と云ふと婆アさん洗濯して居ればいよのに腰
 を引延ばして右の手の甲で水鼻汁を横にこすり「婆
 彼れですかエ、彼女は近頃此處に越して來なすつた

何んでも木綿店邊の大家の旦那の圍者と云ふ事で、
 小女を一人遣つて立派な家に暮して居なさるが、住
 吉町から霞町辨天小路切つて此の邊は美女の巢だと
 云ふが彼の位の美女は見えた事はない、女ですら恍惚
 する年増、男衆の眼に付くのは無理はない丈恰好か
 ら髪の上、およそ愛嬌のある顔どつて彼の位の愛嬌
 のある美女はありませんせ」と婆さんに言はれたか
 ら三次は「エオ圍者だつて……茲に百三十兩ばかり
 あるが金で言ふことを背ものなら是れで一晩だいて
 寐てい……と思つても此方の身分が身分だから向ふ
 でも抱れて寐る氣遣ひは無エ、ハテな何卒して彼の
 年増を一晚でも好いから抱て寐て見てエもんだ、女
 房ぢやアなし、娘ぢやアなし、大家の隠居さんの圍
 者どわりやア男ツ切れは居めい、家は廣し、ナニ儘
 よドツなるものか忍んで往つて強談し、娘だと言へ

ば言へば仕方がない手足を引ッ括つて男の一念望み
 を遂げずに置くものが」と頻りに其の女に目を着け
 ましたから、世に美人は薄命と云ふがそれに違ひご
 ざいませぬ、此の女も縹緞が美しい爲めに三次と云ふ
 者に狙はれて遂に其の身を捨てるやうなことに成り
 ますることゆゑ、マア餘り御婦人方は縹緞美しに産
 れない方が宜うございす、ト言つて餘り不縹緞も
 困ります、三次に於きましては段々路次を往つたり
 來たりして様子を窺ふところが其夜は旦那どのも來
 ない様子、宵からも忍べませぬゆゑ寄席へでも往つ
 て機侍をしてと、其處を出で途中で一ト口呑み、
 彼れ是れ子刻頃になつて玄治店の路次を跳踰へ段々
 家廻りを忍ばうと廻つて見た所が締りが嚴重、堀高
 く忍返して二重に打つてゐるから中々這入られませ
 ぬ、どうかして彼の女を……と云ふ一心でトツ

台所の屋根へ這上がり、引窓から忍ばうとして誤ッ
 て引窓よりズデーンドンと轉がり落ちて腰骨を打ち
 ましたゆゑ暫らく立つことが出來ない、三次は腰を
 擦りながら漸々立上り彼奴等を揚げましたら此の持
 ツて居る態切で威かして置いて本望を遂げやうと度
 胸を極めて居るが、髮坊が揃つて居てキヤードもス
 ーとも言はない、ソツと台所から中仕切の障子を開
 けると、其の次の間が四疊半、其の次が寢間、横に
 廣く庭を取つて座敷がある様子、土藏もあるし間口
 も廣し、奥行も廣くて二階もある様子、中々ドツも
 家の構造は容易ならん好事家でございす、其の夜
 は旦那は泊りに來ないから小女と例の美形とタツた
 二人、向ふ座敷に燈火の見えるのは大方女の寢所な
 らんと障子を開けると、ブーンと云ふ香の匂ひ、旦那
 那が來ないから湯から歸つて一ト口飲んで寢入り際

女中も晝の疲れで白河夜船、三次は行燈の火光を揺立ッて女の寝顔を見ると、色のクツキリ白いところへ湯に往つて来て一口飲んだから櫻色で得も言はれぬ寝顔、一体女の寝顔は宜くないと云ふが容貌の美しいのは寝顔だらうが泣顔だらうが何んでも宜い、實に秋海棠に夜の露を含んだと言ふべき風情でございます、三次は霎時見惚て居りましたが、流れる涎を横に拂ひ「ア、さうも美しいナ」と思はず獨り語を言ひながら上へ跨ッて窓切を頬へピタッ〜と當て〜三「姐エ、姐エ、目を覺しねい、姐エ」ヒヨツト女は眼を開いて見ると大の男が上へ乗掛ッて刃物を頬へ當てて居るから、大概の者ならブル〜と顔へ上がり俄かに顔色も變り聲も碌々出ないのが女の情、だか顔色も變らず、顔へもせず 六「お前、何だエ」三「ナニ 六「お前、何んだよ、何の用があつて今

刃物を持って来たんだエ 三「夜更けて刃物を持つて来りやア盗人だイ 六「ウ、盗賊かい、何時たらう三「盗賊に刻限を聞く奴があるか 六「ダツて分らないから聞くのだ、さう上へ跨ッて居ちやア仕方がない、起してお呉れ〜餘り好い度胸だから三次の野郎もコイツにやア驚いた、けれども今更ら引く譯にもゆかぬ、肩へ手を掛けて引起すと欠伸を二ツして眼を擦りながら何にも言はずにズ〜と寝床を出て惣桐の用篋の抽斗の隠しから二十五兩の包を取出して来て三次の前へボンと抛ッて 六「サア、是ッさりだ後は品物だよ、チーお前も覺悟して来たからにやア取らずにやア歸るまい、品物は上げるから生命の取り遣りは御免だよ、脊負へるだけ脊負ッて御出で、是は二三日前に頭髪のを買へと言つて旦那が置いて往つた金、お前もまだ盗人の方ぢやアデモ

だねい、開者の家に金が澤山あると思つて来るたア何んだねい、手當の金子なんざ大概私も放蕩だから使つて仕舞はアチ、それで宜けりやア持つて御出で〜三次の野郎餘り度胸の宜いのに驚かして暫らく口も利かずに見詰めて居たが、博奕に勝つた金子は腹掛の中に百兩の餘も這入つて居るゆゑ、ザクリツと二分金を掴んで女の前へザラ〜と放出して 三「姐エ、金子は要らねいよ、已れは此の通り金子を置いて行くが一ツお前に頼みがある、他ぢやアねいが先刻路次でお前と擦違つたときお前の方は氣が注ぐめいが、ア、世の中に丈恰好と云ひ頭髪の色澤と云ひ縹緞と云ひ此の位の女をば己ア繪にも見たことばねエ、餘り奇麗だから引返して井戸端に洗濯して居る婆さんに聞いたら確か木綿店の大家の隠居様の園者だと云ふ、ハテ女房ぢやアなし娘ぢやアなし金の

光りで抱いて寝る、さうせ其様な奴に抱き心の宜い者はねい、歳は若し自分で言ッちやア濟まねエが已れもそれはど醜い面でもねいから一番懸合つて見やうと思つて来たんだ、一夜抱かつて呉れねいか、嫌だと思つても思ひ詰めたる男の一念、手足を引括つても望みを晴して歸らうと思ふ、姐御後ねだりはしねい、ヨツ悪い夢を見たと思つて一夜たが……イヤにそれを長けたア言はねへ 六「フン、さうかい、ンなら早くさう言ふが宜い、サア直ぐ此處にお這入り「早いの早くないの、それだから當つて碎けるどは此のことで、トウ〜こ、で天人お六、臍の三次と通じましたのが此の二人が生命を捨てる根原でございます、慎しむべきは色情、誠しむべきは慾でございます、却説臍の三次は遂に望みを果して立出るときにチラリとお六に顔を見られた、南無三仕舞つ

たと思つたが、併しナニ抱かつて寝るときは人間の根性はその分ちから、自惚れかは知らぬいが、女はズツと己れに北山天皇五代の孫と来て居るから大丈夫だど多寡を括つて戸外へ出で、途中で一口飲み、ニコ／＼笑ひながら西河岸へ歸つて来て、其後モウ往きたいことは山々だけれども先方はどう云ふ丁簡は出来ない、言く欺して置いてアングリ遣らうと云ふ先方の手段かも知れないと思ふから三次は油断をさせぬ、二十日ばかり経つて、三次は堺町の芝居を見に往き丁子屋と云ふ茶屋が馴染でございませうから、其家から往つて一幕見ましたが、素より稼業が稼業なかけ金銀は湯水の如く使ひます、それゆゑ西河岸の哥兄、西河岸の哥兄で下へも置かないやうにして居る 三三主婦や、モウ已ア芝居も倦たから今日

は是れで歸らう」と勘定を拂つて表へ出たが未だ日が暮れさせぬ、昔はモウその大切は夜でなければ終ませぬ、二幕ばかり残して表へ出ると向ふの御茶屋の二階から見下して居たのが例の立治店で一夜抱つた女だ、二階と下だから口止をすることもドウすることも出来ず、仕方がないから儘よ丁子屋の主婦の口を止めたつて向ふが其手を以てやりやア稼業のことだから言はずにやア居めい、さうなりやア無駄な此女から食ひ込みやアそれまでのこと、度胸を捲いて三次は丁子屋の家を出て廻り五時頃になつて西河岸の家へ歸り一親父や今歸つた 父三三、三次やお前今日は芝居を見に往つたんぢやアないか 三三往つた 父一堺町の丁子屋の家から芝居を見に往つたナ 三三、どうしてそれを知つて居なさる 父三三云ふ譯だか二度も丁子屋の主婦が喚びに来たせ

「ア、サテは喚出しを掛けるな、タツた一度で細首が飛ぶか、仕方がねへ何にしてもタツタ一度で暴露るとは高い玉だ、……父親や此處に金子が這入つて居るからノ、二三日已らア往つて遊んで来るから此金を以て乾兒共に何か買はせて食つて居て呉んな、又金子を持つて来て遣るから…… 父三次、お前何處へ往くんぞ 三三エ、何處へ往つても宜いよ、一寸用達しに往つて来るんだ 父一先きのねい親父だから苦勞させて呉れるなよ 三三大丈夫だよ」と口では言ふけれども三次は「ア、事に依つたら是れが親子の永訣にならうかも知れぬい、前へ一ト足、後へ一ト足少しく別れ兼ねたけれども親父に悟られちやア面倒と思ふからツツか出で来たがモウ口々に締りが附いて居るかも知れぬいから逃げたつて逃げられるものぢやアぬいが、そこは悪事をして居る奴は覺悟が

違ひます、堺町の丁子屋の家へ歸つて来て 三三主婦やお前已れの家へ二度迎ひに来たさうだな」主婦三次さん、お前が歸つて往くとね、お向ふの茶屋から美しい年増がガラリ這入つて来た、ハテナ向ふの御客だが門違ひでもしたのであるか、何んで来なすつたらうと思ふと、主婦さんチョツと顔を貸してお呉れと言ふから奥へ連れて行くと、是れは少ないがホンの御土産だよとお金を一兩サ、男衆は何人で女衆は何人だと聞くから、ハイ是れ／＼でございませうと言つたら、ズツと頭宛てに一分ツツ、さうして別に一兩お金を出して主婦さん何かチョツと美味ものを取つて呉れど、マア貰つて言ふぢやアないが女でさう奇麗に金を使ふ者がある譯のものぢやアない、それから何の御用だらうと思ふと、今お前の家から歸つた彼の御方は何處の何と云ふ人ですエと尋ねるから

河岸の三次さんと云ふ人ですと言ふと、アさうですか彼の御方をチョツと喚んでお呉んなさいよと斯う言ふから、それでお前さんの家へ二度も私が見に往つたんだ、三次さんお前大層な者を喰つて居るねエ
 「三次はまさか已れが忍んで往つた女だとも言へず野郎ウームと唸つた 三「女は何處に居る 主婦 奥の二階に一人で飲んで居るが、是れが三銚子目だが少しも酔はないよ、美しい女だ、斯うやつて芝居茶屋をして居るから随分美しい女が磨きに磨いて来るが白粉氣がなくて彼様綺麗な女は私は見ることがない、情婦かい三次さん、情婦だらう 三「フ、ン、マア〜其様なものよ」言ひ捨て、三次の野郎は度胸を据ゑて二階へ上がり階子段の手摺の間から首を出して三
 「姐さん、お前喚びに寄越したさうだナ 六「何んだネー、此方へ御上りナ 三「エー上ッても宜いかい 六

「宜いとも、ドンなにお前待遠うで立ッたり居たりして居たか知れない、サア此方へ来て一ト口お飲り 三「ソレはどうも有がてい 六「此の間から戸の締りをしないでお前が来るかと思つて毎晩鑰錠をはづして待つて居たのに、三次さん何故来ないの 三「何故来ねエつて往かれた義理でもあるめエ 女「何アに構ふ事が有るものかネ 三「な、言つて置いて置く餌を飼つてやらうと云ふのぢやアねエカ 六「何を…… 三「何をつけアングリ俺を召捕つて突出されるなんざア氣が利かねエナア 六「馬鹿なことをお言ひアないよ、人の氣も知らないで、妻の旦那と云ふのは石町の定宿に泊つて居る越後の小千谷の縮問屋の大旦那で年に半分は石町に、半分は小千谷に、雪でも降る時分に此地に来て居るが何でも來月の中旬に旅立して十月頃に歸つて来る、其中は妻し一人で居るのサ

、何でも宜いから三次さんは是非兄さんになつて来てお呉れ 三「兄貴に……斯んな兄貴もあるめエ 六「イ、よ妻が飲込んで居るからサ、お前も氣が小さいねエ悪黨のやうでもない」と云ふので是れから三次を玄治店の宅に引摺り込で、旦那殿が折り〜來ると妻の兄でございませす妻の兄貴ですと云ふので胡麗化して居ります、此の越後の縮問屋の旦那と云ふは折本の莊助と云ふて六十四になる奇麗な阿爺さん、半年は天人お六と云ふ程の好い女の側に來て居るが、江戸へ參ると定宿にも往つて居てそんなに足も近くは來ず、時々來て軟らかい婦人の介抱、五勺上戸だから澤山は飲みませせんが來る毎にお酒の相手でもさせて、三次さん〜と全くお六の兄と心得て居ります、淺草邊に參りますと度々さう云ふのがありませす、表面が兄貴で夜になると狸貴になるなと云ふ

のが幾らもありませす、三次は毎晩の様に來て居る、十一月の中旬にチラ〜と雪が降る、お六と三次の二人は小鍋立の突付食ひ献へつ酬へつ酒を飲んで居ると戸外の格子戸を瓦落りと開けて 莊「お六や 六「オヤ旦那様御出でなさいませし、悪いものが降りますのに能くマア御出でなさいませし、おみやや旦那様が爲入しつたんだよ」と云ふから小婢がそれに出て手を突き 六「入らつしやいませし 莊「ア、誰かと思つたら三次さんか能うこそ…… 三次「へエ旦那さん、只今參りましてお六に御馳走になつて居りました 莊「ハ、ア左様で何にもなくて往けますまい、お六や何にか甘味ものを三次さんに取つて上げて呉んな 三「毎度參りましてはお六に御馳走に爲りまして 莊「ナアニ婦一人だから心細いでナ時々は見廻つて遣つて下さい……お六や已は鳥渡湯に入つて

来るから、幸ひ熱海の温泉は此處から近さは近し湯に這入ると好い心持だから、年を取つて來ると湯が何よりの樂しみ、ソレではもう三次さんにも上げるが好いが鳥渡鰻を取りに遣つて矢張り彼の長焼かい、年を老と、余り大きいのも旨けず細いのもホソくして往けない、中位ゐの程のいゝ所を二三に酒を早くさう云つてやんナ、何でも鰻に限る」と云ふのでチャンと酒と肴の事を吩咐けまして 莊「お六や、是れは爲替の金た、三百兩あるが是は用篋筒の抽斗に入れて置いて呉れ」とお六に藏はせたのが折本莊助の通り、小人罪なし玉を抱て罪ありどか三百兩からの金を他人に見せると云ふのは常人の心得違ひ、人を見たらば先づ賊と思へ火を見たら火事と思へど、是れは卑近とした言葉だが、味のある諺で、此位に油断せず交際して居れば宜いと云ふことでさ

さいます、折本莊助非業の最後を遂げると云ふ話次回に辯じまする、

第十席

さて天人お六は鰻などを小婢に吩咐けまして暫らく經つと莊助は風呂から歸つて來て 莊「ア、好い心持ちだ、三次さん私は此方でお先きに始めるよ」と鰻で以て御酒をチビリ〜飲んで居る 莊「ア、湯が醒めない中に寐ませう、お六床を延べて下さい 六「ハ、イ御床はチャンと敷いて置きました 莊「それぢア三次さん御先きに御免なさいよ……緩くり御飲みなさい」と旦那様は一間に這入つて寝る、障子屏風を立てまわして、相遮の障子をビタリと閉つた、エ、水不漏樂しもうと思ふ所に厭な老爺が來たとは思つても其處は稼業、三次に目配して 六「マア兄さん悠くり御飲みなさい妾はモウ御飯は廢さうよ」と女中を

呼んでソレ〜後片付けの事を吩咐け自分も一間に這入つて寝る、後に殘つた鰻の三次「先向は本店で此方は出店だから仕方はねエが抱つて寝られるのを鼻先きで見て居るのも余り心持ちが好くもねエの」飲んで居るさへ無錢だから是も仕方はねいが、雪は降るし小娘を呼んで床を敷て貰ひ床上で殘りの肴でチビリ〜と三次が酒を飲んで居る彼れ是れもう十の二時過ぎとも覺しきに窓と障子を開けて 六「三次さん〜」 三「何でエ 六「何だねエ……アんな老爺に三百兩持たして置くのは惜いもんぢやアないか……殺害してお仕舞ひな 三「殺害……殺害ツてソんな事が出来るものか 六「何だねエ意苦地のない妾は彼を殺すと云ふど是れで三度目だヨ」慘酷奴も有ればあるもの、三次の野郎も驚いたが牝鶏晨を告ぐるの例ひで根が拘賊でも仕やうと云ふ鰻の三次、結局二人で殺

殺して仕舞つたが偕て此の折本莊助の死骸の棄場に困るから姑く思案して居たが 六「三次さんアノ二階の戸棚の隅に米俵があるかチ、此の間 俵の米を悉皆空にして何か又入用でも有るかと思つて貯つて置たが、今は本統の使用の時、ソツクリ綾繩まであるんだよ、川んだ所には米を詰込んで俵の儘に背負い出して今夜の中に始末をつけて仕舞ふがいゝやチ、家に死骸を置けばソんなコンなから悪事の露顯れるのは往々有る事、又長い月日には臭ひもするし何の彼のと云つて人の死骸がわれば心持ちも好くなし 三次さん往つて捨ててお出でよ、三次の野郎死骸を俵の中に入れて漸く三斗八升程に拵へ月も出たから怯懦者なけれども此の儘にもならず肩へ拵ぎやがつて米俵なれば宜しいが人(四斗)俵と云ふのは是れでけして、俵を脊負つた容子はお茶の水の松平がおて

の屍骸をかついたのも同じやうなこと、今なれば
 憲兵か巡査が始終見巡られますが其頃には何にも無
 い、遙かに聞ゆるのは「チリン……蕎麥ウイ」
 犬は頻りに吠へる、彼處から魚河岸へ出て魚河岸か
 ら釘店一石橋、やなぎと云ふ髮結床の處へ来て内堀
 に放却やうとすると犬が知つてか吠へる「シツ」ワ
 シツ……「シツ……シイツ」ワン……ワン……
 ……と咬付く様子だから「此の畜生め……」と犬を
 追ひ廻して居る、處へ通りか、つたのは駕籠屋でこ
 ざいます、同じく犬を追つて呉れながら「おヤ誰
 かと思つたら西河岸の阿兄ぢやア無いか」「オ、竹
 か、何處へ往つた」「己ア仕事に往つて歸つて來たの
 だが、阿兄それは何んだい」「三ム、……是れか……
 竹手前は何處へ往つた」「神樂坂まで仕事に往つた
 今歸りだが、阿兄何だ米俵なんぞ引脊負つて」「三」是

れかア……此りやア、ナアに丸の中の賭場へ往つて
 ナ突ると二日失敗して三日目と云ふが今日のこと、二
 日分の失敗を取返して十七八兩の打越しになつた、
 ……所が先方で金が無エから貸して呉れつてエから
 籠棒めエ前に我の方から二三日の融通だ勘辨しろよ
 ……と言つた時強情の事を言やアがつたじやねエか、サ
 貸して往くことがならぬエ何でも現金拂ひにしるッ
 たら仕方がねエ米俵ツきり無エてから肩が痛いのを
 我慢してヤツと爰まで引負つて來たんだ」「おソレぢ
 やア宜いじやエか、今夜は其俵を己れの家に持込ん
 で明日の朝早く兄貴の家まで持つて往かう、日頃は
 兄貴に世話にばかりなつてるから斯う云ふ時にこそ
 篤實見せにやアなんねエ」「三」ナアにそれにア及ばね
 ねエ」「宜いつてことよ翌の朝早く兄貴の所まで届
 けるのは遺作もねエ……平や手前は親方ン所に駕籠

を放り込んで呉ヨ、若し親方が聞いたらナ、竹は直
 ぐ釘店の宅に往つたと話して呉れエ」「平」ウム、竹、
 ソレぢやア己ア直ぐ親方ン所に」「ア、此の方は
 ナ手前にソラ平常話しをする西河岸の三次兄貴とッ
 て始終己が厄介になる人で、今日は一ツ恩返しだ平
 「左様でけすか、ソレは何うも俺の旦那の事は竹か
 ら聞いて居りやしたが平藏ツてエ橋夫で、何分お願
 ひ申しやす」「三」ア、さうかへ誠に少ないが是れは明
 日の飲料だよ」と幾らかのお金を遣り竹にも明日の
 飲料と云つて一分遣る、悪いことをするだけに其處
 は又氣前のいゝもの」「三」ソレなら明日は夜が明けね
 エ中に来いよ遅くなると承知しねエが面倒になるか
 ら」「竹」へエ承知しやした、翌は暗い中にお届け申し
 やす」「三」何分頼むが」と内心頼みたくはないか、三
 次は其儘玄治店には往かずに西河岸の自分の家に往

つて寐て仕舞う、明日の朝早く起きて駕籠屋の竹奴
 が三次に頼まれた俵を擔ぎ出さうと思ふと一面に雪
 がビツシリ降り積つて居る」「ア、大變積つてるウ
 、寒い……是れぢやア堪らねエ、マア一風呂」と
 路次の入口に湯があるから湯に這入つてたら橋を越
 ねれば西河岸でけすから釘店の竹と云ふ與夫が戸外
 に出て湯に這入つて居る、スルと此竹の女房おくに
 國「エ、マア、是れから米エ買つて來て炊くのも臆
 劫だ、雑炊でも拵へて食べずばなるまい、菜はなし
 ……ト獨語を言ひながら小桶に僅な鳥目を入れまし
 て米を買ひに往く、格子戸を出やうとする途端に下
 駄の前緒がボクリと切れた」「國」マ、マア、一丁物の
 下駄の鼻緒を切つて仕舞つた、はんに妾とした事が
 、早く家の良人が歸つて來て呉れよば宜いに、言ひ
 ながら振反つて「オ、丁度宜いや是れア西河岸の阿

兄が丸の内に往つて賭博で勝つた其の抵當に持つて
 来た此の俵、家の人から後で話をすれば一升や二升
 借りたつても何アに愚圖々々言ふもんじやアねエ、
 玄米なら徳利でグスノ、突けば宜い」と俵の口を開
 けると驚いたの何の樂鐘頭がビヨイと出た、ヤア
 と云つたなり竹の女房駭ろいた餘りに除水の隅に腰
 を抜して加之に腮を放して仰向に轉倒反てア
 〱、雪は降てるし世間はシーンとして居るから向
 ふ隣りでも援助に来る人が無い、所に表の格子戸を
 がらりと開けて三次が這入つて來て見ると俵の中か
 ら樂鐘頭がニエーツと出て、其の側に竹の女房お國
 が轉倒反つて居るから 三「お國、何うした 國「ア
 〱〱〱 三「何うした腮を外したのか」と云つてる
 處に湯から歸つて來た竹の野郎も吃驚して腰が抜け
 る程に驚いてブル〱〱頭へ出した 三「竹…… 竹「ア

一「何も驚く事は無い、イ、や驚くことはねエ 竹
 「西河岸の阿兄…… 三「見たナ 竹「見ア仕ねエ 三
 見やア仕ねエツて何だ、それだから已が止せとアノ
 位エ云つたのを日頃世話になつてるから斯う云ふ時
 に篤貫見せにやアなんねエツて無体に負擔て來たヒ
 やアねエか、ソレは宜いや、宜いが已れだつて此の
 俵は斯う云ふ俵だとは言へねエヒやねエか、手前の
 了見が何んなか知れねエから俵を投棄すには仕方が
 ねエ、先づ余が家の二階へ上げて置いて置いて明日は何う
 か仕事をしようと思つたから手前にも夜が明けねエ
 中暗エ中にとアレ程約束したヒやアねエか、それに
 最う夜が明けやうと云ふのに持つて來ねエ、已ア暗
 いに眼をさまして待つても待つても來やしねエ、家
 の人でも話しはならす世間の人には固よりヨ、日頃
 が日頃だから感附かれ足が付き、可厭な叔父さんに

踏込まれて忽ちに御用と云はれたら素首が飛んで仕
 舞うソ 竹「一体兄貴コリヤ何だ 三「何でもない、何
 でも宜いからナ、其の俵を今日は爰に置いて今夜の
 中何處かに投棄してくれ、サア竹手前に十兩遣る、
 お國や腮の外し賃に手前にも五兩遣る、其代りコツ
 若し此のことが手前達の口から願はれりやア連累で
 仕舞ふぞ、何うせ首が無エ身体だア、手前達の素首
 も飛ばねエやうに要心しろ 竹「御免なせい、首が無
 くちやア一向見當が知れねエから」知れきつた話し
 で、其儘にして三次は玄治店に往つたか西河岸に往
 つたか戸外に出て仕舞ひました、後に残つた竹の奴
 は女房と二人でブル〱〱〱〱根が臆病者だから
 立つて見たり座つて見たり、戸外に足音がするとサ
 ア踏込まれやアしないかと臆病者で日の暮れるのを
 待つて居る、此の竹と云ふ奴は根が愚直つて半馬な

人物ですから俵を脊負つてスタ〱〱遣つて参りまし
 た、丁度雉子橋の見附の御堀端で放棄さうと思つて
 参る黄昏どきの頃だから、ウロ〱〱マゴ〱〱往きつ
 戻りつして居ると丁度向ふから素看板の仲間が酔放
 跟と云ふので、彼方に押し此方に押し 早「すつかり
 取られて方が附かねエヒやアねエか、先刻二三度良
 のが出たから乗虚で遣つた所がア、アの通りの失敗
 だ 乙「愚圖々々云ふなよ、頓馬の野郎ヒやアねエか
 、滅法界寒いなア 丙「オ、見ねエ彼の問拔の野郎が
 御扶持米たせ、甲「御數寄屋から擔ぎ出したに違エ
 ねエ、何うだらか彼奴一番撲倒して俵を取るとエ
 のは 乙「成程御扶持米が出たら持つて來て呉れ
 と政右衛門さんが云つて居たが、何うだらう此奴一
 番俺から頼んで三分か三分二朱に買つて貰ひ、引返
 してモウ一番勝負からう、それでなければ今夜途中

で一杯飲んで寝込みには往かうぢやアねエかと云つて
 三人で相談をして居たが一人の奴が一番先にドーン
 と竹に突き當たりながら 乙「何だい此の野郎 丙「能
 く眼を開いて歩きやアかれ間拔野郎」唯でさへ放り
 たくつて堪らない所に不意に喧嘩をしかけられたか
 ら急遽俵をそれへ放り落してドンドンドットと竹の
 野郎は一散に逃げて仕舞つた、斯う云ふ所から畢竟
 追盗などが始まるので 甲「何うだいコソ一ツ突衝つ
 たら譯エなく俵を推放出して往ッちまやアがつたは
 、アツハ、、、 丙「オイ何だか喚い俵だのう 乙「
 何にしても好いや政右衛門さんの所は九段の坂下だ
 丙「早いが勝ちだアノ野郎が戻らねエ中に」と遂に
 政右衛門の宅に擔ぎ込んで其俵を三分二米に賣りや
 がつた、買つた方では滅法界に廉いと思つて仕舞込
 んで二階に上げて置く中にサア臭くつてく堪らな

い、依つて開けて見ると死骸だから驚いたの愕るか
 ないのツて、ソコで仲間には直ぐに三人とも召
 捕りに相成り段々吟味で見受すると實は斯う云ふ所
 で野郎の脊負つて居た米俵を取りましたと云ふ、無
 論入半仰付けられましたが是れは米俵だと思つて奪
 ひ取つたと云ふ三人丈の刑状、ソレから段々死骸を
 検閲ると其死骸の中から石町の定宿の書付が出た、
 依つて又石町の定宿を御調べに成ると、越後の縮間屋
 の折本莊助と云ふことが解かり、扱ては玄治店の女
 が怪しいと云ふことになつた、
 御話變つて玄治店の三次お六の兩人に於きましては
 或は御調べにならうと云ふの懸念無きにしもあらず
 、と云ふは惣籠屋の竹の咄の様子では何時しか知れ
 ずには居らない、一層高飛びしやうと云ふので何へ
 か影を隠したから暫らくはそれが知れずに居たが、

天の網はいつまでも免れることは出来ませぬもの、
 どうとう上州高崎に於いて男女ども召捕られて、江
 戸御半内に引かれ御吟味を受け居りましたが三次は
 遂に東の半の二番役となり、女半の支配人と云ふは
 是れ亦例の天人お六、女半には名主と云つて別にな
 い、永牢者が支配をするに定つて居る、永牢者がこ
 ざいませんと云ふと非人の女房をお雇ひになつて御
 牢内の世話をする、婦人半でございますからサツ澤
 山の人數もなし万事奇麗でございます、男半は多勢
 だから大變、疥癬などの梅瘡などの云つてウン／＼呻
 鳴り散らして實に何うも此の世からなら地獄でござ
 います、其處は女半は大きに樂なものさうにござ
 います、其支配をして居るのが天人お六、其處に來
 たのが例の姐妃のお百藝名小さんでございます、是
 れから遣出し願ひと云ふのだが是れは別口として先

づお百の御調べを言上致します、即ち是れからが
 百の本文に相成ります、
 甲州巨摩郡荒川無宿彦五郎 彦一 依「出羽の國秋
 の國秋田郡小町村無宿重吉、深川西横町藝名小
 事お百、此の三名は南御月番で依田豊前守政治公の
 御吟味でございます、白洲にズラリト並んで 依「甲
 州巨摩郡荒川無宿の彦五郎 彦一 依「出羽の國秋
 田郡小町村無宿重吉 重一 依「深川西横町藝名小
 さん事お百 百一」御奉行様御席を御進みなされ
 依「彦五郎面を上げエ」依田の空眼りと云ふて並
 ない御奉行様、其頃七奉行と言つて大岡越前守、初
 鹿野河内守、根岸肥前守、依田豊前守、筒井伊賀守
 、遠山左門衛尉、松野河内守、なんと云ふのが名代
 の御奉行様、松野は久しく大阪町奉行をして大坂の
 騒動を調べた人でございます、

扱て依田豊前守様御席を進まれて 依「其方は何歳に
なる 彦一四十三歳に相成ります 依「幼名から彦五郎
と申すか 彦「幼名から彦五郎にございませぬ 依「何
か重兵衛と云ふのは偽名かナ 彦「へエ、是は其の旅
小間物屋をして居りますので、ホンの表面を飾つて
旅小間物屋の美濃屋重兵衛 依「左様か、小名木川の
佐竹の金子を盗まうとして金藏を切り破り千兩の金
子を奪つた時に金奉行戸塚九郎兵衛を鉄砲で撃つた
と云ふが其方が放たのか 彦「恐れながら御奉行様に
申上げます、是れは私の乾兒で江州彦根無宿の金五
郎と云ふ者がございまして、ソレと是れに居ります
重吉と三人で小名木川の佐竹の御命藏に盗りまし
た、元と此の重吉と申すものは佐竹の邸に奉公致し
、邸の様子を知つて居りますから、是れが萬端の手
引きで鍵をも手に入れましたる事で、然るに戸塚九

郎兵衛殿直ちに御捕方に向はせられ 私共を斬つて
捨てんとなさる御容子、なか／＼の御手者へ迎も
敵はんど思つて彦根の金も舊は江州の侍、私の乾
兒に爲りましたが鉄砲はなか／＼能く出来ますから
横合からドーン……一發胸部を向ふに貫きますと煙
りの下を潜つて四郎三郎さんとか云ふ御方が江州彦
根の金を真二ツに遣りつけて仕舞ひました、それを
見て小哥は小名木川の佐竹の邸をどび出したんです
が、全く金は其場殺されちまい、重は小哥と一緒に
に逃げましたが、今日は何せ御召捕に爲りましたか
ら、御吟味でござるに依て残らず白状仕ります、
一事言ふか言はぬにズツと速かに白状だが、大悪
黨と云ふ者は総て年貢の納げ時だと思へばサツ悪ひ
れる氣色もなく尋常にスラ／＼と白状致します
るもの、イヤ何うも詰らない賊人であると斯う急に

は白状致しませぬ、依田様は篤と彦五郎の風采から
申立を遂一御聴取遊ばして、人物と云ひ氣性と云ひ
、武藝も勝れて居ると云ふが如何なればこそ賊と言
はれて居るか惜しい人物と思召たけれども仕方の無い
ことと是れから御吟味が重吉に移ります 依「重吉重
「へエ 一面を上げエ……何歳になる 重「三十五歳
に相成ります 奉「其方は生國は出羽ヒヤナ、幼名
から重吉か 重「へイ幼名から重吉と申しやす、十五
の時から院内の金山人足に撰まれました八華山と申
して中々立派な山、其山の金掘りを十九から廿歳に
かけて努めました其時の御金奉行が戸塚九郎兵衛
様で其の戸塚様の御氣に入り、御供をして三味線堀
の御邸に参つて奉公致して居りましたが、酒の上と
は云ひながら急場の難に差迫り御手元金を攫んで遂
電致し、それから仕方がございませぬので馴染の友

達の所をグル／＼廻はつて居りましたけれども、遂
に身の置き處がございませぬから、友達に勧められ
小さな商ひでも仕様と云ふので本郷の菊坂に女房持
つて小間物屋を始めました、根が博奕が好きでけす
から少とも商ひには出でず、博奕ではメリメリ取られ
る、始末に終ぬい所から六兩の謀判で遂に引立に成
らうと云ふ際で何うやら其場は逃げましたが、後で
聞けば噂が六兩の金故に世間を狭くしちやア詰ら
ぬエと六兩の金を先方に遣つて示談をしたと云ふ事
でけすから其一條は先づ帳消しになつたやうなもの
、全く私は小名木川の邸に奉公をして、三味線堀
にも往つたり來たりして居りましたから、屋敷の様
子合鍵の在り處も残らず知つて居る、實は其御飛脚
が金を渡して仕舞つた容子だからソレならと云つて
御命藏に盗りました、其時戸塚九郎兵衛様は是に居

りまする彦五郎の重兵衛の乾兒彦根の金ていのが鉄砲で射撃ちまつたんでげすが何うも小荷が手づから御主人を殺したと全仕事、何うぞ御處刑を願ひたうございます、併し一ツ御奉行様に申上げますが是れに居りまする熟者の小さん、是はもうコンな優しい顔をして居てもそれは、甚酷悪人、先の亭主の桑名屋の徳兵衛と云ふヨイ、を砂村で打殺して仕舞ひ盲目婆の峯吉の娘を吉原の三浦屋に年一杯五十兩、九十五兩は手取りで占たが盲目婆がギヤア〜と云ひますから小荷に金を十兩呉れて隅田河原に死骸を沈め、へん……俺にはタツタ骨折が十兩、残の八十兩は此の女の一人占め、何うでげす、さう云ふ大悪人でございます、依「小さん、面を上げる……何歳になる、小ハ、廿六に成ります、依「ナニ、廿六歳か、小ハ、依「重吉の申した通り相違あるまいナ、小

「何う致しまして此處ナ重吉が是れに居りまする彦五郎が留守になると、「ヤレ酒の酌をしる」の「同衾を仕る」のつて仮りにも亭主のわさ者を、縦令稼業は賤しい藝者でも亭主と定つた者を差し措て重吉風情に抱つて寝るのが厭故に度々断りました、其遺恨で斯様な虚言を申します、自分は何うせ無命適はぬ事と思つてか妾迄を、抱き込めよう云ふ重吉の奸策、御奉行様、何うぞ御察し下さいまし」とボロボロ涙を流しましたは成程何うも外面如菩薩、内心如夜叉、表から見れば實に美しいが裏から覗いて見ますとギョツとする程の恐ろしい悪黨女

蛇食ふと聞いて恐ろし雉子の聲

わの聲でトカゲ食ふか杜鵑

毒婦と云ふ者は至つて外見は優しい者、人間も外面の柔和で言葉を奇麗に使ふ様な者には兎角心の悪い

者が有り、見懸けは悪くても内心の少しも悪い事は無いのが多いものでござります、依「重吉、重「ハイ、依「小さんの申立つたる通り相違ないか、何うぢや重「何うも御奉行様あんなマア虚涙を仕やアがつて御奉行様抱き込めようとして居やがる、女が美くて、假りにも親分の女房を、何んで俺が同衾をしるの何んのツてソんな事を云ふ者でげすか、藥り程もソんな事は言つた覺ははございません、斯く重吉は小さんと云ひ争つて居る處に彦五郎の重兵衛が、彦「コレ重吉、請らぬことを云ふな、ナ、砂村で此女が亭主殺しを仕たと云ふも局りは乃公が差圖で殺したのだ、峯吉老婆の娘を買つたも已が買らしたのだ、重「親分、お前さん迷起なすつちやア困る、チ「親分、自分の女房だから助けやうと云ふのは人情かも知れやせんが、助けて置て御覽じろ後で何程の人が困る

か知れぬエ、だからお前さん、是れは情で助けてエのは量見違ひですせ」彦五郎、小荷が殺したと言ひ小さんは知らんと言ひ、重吉は又慥に殺しましたと云つてから御奉行様も裁判に困る、彦五郎の方は小名木川の金藏を破り戸塚九郎兵衛を殺しました答に依り切出獄門と云ふことに極り引廻しの上に鼻首、其時に「何うぞ小荷は此のお方の手にか、つて生命を棄てたうございます」と云ふは四郎三郎に切られて殺されたい忠孝二ツを全くさせたいと云ふので四郎三郎へも御奉行から「當人が是れ〜と申すに付き首を刎てはと尋ねられる」是れは山田家で刎役でございます、が次第に依つては同心衆の中で刎もありまずが先づは俗に首斬淺右衛門と云つて麴町に以前は随分大きくやつて居た、あれが即ち山田淺右衛門で當人はマア「何うか四郎三郎に斬りたい」

と云ふから此の旨を四郎三郎に傳へると「四ッコハ奇
 特重極なり、如何にも私には父の讎仇である、設ん
 ば此の者が自ら手を下して撃ないでも此者が首領と
 して子分の金五郎と云へる者が殺したのだから」と
 云ふので遂に四郎三郎刀を擧げてパツタリ首を刎ち
 落して鼻首致したが、其の首は賊に何うも笑つたや
 うな顔をして居るから大層な評判、
 サア此方は小さんと重吉、傳馬町の御牢内にござい
 まする閻魔堂に移されてソコで此の石間と云ふ拷問
 に懸けます、則ち膝の上に石を載せ其下には角の木
 で三ツ並んで居ります、一本は又此の股の間に入れ
 て懸てそれに石を載せる、只座はつてさへ痛いの
 んでございます所に斯う間に角棒を入れて上から石を幾
 枚も載せるのでございますから何も痛いの痛くない
 のつて、大概の者は二枚載せられますと云ふと氣絶

する、尤も中棒は知れませんが下の三角があつて足
 にメリ込と云ふことで演者は左様な責に懸つた事が
 御座いませんから能くは存じませんが、罪によつて
 石間の石を餘計に抱せられますと云ふことでござ
 います、重吉に於ては二枚目にてウーンと氣絶した
 、お百の方は体格が健いかして何枚載せても平氣で
 居ります、何為かど云ふと此奴の身体は普通の身体
 で無い、正徳の元年十二月の大晦日徳兵衛が攝州沖
 に差かゝつて來た時からして怪しい奴が身体に憑て
 居ればこそかゝる悪事も行ひまするので、正氣の
 者なら堪へませんが既に魔物の仲間入りを致したる
 お百は斯く石を載せられてもグーとも言はない、其
 の氣が退散に及ぶと云ふ事は一番の結局に至つて申
 し上げるが何うしてもソレ程に痛くもせんか致
 して、どう〜重吉の方は二度目の牢間に勞れて西

の二間半に於てコロリと死んで仕舞ひました、が決
 して罪人と云ふ者は相四人一ツ所には入れません、
 一人は東の牢に入れば一人は西の二間半に入れ
 一人が西の牢に這入れれば一人は東の二間半に入れ
 どかしですが、此の牢が東西に四ツ在つて何れも
 大牢と唱へます、ソレ故西の二間半でコロリと死な
 のも東に於ては是を殺したと云ひますから色々に申
 し傳へますが、さうではございません重吉に於ては
 確かにコロリと死なに相違ございません、天人お六
 と云ふ者は頻りに亭主を助けたい已れも娑婆へ戻り
 たいと云ふ所から内々お百と相談して「妾は亭主の
 三次さんを助けて參州岡崎の知己を頼つて逐電をす
 るから、お前さんも今一度したい三昧のことでして
 今少し浮世の風に當つてから御年貢を上げること
 しませう、何を馬鹿々々しい火を放けるのが何より

提徑だから、三次さんにも此事を悉皆話をしてある
 から明日の晩にやりませう」と流石は大膽不敵の兇
 賊、其上を超へて居るのが姐妃のお百「開者風情の
 考へでは何をしたつて逆も及びもない、放火をして
 牢を出た所で直ぐに捕まつてしまへばそれこそ首が
 ない、それより此處は時節を待つ所たわ」と考へた
 から見廻りの役人が「變つた事はないかナ、變つた
 事があれば申立てろ」と巡つて來た時に「恐れな
 がら申上げます、お六に於ては亭主の三次を助けん
 が爲めに火を放けやうと謀つて居ります、しかも明
 晩のことで」と這出し願をやらかした、憎みても餘
 りあるはお百「ソレツ」と云ふのでお六三次は忽ちに
 御捕押へとなり、何を申上げて御取上げなくして
 遂に御處刑に相成る、後に残つたのは小さんのお百
 、這出し願で幾分か罪も軽くなり、他の女囚を取

締つて居ります、斯くて享保の九年より十一年まで何事もございませぬ、お百が廿六、七、八、と三年目の九月半に至つて傳馬上町より出火、みるゝ中に御半内一面の火と相成り、女半切放しのお話より愈々お百が佐渡ヶ嶋へ流されると云ふ一件、

第十一席

享保の十一年九月十七日傳馬上町と云ふ所から火事が出ました、折柄風が強うございまして御半内は眞ッ風下、舊幕の时分には吉原の火事と傳馬町半屋敷の火事ばかりは恣人足が火掛りと云ふことを致しませぬ、と云ふのは吉原町は今と違ひまして遊女は罪人同様の扱ひでございまして、それゆゑ焼けますと三日自分の里方へ歸るとか乃至は情夫の所へ小使を貰ひに往くと云ふので、モウ火事があれば宜い、火事があれば好きな所へ往かれる、吉原から火事が

出れば宜いかと皆なモウ遊女共は樂しむ位ぬ、それゆゑ恣人足が火掛りを致しませぬ、上の御役人も是れは格別の御目こぼしで火掛りをしないからと云つて火掛の者を彼れ是れ申しませぬ、又傳馬町御半屋敷も其の通りで半拂ひになり、三日目に立歸りますと罪科が一格下げになります、唯今ならば何々は酌量して茲に罪を減すると云ふので、其の當時死罪になるべきものは遠島、遠嶋になるべきものは構ひと云ふやうに不思議に生命が助かる、それゆゑモウせうも御半内でも火事があれば宜い火事があれば結構と思つて居りますので、火事があると云ふと一同火の粉の來るのをワツ〜と楽しんで聲を揚げると云ふほどでございませぬ、せうも風が烈しうございましてゆゑ、忽ちの間に傳馬町御半屋へ移つて、ポー〜と燃上りました、それゆゑ東の大牢、東の

二間半、女半、百姓半、揚り屋、悉皆御半内の囚人御預り石出帶刀様、御役人が立會の上々書き物を持たせて半拂ひになりました、是れをその切放しと稱ひます、それだから火事の時に神佛様を拜んで風の來るやうにと云ふのは御半内ばかり、女半、取締小さんのお百、没黄の御仕着に細の柳を掛け毛巻き島田で自手拭の後鉢巻、尻を七の髓まで引からけキメ板と云ふものを振つて素足で以てドン〜ドンドン立退く、サア女半の切放しと云ふので皆な助倍共は其の立退きを見て居る中に「ヤイ〜女半の半拂ひだ、一番先毛巻き嶋田でキメ板を振つて居るのが彼れが深川藝妓小さんと云ふて亭主殺した、久しい御半内なが御手當が宜くしてあるから美しい纏織だ」乙「ヤイ〜其後は高橋お傳で、其後が酔月のお梅だ」其頃其様なものが居るものですが、ドン〜

ドン〜切放しになる、小さんも相囚人と一緒に牢内を飛出したが、兩國を越した頃に漸く鎮火と相成つた、御話變つて深川佐賀町河岸に土藏造りの奇麗な家がある、女中代りに婆さんが台所の用をして居て此家に廿五六歳と云ふ年増が居ります、是も美しい纏織、亭主は店者で朝御店へ出て暮方に御店から退いて來る、俗に之を通ひ番頭と申します、此の女は元と深川西横町美濃屋小さんの隣りに居て近江屋小金と云つた藝妓でございませぬ、美濃屋と近江屋でございませぬから美濃と近江の寐物語と云ふことを能く申します、此者がうのお百の妹分、誠にお百と云ふ女は悪事を働きますけれども氣前が宜くて金銀を人に與るのを何んとも思ひませぬ、小金も小さんに大層世話になり、今では不自由ない身体でございませぬ、先づ雛妓から藝妓になつた時分にはお百が實

の妹のやうに自分の衣服を縫直したり、額髪(おごり)の物を詰めたりして是れまで仕立ツたのでございますゆゑ、お百の處へ始終差入れ物をして居りました、姐さん姐さんと言つて誠に深切にやつて居ります、今は鹿嶋屋と云ふ米問屋の番頭吉兵衛と云ふ者の女房となつて居りますが、藝妓嫁業をしたやうではない、誠に質朴で柔順しく母子仲宜く、亭主大事に家を守つて居ります其の小金が「お母さん 母「何んだエ金「アノ傳馬町の御牢内に火事があつたものだから囚人を逃がしたと云エ 母「さうよ、それを牢拂ひと云ふ 金「姉さんなどはドウしたらうチエ、矢張り牢拂ひになつたんでしやうかね、お母さん 母「姉さんはノッ、彼りやア高者と云ふ御處刑だから牢拂にはなるまい、マア様子を聞けば罪には落ちないけれども上の御役人には確かに殺したといふ御見込みが附い

て居る、何れ御處刑は受けるのだからうけれども久しい間、御牢内に居るから何とか名前を附けて上でも生命を助けるか當人も助かる氣で居なさらうが、ドッも今度の牢拂ひでも確か姐さんなどは助かるまい、ア、云ふ高者で處刑に遇ふもの、切放しは回向院の下屋敷が淺茅ヶ原へ張番と云ふのが附いて立退くのだが、姐さんは切放されて來なさらはしまいよ 金「オヤ母さん、お前高者なんて能く知ツて居る子 母「其の高者など云ふことを知つて居るのは今だからお前に話をするが、お前のお父さんは大工の金と云つて、オヤどうも箸にも棒にも掛らはい強情者、其様な人に惚れたのが私の因果二人の間にお前が出来たけれども御酒は飲み、博奕は打つ、喧嘩はする、どうも三度にわけず生傷の絶れたことはない、さうして御牢内へ何度も何度も往つた、其どみに

私は女結髪をしてお前を十文字に引ツ脊負ひ、差入物と言つて御牢内へ色々な物を持つてお前の爲めにはお父さん、私の爲めには亭主のだから贈つて居た、其の後漸々目が覺めたと見ぬ堅氣の大工になつてお前が十一の歳にお父さんは死んだ、ア、今までお父さんが生きて居やうものならドンなにお前も可愛がるだらうと思ふ、それは私も夫婦の情で若い時分には悪いことをしてお前が、十一歳のとき亡くなつたけれども其の三四年前にスツカリ堅氣の大工になつて、ソんなコンなで私は御牢内のことを知つて居る、磔刑、火刑、梟首、之を高者と云ふ、姐さんなどは亭主殺しに誘切、デマア私は切放しにはなるまいと思ふが、併し段々罪が軽くなつて居ると云ふことを、チラリと聞いたから切放しになつたかも知れぬ」母子が咄をして居ると台所の腰障子がガラ

リと開いた 百「小金坊は家かエ 金「オヤマア、姉さん今お前さんの咄をして居たところ……お母さん、姉さんが傳馬町の御牢屋敷から…… 母「何んだチエ大きな聲で 金「デモ姉さんが來たから」と小金は我を忘れて「姉さん、能く來て下すツたチエ」根が他人だけれども幼い内から眼を掛けて呉れた其の恩義は片時も忘れない、人間として恩を受けて恩を忘れど云ふは實に犬猫にも等しき者 金「姐さんや、此方へ御上んなさいよ」と手を取つて姉分の小さんを連れ込んだ、お百は何處で装を拵へたか隣ツとした装、だから何處へ出しても大家の主婦さんとか御新造さんに見える、女が美し丈がスラリとして居るから衣服が目立って大層奇麗に見える、小金は喜んで「姐さんエ何にしませう 百「私は何にも要らないよ」流石は深川でございますから直ぐに新しい御魚を

百おの姉

馳走いたす、ところへお店から退いて来たのが亭主の吉兵衛「イヤ是れは姐さん、能く御出でなすッた、嘘もお金も喜ぶでございませう、毎日貴方のことばかり言ひ暮して居ります、モウ一度姉さんに會ひたいと言ッてお前さんの御噂ばかりして居ます」百「私も小金ちゃんに會ひたい」と思ッて居りました吉「能く知れましたナ、百お母さんや、小金さんが斯うやつて私を慕ふて呉れまして實に有難い、それや是れやで思ふと若いときと云ふものは心得違ひが有勝ちのものだから、モウお金坊や、吉兵衛さんとお母さんを大事におしよ、斯う幼少なとき妹のやうに私が目を掛けたと云ふて會つて呉れるかと思ふと實に私は涙が出る……時にお母さんや此處に御金が十兩あるが、明日にも妾は半死をするか處刑に就くか生命を限したと云ふことを聞いたらば此金で一ツ

回向をして下さい、母「何んです子、姉さん今吉兵衛さんがお金のことを貴方に申したぢやアございませぬか、お前さんに万々一ことがあつて御覽じろ、それは私が回向をしなくてもお前さん屹度お金達が回向は致します、其様な他人行儀に金子なんぞお出しなさるには及びませぬ、マア申しては失禮ですがア、云ふ所にお出でなされば先だつものは御金でございませぬ、姉さん持つてお歸りなさい、と云ふのも何だか失禮のやうだけれども私はマアさう考へます、百「お母さんやアは穢れた金だと思召して御取りなさらぬでせう、母「さう仰しやられると誠に私は困ります、さう仰しやるならば受取ッて置ませせう、イヤ御預かり申して置ませせう……チー吉兵衛さん、折角姉さんが御出しなすッたものだからそれを受取らないと姉さんが嫌に思召しますゆゑ……」吉「何時も

百おの妃姐

の御氣象だからナニ預カッて呉れど仰しやのなら御預り申すが宜うございませぬ其ときは此の吉兵衛、家の奴が御世話になりましたからマア立派に法事をする積りでございませぬ、其の邊は御安心なさい、イヤモウ香花を絶やす違氣ひはございませぬ、百「それさへ聞けば吉兵衛さん、妾は安心、ドッせモウ娑婆で往生の出来ない身体と覺悟をして居ります……ぢやアお母さん、吉兵衛さん、お金坊頼むよ」後は三味線か何かで口頃の鬱憂を晴らし、宜い心持ちになつたが不圖思ひ出し、百「ア、お金坊面白いので忘れて居たが今夜の中に歸ッて相因人を連れて夜の引明けに御奉行所へ出にやアならない、さうすると一格下ッて事に依りやア生命だけは助からうと思ふ……ぢやアアアお母さん……吉兵衛さん、可愛がつて遣ッて下さい、吉「仰しやるまではございませぬ、金「姐さん

ん、今夜は是非泊つて……」百「お金坊や妾も自分の家同様に思つて居るから泊りたいが、ドッも泊るこゝとが出来ない」と留めるのも聞かず立出づる袂に縫つてお金はワツとはかりに泣出したから、お百も涙を浮めて別れを告げ、料理茶屋の貸提灯に燈火を點け、それを左の手に提げ一杯機嫌で河風に吹かれながら佐賀町河岸を一直線に万年橋を渡つて回向院の下屋敷に往かうとする、恰度今万年橋の處に參つてフト燈火が消れた、百「ア、風に向ふもんだから……」ナンンの燈光は無くつても宜いと薄月夜の事ですからボンヤリ先方が見ゆる、ト海邊大工町の方からバタ／＼と駈けて来た者がある、百「ハ、ア何か追はれて来たナ……次第に依たら助けて遣らう」とお百に於ては其隅の方に御船倉があつたから其倉にベツタリ附着て様子を見て居ると追はれて来たのでも無

い六十ばかりの老爺が子供を抱て萬年橋の上におが
る様子だから「ハテナ老爺が小さい小兒を抱いて萬
年橋の上に……」と云ふ譯だか頻りにコウ拜んで
居る、ハ、ア是れは此の齡をして若い女にでも……
フム戸隠様へ……と云ふ様な譯かしらと考へて居る
うちに橋の欄干に手をかけてアハヤ既に飛込ふとし
たからお百は駆け出して突然後から帯を緊手取つて
百「是れさ何う云ふ了簡か知らないが……」爺「御内
儀さん其處を何卒離して下さりまし、モッ死なうと
まで覺悟をして居りますから生きて居られぬ仔細の
ある事、何卒を御慈悲に御見捨てを……」御慈悲に
殺すやつがあるものか 百「マア何う云ふ覺悟か知ら
ないが、随分殺して上げないものでもない、ソんな
事は何の造作も無いことだがマア一通り妾に話しを
して御聞かせ、妾も用があつて此處を通りかゝつて

お前を助けるのも何か前世は親子か兄弟か、但しは
伯父甥でもあつたのだらう、是が世に云ふ宿世の
縁だから、ナアにお前さん話しの次第に因たら何う
か法をつく様にして上げまい者でもない、手、妾に
話をして御聞かせ 爺「それぢやア内儀さんお話し申
しますが、俺は海大工町の大工の乙右衛門と云ふ者
、俺に一人の娘がございまして長唄の師匠をして居
りましたがそこに船大工の瀧五郎と云ふ者が稽古に
往來して居るうち、若い者同志の常で密會ました揚
句は結局夫婦になり、二人の間に出来ましたのは此
の小兒で、娘は産後が悪くつて死ました、スルト瀧
五郎と云ふ奴が其後に買馴染のおたけと云ふ者を連
れて来て毎日の様に惜し可愛なんて、老人の前をも
憚らず抱づて寝て、それもようございませう年を老
つて居るものは若い者同志が快事をするたつて構ひ

ませんが、此子を育つて呉れる法をして無エから、
老人が此子を毎日のやうに引背負ては諸方から乳を
頂いて漸くに此の孫を育つて居るますが、次第々々
に瘠せ衰へ……迎へ老人の手一ツでは育てることは
なもません、さうく人様の宅に老爺が参れるわけ
でもなし、向ふにも用があり、何れ大家では御座い
ませぬからみんな忙がしがつて居なさるところ、其
處に往つて乳を下さいと云ふ老人の切なさ、迎も助
かりません孫なら寧ろ娘に處に連れ行き冥途で乳を
飲まして貰はふと思ひまして……今日は娘の命日ゆ
ゑ家を飛出して死なうと覺悟しましたのを、お前さ
んに引留められたので御座います、マアさう云ふ
譯で、何うを見のがして、死なねばなりません身の
上「百」それならウ、此の子を何うか斯うかお前の
手で育てずとも、十四五になるまで育て上げ、お前

も亦一個身体になりやア何うか法もつくだらうから
此の子が十五になる迄手足の伸びられる様な法を立
つて上げたら、チー死ぬにも及ぶまい 老人「ハ、ハ、
へ、何うも 百「マア大工の瀧五郎と云ふ人の處に
妾を連れてお出で、お前の爲めにやア馬さん、此
の兒の爲めには親父だ、逢て法を立てるわけやう老
「夫れはさうも有難うございませう 百「ホ、ハ、ハ、可
憐さうにこんな事とは知らぬいでスヤ、寝て居る
、是れが本當の佛心だチー、オヤ欠伸をするから小
便が出るで見ゆるオ、く尿莖が大變大きくなつて
居る」悪事をして其處は婦人、自分の肌にはツタ
リ懐いて出もしない乳を含ませると俄いど見へてビ
シヤ、くしやふる 百「可憐さうにねエ、如此小兒を
抱て老人が死なふと云ふんでは除ッ程の事であらう
と話して來ると 老人「へエお内儀さん此處でござい

ます百「ハ、ア是れが船大工の家かね、シテお前さんは何處から出なすつた 老人「アノ……二階の窓から、ヘエ 百「アノ窓から……マア萬年橋まで行きなすつたんだ子 老人「賊に生命がわりまして、ヘエ、二度と愛へ歸らうとは思ひませなんだ 百「マア命が有つてねエ妾が丁度通りかよつて斯う云ふことになつたのも私の爲めには幾らか功德になります」ドン
 ～～～～御頼み申す、おたのん申します」主人「へー、何誰エ」聞かれると困る 百「開けると知れるから開てお呉んなさい 主人「夜深けに表戸を明けて呉れつたつてお前名を仰しやらねエヒヤア明けられやせん 百「開ければ知れるからおわけつてにねエ、船大工の瀧五郎てエのはお前だらう」傍に寝て居た女房のお竹と云ふのが 竹「瀧さんお明けなねエ、吉田町の、ナニ人面白くもねエ、開て呆れらア……

……毎も妾が居ないと夜鷹なんざア引張り上げやがつて 瀧「又た客氣を燒きやアがつて、モウ止せ」
 と言ひながら立ちあがつてやう／＼戸外の戸を明けると若い美婦人、威姿を帯びた容子は故人秀歌の鬼人お松と云ふ拵へで、ヌーツと這入つて来た 百「お父さん此方エ御這入り、怖い事も恐しい事も無いよ……お前さんかい舟大工の瀧五郎さんと云ふのは 瀧「ハイ 百「お前さんがいお竹さんと云ふのは 竹「ハイ 百「お前さん達義理も何も知らない人と相談するのは馬の唇と口を利くやうなもの、お前さん方に話しをしたつても無駄だ逆も往けない、老父さんお前御苦勞だ子差配さんの所へ往つて起してお出で、ソして御長屋の乗にも往つてお出で、お前がドンブリと投身仕舞へば暇アかいて長屋衆が探さなければならぬんだ、ソレを一寸廻るだけの事だから妾

が詫びてあげるから叩いておいで 老人「芋屋の平兵衛さん何卒鳥渡御起さなすつて下ささい……豆屋の櫛兵衛さん鳥渡どうぞ……建具屋の長太郎さん……油屋の源平さん……魚屋の其五郎さん」何れも叩き起されて建具屋の長太郎はじめ差配の彦右衛門も盛り何れも眼をますり／＼長屋の者一同そろつて来た、家の狭いの七八人這入つて来たから座り場がございませぬ位、建具屋の長太郎、彦右衛門に向ひ長「エ、美しい女だナア／＼丈がヌラリとして居て何とも云へない好い標幟だのう……」皆感して居るけれども悪事をする位だから目が畏れ誰れ何とも言出さなさい 彦「ヘエ私は家主の彦右衛門 長「私は月番の建具屋長太郎でございます 百「時ならぬ夜分に長屋衆や差配さんに御迷惑をかけまして御氣の毒でした、實は今更れ／＼で老人が子供を抱いて死なう

と云ふのを妾が萬年橋の上を通り懸つて取押せて連れて来ましたが、此夫婦に言ふのは無駄だから御長屋の衆に立會で聞いて戴くのですが、言はないでも御存知の筈、是れに居ります瀧五郎さんの女房お竹さんの爲めには義理ある子供、又瀧五郎さんとやらの爲めには大事な子じやアないか、それをば乳を飲して遣らうと思ふ丁筋、無く里ツ子にやつて相當の里扶持を出すと云ふ考へもなく、可愛さうにトボトボして目もろくに見へない様な老人に子供を托けて置いて貫乳をさせる、さう／＼老人だからつて貫乳に行き悪くいと云ふのも道理の譯で、モウ見殺しにするより外に仕方がない、いつそ此の苦勞をするよりか一逆托生、娘の處に往つて逢ひたい十分の乳を飲ませてやりたいと斯う思つて死なうと覺悟をしたのを、實は妾が取押せたんです、差配さん、此處にお

金が三十兩あるから地主様にも話しをし、此金を台にして差配せんも少し氣張りなすつて長屋の衆からも少々づつ出して貰ひ、ソレで此の老人が餉菓子でも買つて生計をして其のあい間に小供をば何うにか育てられるやうな方を立てて遣つて下さるまいか、さうすれば此の子が十四、五になれば何なり手仕事を覚えせまうし老人も安心して科生が出家娘にも遣はれたと云ふもの、何うぞ差配さん、昔の衆、御氣の毒だが此の三十兩に後は宜しく拵へて何卒子供のお過ぎの出来る法を附けて遣つて下さるまいか、妻はマア其の方法を考へたら、思ひます、有難うございませす……家主彦右衛門、建具屋の長太郎、長屋一同御禮を申しします、時に乙右衛門（老人の名）さん、確か今日はお前の娘子の命日だらう、マア御婦人で三十兩と云ふ大金を下さると云ふは

尋常でねエ、お前の娘の引合せで此の子を助けやうと云ふんだらう、オイ瀧五郎さん、此の間から言はふくと思つて屋たがお前の勝手持った女房だから苦情言ふ譯じやアねいが先の女房の四十九日も経たない中に此の内儀さんを引摺り込んで……ソレもよしサ、だからお竹さんだつてお前爲めには義理ある子では無いか、自分で引替負て貰ひ乳でもして見なさい、家業柄にも似合はねエ奇特の人が瀧五郎さんの女房は感心なもんだと云つて世間の人も長家の衆を譽めるだらう、ソレを此の老人に死のふとまで覺悟させると云ふのは何たら……マア此の内儀さん見ず識らずの者へ大枚の三十兩、此の彦右衛門へ手渡しなすつて下さる、是れて長屋の衆に骨を折つて貰ひ俺、差配だ一働さして良禪寺の門前邊りに店を出し何うにかして此の子を養育る様な方法を立て

ませう、オイ瀧五郎さんお竹さん、御禮を云はねエか、誠にごうも申譯もございませぬ難有う御座います、是れから夫婦心を入れ替へまして其の子は何うにか私共が養育てる様に致します、百「差配さん、ぢやア嘘にもア、云ふものだから今迄の事はサラリと捨て、どうか此の子の養育つ方法を立てて遣つて下さいガガ若い者の夫婦だから面体の宜い事を言つても又意見が變ると往けないから御金は差配さんお前さんの手に預けて置くよ、さうでないで折角助け様と思つたのが無になると詰らないから、彦「ソレは仰じやる迄も御座いやせん此のれ金は長屋の者が御預り申して屹度法を立て遣ります、併し此の二人の者もさう心を入れ替へれば下ッでも亦法の立ちますもの誠には有難うございませす、乙右衛門さん此の御恩を忘れさしつちやアなませぬぞ、内儀さん

の御名前を貰いて孫の守り袋に入れおいて將來の長い孫を大層にして始終内儀さんの事を有難がつて居なければなりません、又内儀さんも老人と子供をお助けなすつて皆なが有難いと思つてれば幾干か功德になつつ凶い災難を變じて善い事にならつしやるに違エない、一同御禮を申上ります……時に御内儀さんおなたは河邊で……お名前は……百「ア、妻は傳馬町サ、彦「傳馬町と云へば……頭の内儀さんで百「否エ妻は爲の者の女房ぢやアないヨ、彦「それでは大工の頭梁の内儀さんで、百「イエさうでもないヨ、彦「それなら屋根の頭梁の、百「さうでもない、彦「御居敷の奥さんで、百「妻は居敷者の女房では無いがマア屋敷者の女房と云ふ風俗に拵へてもあるまいが彦「シヤア内儀さん何方でございませすか何うも分りませぬナ、百「妻は手傳馬町の御長屋を借りて従家で

世帯を持つて居るのナ、幸へニ……傳馬町の御屋敷に世帯を持つて在らつしやる……へニ、芋屋の平兵衛さん豆屋の權兵衛さん、お前さん方は彼方らは毎日歩行くから得意もありませんが御屋敷ていのは……平「へニ、お邸はございませんなア……建具屋に箱屋と、此方に来て呉服屋だ……商店は併在並んで居りますがどうも御屋敷ていのは……」百「オヤオヤ平兵衛さんやらも權兵衛さんやらも、アんな大さなお屋敷が眼に這入らないの、練堀で前に三道具を飾つてゐるぢやアないか、アノ御長屋を拜借して居るの、權「アノは御牢内の石出帯刀様、此方は傳馬町の御牢内で……」百「石出帯刀様さ、さうサ、妾はオ女半を借りて其處の支配をして居るの、以前深川に居た時分亭主を殺してチ……」權「ナ、何ンでがすか御亭主殺して、壹名代の亭主殺したア、ドウも恐

れ入りやしたナア、百「さう云ふ悪事をする身だつても子供を抱いて老人が川に飛込ふと云ふのをマサカ橋から突落しは仕ないよ、三十兩の金だつて石塊じやアない、それを恵むのだから因つて此老人が「ア、有難い彼の人の高底で命が助かつた」と一遍の念佛を唱へて下されば、奈落の泉底に往つてから閻魔も苦い顔をせず五の玉を一ツ反て呉れれば、事に依つたら極樂の裏門にでも出られ様かと思つてチ……」實は是れ「の譯柄で相囚人の者を引連れて御月番の石河内守殿の御屋敷へ廻に出やうと云ふ處で……」之を聞て彦右衛門も驚きました、取り分け驚き感じたるは瀧五郎夫婦——美しい標致で、かゝる悪事を働いて居たのだけれども三十兩の金を恵んで此の老人を助ける、見ず知らずの人でさへ其の通り、況して親となり異となる者を今まで酷く取扱つて濟まな

かつたど漸く善心に立歸つたと云ふ、お百は是の陰徳の餘慶に因つて命が助かつた、後にも無い先きにも無かつた一度て女の佐渡に流されると云ふ、是れ悪中の善と申しながら誠に人間界に斯う云ふ善心があゝながら如何なればこう悪事を働くか、俗に言ふ悪に強きものは善にも強しと、お百の佐渡行と云ふお話、鳥渡一息入れまして、

第十二席

エ、申し續けました小さんのお百、回向院の下屋敷に往つて見ると集りました二十四人の囚人は何れ女の事故方引とか湯屋の拘摸とかソんな者ばかりで、繼子殺しとか亭主殺しなどは滅多にはございませんが、お百は亭主殺し女子誘拐で其中での親方、石河内守殿役宅へ罷出ると引續いて大工の音右衛門が奉行所へ馳込んだ、音「私は齋者小さんのお百に助け

られたる者、現に私が助けられたので、何卒お百の處刑を軽く遊ばされるやうにと云ふて居る所に大工の瀧五郎、女房のお竹是れも同じく馳込んで「吾々二人はお百に大恩を受けたる者でございます何卒を吾々二人を處刑に遊ばして、何卒小さんのお百を御助命下さるやうにと云つて居る處に差配の彦右衛門長屋の者ども一大隊を率連て何卒お百の生命を助けて下さるやうにと哀訴に出かけて来た、是れ陰徳の餘慶——御奉行所でも先づ彦五郎が自分で殺したと云ふ事を處刑に就く前に申し立つてある、重言は牢死致したから御上に於ても是は始終の永牢者に致さうと云ふ、死ぬ迄御牢内に留置かると御見込が就いて居たので、さう云ふ所に方々から生命請ひの歎願が有りますからお百は愈々佐渡行と極まつた、女の佐渡行はお百が創始めで本所中村の傳次郎、人

呼んで雷傳次と云ふ兩國の遊びんで七八十人の乾
兒もあつました、次が法印の嚴鉄、法印吉松と云ふ
紳名のある奴、それにお百と此の三人が佐渡行きで
越後國の寺泊から御立立になりす、凡て囚人を差
立まする時に撒と云ふことを致しまして、往來の者
が寄つて喧々と囚人が之に錢を遣りす「撒つしや
い」と云ふと駕籠を留めて錢を撒て遣りす、
寺泊まで往つて寺泊からは佐渡へ海上十九里乗り切
りまするが、なか／＼風が暴く波が高くつて容易に
は乗り切れせん佐渡に往つて碎ける名残りの波、
海上十九里もあるから名残りの波など、云ふはわり
さうもない、處が却て波が強うございますから、奥
州の金華山にせかれて濤が高いやうなもので、隠岐
の國へ參ると出雲よりのさしわらしも稍似て居りま
するが眞直に波を開いて日和の宜しい時を見計らは

ねば渡れせん、増して囚人送りの時など申すも
のは日和の宜しい時を選びます

惚れて居りやとて往かりよか佐渡へ
ささは四十九里波の上

横にも縦にも十里に足らん所の離れ嶋にございます
、東西南北十里に足らん國には狐は居ないとか云ふ
ことを申します、安房には鯉が居ない佐渡には狐が
居ないと傳へて居りすすな／＼何うも日本一の
鯉山の在る所、誰れが之を見出したかと云ふに大久
保石見守と云ふ人です、當時彼の國に金の在るのを
察して御上へ此の由を申上げられたのは大久保石見
守でございます、其の原因は何から見出したか即
ち日蓮上人で、佐渡の塚原山三味堂に居られました
時に
沖中に黄金の花の咲ぬるを

なにとて人の砂土と云ふらむ

其の古へは砂土と書きましたものと見ゆる、此の砂
土に寄せて礫山の島國に在ることを嘆かれて斯くは
詠まれたものに御座いませう、此の歌からして大久
保が鐵錐を入れて探らした所が大變のことで、全國
からでも此れ程の金は無いと云ふ譯に相成りました
、切て相川と云ふ處に佐渡奉行が居ります、其相川
の佐渡奉行の處に參りまして送り状と云ふものを渡
します 役人「なんぢや／＼、送り状を持參致したか
囚人「御意の如く是れに持參任りまして…… 役人
「左様か、随分此の地に在て働きたるに依つて重き
恩賞をも仰付けられるであらうから左様心得る様、
先づ金銀水換人足仰付けるから油断なく働きます
やう」奈体佃島の本家が佐渡で、中々佐渡と云ふ處
は酷い處にございます、そこに送り状を見せて渡し

ましてから三日休息致して相川より歸ります、囚人
が佐渡奉行に渡されまるときは必ず瓢箪責と云ふの
にかけます、鉄線がスガでよりまして最重な細引
でございます、是れで以てギリ／＼胸に巻き付け、
巻いた上で股ぐらの兩足の間へ首を狭んで其の上尙
は金火箸を燒いて肛門へ刺します、ダダ急處の部へ
は皆避けて持つて來ないやうに致し、一日は責め一
日は水換人足に使ふ様に致すのでございます、
此の瓢箪責に掛けまると何んな者でも氣絶を致す
が例ひ、本所馬場の雷傳次と云ふ男は忽ちの間に
口を開いた儘息が絶えてしまふ、直ぐ醫者が來て療
治をする、法印の吉松と云ふ者も同じく氣絶致しま
したが一番末がお百の番でございます、所が前申す
通り皮肉に分け入つて居る者がありますから瓢箪責
に掛けるといへども莞爾々々と笑つて居ります お百

「お上の御威光と云ふ者は有難いものでございます、なんでア、人間として己れの肝門が見られるもんですか、御威光は恐ろしいもの妾は初めて自分の肝門を見ましたよ」と済まして居やアがる役人驚くまいことか「最う一度瓢箪責に掛けてやれ……お百御役人様度々御苦勞様で……」悪まれ口を利きましても女だから助かります、シテ見ると女は一徳です、女は別區畫がしてありまして四季の御仕着せを縫立させます、元と佐渡囚人の御仕着せは越後其他に於いて仕立上げ、後にも先にも女囚人に仕着せを縫せるやうなことはございせん、だがお百が初めて佐渡へ流されましたと云ふはア是等のお験の様なことでございませう、ソレで充分に佐渡に流して見て役に立つならば後からドン／＼女囚人をお流しになら御見込みをお付けなすつたものと見なます

其處にお百は半年居りましたが別に苦しみ思ひもせず針を以て吩咐られた仕事をして居りますと役人が日々廻つて来て怠りを調べますが「役人ア、何時見ても美しい顔だのう」役人助けだからお百の顔を見ては涙ばかり流して叱る所ではございませぬ、いつも其處に腰などを掛けてお百と話してもそのを樂みと致す位、何しろ生れが大坂で江戸の深川で折の熟者まで致し、後には人呼んで姐妃のお百と言はれる位だからナカ／＼如才ない、コロリと向ふが惚れて居るなど思ふから宜しきやうに挨拶をして居ると、役人が悦んで今度は人の眼を盗んでも話して來たり遊びに來たりするやうな譯、それ故お百はもう樂なものでございませぬ、それに引替へ雷傳次本名傳次郎の方は何うもひびい、けれども格別の御慈悲で折々は江戸の話も出來るものと見なしてお百の所

へも話したに参ります、一体傳次郎と云ふは本所金糸堀の御家人中村傳次郎と云ふ武士ですが根か賭博が好きで道樂で遂に賭博師の仲間に入りました、爰に又御牢内には煤囚と申しませぬものございまして「ア、美しい年増だナア、娑婆があつたら己れが夫婦にならう」ア、美しい男だナア娑婆があつたら己れが夫婦にならう」と云ふソレと是れどの言葉を番へます、大阪屋の加長と云ふ者が仔細わつて傳次とお百との間の媒妁を致し置きましたから、今も傳次は折々來ては互に慰め慰められて居りましたが、傳次の方は既に顔の色は眞蒼になつてヒヨロ／＼歩行も出来ませぬ位、迎も長くは生きて居られませぬ様子、此世からなる地獄と云ふは是の佐渡の島でございませう、佐渡では水の湧きます所をシキと申しませぬ青煙のシキ、彌下郎のシキ、其他数々ございませぬ

が先づ青煙に彌下郎と云ふ此二ヶ所のシキは大層なシキでございませぬ、其處から水を汲出します、唯今では石炭坑でも日光の足尾銅山でも皆な空氣が通ひ食物の手當も充分で坑内には燈火が點き更に別世界と云ふやうな装置でございませぬから人足は更らに苦しみもせず往昔とは大違ひ、往昔は闇黒で一里と一里半の間登りつ降りつ降りつ登りつ、榮螺殼の大きなのへ油を注ぎそれをカンテラと云ふものを差込み針金を四個所へ釣つてそれを始終松明にも手燭にも代へて往來に及びませぬ、夏は左程でございませぬが極寒に至ると皆な岩が凍ります、けれども更らに足袋と云ふものは穿かせず跣足で其凍つて居る岩へ蹴附けるから爪をくじいて血潮が出る、これが世に云ふ針の山、之を仕上げて役替を仰付けられる、ヤレ嬉しや幾分か樂が出来るであらうと思ふと金銀を

撰採る、是も極寒の折柄には水の中へ這入つて金屬と泥とを別けますので腰から足へ掛けまして肝臓から血を吹出し宛ながら紅絹のバツチを穿いたやうで見られませぬ、是れが世に言ふ血の池地獄、それを仕上げて役替になる、ヤレ嬉しやと喜ぶと今度は熔鑪と云ふものへ掛ける炭を壊す、其の炭の塵が自然と眼中に這入る、是れがために終ひには眼が見えなくなり我を忘れて已れの手を打敲くから血潮が出る、何分にも痛み激しく致して炭を砕くことが出来ぬでグズ／＼して居ると背後から鉄の棒にてシタ／＼かに打つ、是れ牛頭馬頭の鬼のために打たれる大地獄、それを仕上げてヤレ役替で嬉しやと思ふと今度は高い岩の上にて遙か下のシキの水をば釣瓶で引上げる、朝から暮方まで引上げるのでございまして篝火は焚いて居るやうなものゝ誤つて落ちて死ぬ者

が年分には何十人あるか知れない、又中には苦痛に堪へ兼ね自ら飛込んで死ぬ者もございませぬ、是れが世に言ふ無間地獄、又食事の手當には盛相と云ふものを呉れまするのだがそれが能く届きませぬ、何分にも空腹で進退維に谷まします、是れが世に言ふ餓鬼道の苦しみ、所謂八大地獄が悉く備はつて居る三年三月九十日と譬論にも言ひます、それを濟ませれば御赦になりますので、其三年三月九十日を樂みに皆務めて居りますが先づ百人参りましても九十九人までは位牌で歸りまして生きて歸るのは百人に一人と云ふ程佐渡は難義な所でございませぬ、それから見れば當今の御處刑は實に極樂と言つて然るべし、それは成程色々のことには御用のになりませぬけれども満期放免の時には幾分か彼等の稼いだ金を積置いて御渡しの上、懇々説諭を致し再び来る所ではないぞよ

と親が子供に教ゆるが如くに、次第に依れば夜學もさせて下さる誠に有難いは當今の世の中でございませぬ、さて傳次由松お百に於ては半歳辛抱をして居りましたが丁度四月の中洗でございませぬ、雷傳次がお百の居る御小屋へ参りお百に遇つて話を致す、それは上格別の御目録し 傳次「お百……お百 百さん何だい…… 傳次「何うでも俺ア助からねエ、モウ向後十日と生きては居られねエ、お前ども夫婦の口約束はしたものと沁々話も出来ねエやうなことで、みす／＼死ぬのが知れて居て茲に居るのは馬鹿／＼しいが丁か半か一番……敗つて見ているのだが何うならう 百「傳さん本當かへ、お前に此間から會つて咄したいと思つて居たのだが、妾の所にはいつも役人の来る奴があつてね、其奴を欺騙かして何ぞの用に使用つてやらうと思つて口裏を引いて見るとね、此道は

いけない此道から逃げれば逃げられると云ふことをチャンと妾が聞いて置いたから、お前が来たなら此話を一つ一つ破りの相談に乗つて貰はうと思つて侍つて居たよ 傳「それは何より耳よりだ、道尾能く行けば今一度江戸へ田で柔かい夜具蒲團に包まつて互に樂み娛んで旨い物を食べた其上で立派に御處刑に就くとしやう 百「それは勿論覺悟の上さ、お前が承知なら愈々此處を出ることゝ極めるのだが、それにしても風の強い晩や嵐の晩などはいけないよ、何故つてお前さう云ふ時に限つて廻り番が嚴しいワテだから月の冴へた殊に四月だから役人が眠がつてグ／＼やつて居る最中に忍んで出なければいけないよ、傳さん風のソヨとも吹かない晩を見込んで妾の所まで来てお呉れ、風が強い嵐の時なら破島でもあらうと思つて用心するだらうが、風のない穏かの

時に油断を見済ましてやるのは此方の機會だ、ねエ
 傳さん 傳「さうかなア成程宜いことを聞いた 百」
 それアね傳さん色仕掛けにして聞くんだから譯アな
 いさ、戀着た積りか何かでベラ〜饒舌るもんだか
 ら、スツカリ聞いて置いたのさ、斯ふ行けば山道に
 なりア、這入れれば港に出ると云ふことも聞いて置い
 たんだから安心してお出で……」と吹っ掛けられた
 から極々月のさへたる晩を計つて出て來ましたのは
 雷 傳次郎お百は斯う残らず役人が寢て居る側に來
 てズツと寢息を伺うて見ると放題もなく夢中で居
 ります、是れ幸ひと自分の着て居る柿衣の御仕着
 と云つて能く酒屋の小原が着て居ります、ア、云
 ふ色が佐渡の御仕着で緒いのが佃嶋でございます、
 佐渡のは柿衣の少し赤味のある土色のしわ襦袢ない同
 じ色の手拭を支給て置きます。愈々叶はずば一思ひ

に直ぐ處刑に就く身体、グズ〜して寧つそ切れる
 刀でやつて貰つた方が世話はないけれども生命は惜
 しいものと見えて可成は今一度江戸に出て殊に依つ
 たら自首をして骨ヶ原なり鈴ヶ森に於てなり切削竹
 を受けるの覺悟、それにしても出るまでの身を守る
 物がなければなりませんから青竹を斬削いで之を腰
 に差しまして、傳次郎とお百に於ては夜番の熟睡す
 るを見済ましてズツと抜出でました、ア、金
 山口と云ふのがあります、是は鳴子の金山口と云ふ
 位に評判の所で、何處へ行くにも此道を通らなけれ
 ばならず、又通らうとするには夜になると一杯は鳴
 子が引いてあつて、一寸觸つてもガラ〜〜〜
 ツと音が致し、此音を合圖に役人が役所より飛出す
 と云ふことになつて居ります 傳「お百……鳴子が引
 張つてあるんでどうも仕様がな、一寸手を觸れて

もカラ〜〜〜音がすれば役人が飛起きて仕舞
 ぶ、ア、……江戸に行つてモウ一遍旨い物を食つて
 處刑に就きていと思つたに…… 百「傳さん、ナアに
 逃げられるやうにして往けば譯アないよ、決して氣
 遣ひおしでない、マア此方にお出で 傳「往つてどう
 する 百「妾も子人も随分殺しかれども、斯うやつ
 て寢て居る所を息を止めるのも不憫さうだが是も鳴
 子のためなら仕方がない、未だ見廻りの者は刻限に
 ならぬと見えて……オ、番人の居る家は確かに此家
 さ、是からやつて除けるんだよ」とズツと後ろに
 廻つて見るとグウ〜〜〜と大扉——雨戸をさう
 つと抜き取つて切削竹を引延ばしスツと寐て居る
 奴の上へ股がつて口を開いて寢て居る其口の中に竹
 槍をブツツリ、酷い殺しやうもあるもので、口の中
 に竹槍をブツツリ押込まれちや堪りませぬ、グー

ともス〜とも言はずビタリ息の根が止まつて仕舞ひ
 ました、斯うしなければ着物を剝いで行くことは出
 來ませぬ、血の着かぬやうに着て居た仕着を着更へ
 、傳次は役人の刀の腰に打込んで 傳「サアお百……
 是から鳴子の綱を切る番だ 百「傳さんお前お待ちよ
 、ひつ返して次第に依つたら飯を焚いて兵糧を持つ
 て逃げやうと思ふから……」傳次は呆れて仕舞つた
 傳「好い度胸だ、已れは遠くお前に及ばねエ、成程
 何處に行くにも兵糧がなくなつちやア飛出せねエ、厨
 に行つて飯櫃の蓋を取つて見ますと飯が十分炊いて
 ありますから其飯を手拭に包んで結んで居る間も
 ございませぬ、側にあつた役人の手拭を取つて男の
 やうに頬被りを致し、是より其番所を破つて逃げま
 したがサア是からは生命が助かりたいが一心だから
 、山道を一散走り、稍々三里も來ると漸く又平の道

に出ましたからホツと息をつき、傳「百や……此れア何處だらう」「是れかい、是れア確か丁度相川の後ろに當る觀音崎とか何岬とか云ふ所だらう何でも竹嶋とか云ふ所があるさうだが、其處へさへ出ればモウ能登の七尾まで行つたも同然だが、遣り損へは重き御刑罪、どうせ覺悟の上だからさうなつた日にヤア一所に荒海の中へ手に手を取つて死なうぢやアないか」「傳「さうよ何にしても此處まで来れば一安心、今となつて見りヤア已ア腹が減つてモウ歩くことも出来ぬエ、モウ百や早く手拭の飯を開いて已を助けろ」「奇麗も汚ないもございませぬ、モウ斯うなれば左様なことを言つて居られませぬから小川の流れを汲取つて手拭の中の飯をモン／＼食べるが甘露の味と云ふのは是れでございます、月の明りに今傳次とお百が飯を食つて居る其頭の上で「ウオー／＼ッ」と

佐渡は狼の澤山居る所、傳次お百諸共に驚きまし
たがお百は片邊に板木の在つた是れに手を掛けると
見る間に身体は宛から飛鳥の如く、殊にお百の身体
の中には這入つて居る怪物がございますから宜しい
が、傳次郎はマゴ付いてウロ／＼して居る中に忽ち
狼が飛來つて腰の邊をグワ／＼と噛付きますと
、後ろから又連れの狼が三四匹出て来て手やら足
やらモウ滅茶々に食つて仕舞ひました、之を板の
上からお百が見て居りまするとトウ／＼今まで話を
して居た傳次郎は五匹の狼のために食はれて仕舞
つた、月光明に透して見ると今が今まで側に居た人
の首は首、手は手、足は足と食はれて居るのでござ
いますから見て居るお百の心も容易でございませぬ
、食つて仕舞つたが、狼はまだ物足りんと見えて板
の下を立去りませぬ、月光明に能く／＼之を見ると

日頃は瘦せて居るが毛がムツと立つからナカ／＼瘦
せたものではございませぬ、兩眼は鏡を並べたる如
く猛獸の中でも取分け恐ろしいもので深紅の舌は焰
を吐くかと怪しまる、ばかり。其中にお百は只ブル
／＼顔へながら耳を聳て、聞くと「ウラー、ウラーッ
」と貝の音が立ちます、是はモウ役人が金山口の
御番所を抜けた罪人がありますと直ぐに貝を鳴ら
します、貝が鳴ると村々に於ては破牢があると云ふ
ので一人／＼通る者は詮議をし、厳しく其筋の掛り
の調べもあり、貝を聞くと港々でも見張りが直ぐに
廻つて仕舞ひますから、斯うなつてはモウ逃げるも
引くも出来ませぬ、百「ア、是まで折角逃げて来て傳
次郎さんは狼、妾は御上の手にかゝることか」と
嘆いて居る間もございませぬモウチラ／＼と焚松の
光りが見ゆる、狼に於ても亦焚松の光りが夥多しい

から段々其場を逃去つて仕舞ひましたが、役人の提
灯の光りは段々板の方に近づいて参ります、サ、一
つ適へば又一つ、百「最早適はん、所詮いけなひ」と
は思つたがさう云ふ所には自然と智恵の付くもので
、此智恵の走るのは生れつきの故か海坊主の祟り
か、板の上から着て居た自分の着物を彼方此方食ひ
裂いてグル／＼と固め頭髪を引抜き血の附いて居る
のを其儘ボンと下に投下し、自分は樹の梢の最頂
の繁みの所へ登つて小さくなつて隠れて居る、下に
穿物でもあれば板の上へ登つたなど云ふ考ひもある
が跳足で逃げて来たから穿物はない、極寒の時に
は佐渡は跳足どころではございませぬ、足袋を三重
に穿きましても容易に歩けぬが時しも四月の下洗で
先づ温かいに依つて此處まで逃がれました、相川の
役人は之を見て「甲「同役、傳次は狼のために食殺

され首だけ此處にあるが、是は食掛けた所へ我々が
 具を吹き、松明を振つて来たので、狼奴定めしお百
 の方は肉が柔かに依つて船の間へ引いて行つて食
 つたものと見える。乙左様、モウ斯うなるからは奉
 行に届ければ宜し」と云ふので腰に下げて居た太
 鼓をドーンドーンと打つと方々で一時にドン／＼ド
 ン／＼と身延の御開帳の御着みたいにイヤ鼓くは鼓
 くは八方十方で鼓きだし、傳次お百は狼に食はれ
 たど高らかに呼はり呼はり一同引上げて仕舞ひまし
 た、お百は樹の上にてホツと云ふ息を吐き「ア、有
 難い、コリヤア平だん信心をする神佛の助けだ」宜
 しい了簡だ、何んで斯様な奴を助ける神佛があるもの
 ですか、さう云ふ了簡だから悪事を働くのでござい
 ます。

第十三席

人間生命が助かりたいと云ふ一心になるとモウ怖い
 ことも恐ろしいこともございませぬ、夜が明けまし
 たることゆゑお百は唯通れたい通れたいと云ふ一心
 に赤裸體で海岸通をスタ／＼スタ／＼やつて参る
 、スルとカチャリツ、カチャリツと云ふ鈍の音がし
 ます、お百はハテナ何んで彼様なカチャリツと云ふ
 音がするか知らと伸上つて見る、是れは能登崎と云
 ふ所から竹を取りに来て居る竹取の勘作と云ふ老爺
 で、貝の音を聞いて扱ては佐渡破りがあるなど一時は
 自分の船へ来て固めて居つたが太鼓の音を聞いてモ
 う佐渡破りも召捕られたなど思ふゆゑ元の所へ来て
 頻りに竹を伐つて居ります、彼の竹嶋と云ふ所は一
 面の竹藪で僅かな御連上で能登の七尾、能登嶋、彼
 の邊の人が船で渡りまして其竹を取つて竹細工を致
 します、能く七尾の竹細工は廉いと云ふ、皆な彼地

へ登つた御方は御求めになりませんが是れは總て佐渡
 竹でございまして佐渡の竹と云ふものは大層性が宜
 いさうでございませぬ、竹取老爺の勘作と云ふ者が頻
 りに斯う竹を伐つて居ると、お百は考へた、待てよ
 所が所だに依つて助けて呉れうと云つても容易に助
 けては呉れまい、佐渡の罪人を萬々が一助けたとき
 には同罪になるから誰か助け人はないで、是りア彼
 の老爺が竹を伐つて居る間に彼處に船が繋いである
 から彼の船へ潜込んで遙か沖へ乗出した時に何とで
 も欺き、罷り間違へば女の徳だから色仕掛にしてよ
 も生命を助けられたいのだ、さうなさうなと考へ
 込み其隙いである竹船の底へ這入つて隠れて居りま
 す、竹取老爺の勘作はさう云ふことは更に知りませ
 ぬから十分竹を伐つて積込みましたゆゑ繋綱を拂つ
 て櫓柄に手を掛け、漫々渺々たる青海原を慣れて居

るとは言ひながら左ばかりの高浪をば更に恐るゝ景
 色もなく、面舵、取舵と腕一杯にドブリー、ドブ
 リと云ふ所を乗切りまして沖合へ一里半程も出た時
 にお百が時間を測り「モシエ」と聲を掛けた、驚さま
 したのは勘作老爺「ハテナ竹が口を利いたのか知ら、
 それとも櫓脚が鳴つたのか知ら、モシエと聞へたが
 ハテナ」船底に女が隠れて居やうとは知りませぬか
 ら、又もや酒出す櫓拍子に「モシエ」と聞へた、ハテ
 な、何が己らが船に居るだ、ア、竹取物語と云ふ本
 の中に赫夜姫と云ふ人が竹の中から出たと云ふこと
 があるさうだが、是りア面白い、竹の中から女が飛
 出すのか知ら、何處であらうと思ふ途端に揚板を左
 右に拂つて下から出たのを見ると色白く、鼻筋通り
 口元尋常にして眼中涼やかで頭髪こそザンバラにな
 つて居るが實に美しい女だから勘作老爺は櫓柄を放し

勘「ヤアハアお前様何だね 百「アノ私は加賀國大聖
寺在觀音寺村と云ふ所の百姓久兵衛の娘でございま
す、幼少の時伯母が御屋敷に御奉公をして居ります
ゆゑ、行儀見習のため伯母の所へ参りましたが流行
病で兩親が大病との報告に急いで取つて返した所が
トウ〜兩親は没くなりまして法事の済んだ所へ歸
りました、それで私は一人で佛參に参つた歸り掛け
、田舎道のことゆゑ歸り掛け山の中より大男が現は
れ出でトウ〜其者に捕へられ船中へ連込まれまし
て恥かしいことだが私は弄姿されたまでは覺えて居
りましたがそれから先きは夢現、浪の音に氣がつい
て見れば斯は如何に裸体にされて右も左も青海原、
それ故其處に繋いだ船があるから是れて這入つて居
たら何時しか生命を助からうと唯それのみ考へて
貴所の御船へ這入つて隠れて居りました、ドウぞ生

命を助けて下さいませ」と兩手を合せて拜む故竹取
老爺の勘作も此奴が人を殺して佐渡破りをした大毒
婦とは知らぬで 勘「ヤレ〜まア可憐想に已れば此
先きの能登島と云ふ所の竹取老爺、年分に竹を取つ
て細工物を拵へて加州金澤の御城下だの今お前様の
言はした大聖寺、越中富山能登の七尾、それから放
生津滑川、彼の近邊へ持つて往つて商賣をするがヤ
レ〜可憐想に、それぢやアまア今夜は私等が家へ
泊つて二三日の内には已ら加賀の城下まで商賣に
行くに依つてお前様を連れへ……さうさアノ觀音寺
村と云ふのは大聖寺の御城下から左へ取つてアレで
も小半里あらずな、それでもまア連れて行つて進せ
べい 百「有難うございませす 勘「何にしても裸体ぢや
ア手におねねエ、已らが半纏を貸してやるべし丁度
此處に辨當の殘餘があるから食はつせよ」とそこは

婦人の徳下勘作老爺は縋半纏を着せ辨當の残り
食はせ、マル〜の梅干なら宜いが半分食ひ掛け
た酷い辨當、けれども斯うなると旨いも不味いもござ
いませぬ、臆て勘作は已れの家を志して参ります
ると 百「モシ〜貴方お幾歳でございませす 勘「已ら
か子、已らア五十一だ 百「アノおかみさんは……勘
「エ、……婆はの三年前に死んで仕舞つて六歳にな
る峯松と云ふ男の子が一人あるが此峯松が留守居を
して居ますワ 百「へ〜……デハ私も斯うやつて身体
を穢されて今更故郷の觀音寺へ歸るのも面目がござ
いませぬ、何と私をお前さんの家へ泊めて置いて留
守の時用を違さしては下さいませぬか、言はゞ貴方
は私のためには生命の親、其六歳になる小供衆を育
つて上げれば死んだ佛にも私の志が届きますゆゑ
お嫌でもあらうが勘作様とやら、妾を女房にしては

下さいませぬか」勘作は驚いた、斯様なまア人形か
天人が天降つたやうな美しい女房を抱いて寝れば直
ぐに生命が縮まつても思ひ遣すことはない、と何く
も同じ男女の情 勘「さうかいナ、うれぢやアまア美
味い物も食はず汚ない着物ばつかり着せても宜けり
やア私等が女房にする私も子供を一人置いて竹を取
りに行つたり竹細工を賣りに行くにも心が落付かね
エ、どうだナ物は極まりが付かなけりやアいかねエ
から此船の中で固めをしやう、早い宜い 百「戲談
言つちやアいけな船の中でそんなことをすれば船
玉様の厨が當ら、お前さんの女房と極まりやアモウ
是から緩くり妾は借白髪まで添添ける積り……勘「是
りア有難い私等がやうな老爺と嘘にも借白髪まで添
添けるたア、どうかまア夢なら覺めるが宜い」と老
爺ニコ〜顔でやつて来る。

湖作は我家へ歸つて来て戸口をがらり開けると、竹屑の中に寝て居た六才になる峯松と云ふ男の子が「父親さん歸つたかい。勘、オ、峯松、今歸つたアノ死んだ母親を佐渡の竹嶋から連れて来たよ。峯、美しい女になつたなア、先の母親は眇眼で跛足だ……」勘「宜いから寝て仕舞へ。峯、ヤア助倍老爺め……」勘「此野郎、何處から其様なことを聞いて来た」是から勘作にお百は引裂き鶴に二合半酒、チョツと夫婦の固めを致し、勘「サア寝ないどうも何だか事が極まらねエから早く寝たが宜かつべい。百「お前さう床急ぎをするなら先にお寝みな、女禁に花が咲き男嫁に蛆が生くと云ふ譬喩の通も久しいことおかみさんが無いものだからア臺所廻りから此近邊の汚ないこと……」扱てお前の女房になる以上は見ても置けない、此處らを奇麗に掃除して緩くり寝るよ、れ前さん其

中一人で寝て居て下さい」此處はチョツとお百が可哀想な所で濡れぬ先こそ露をも厭へ、悪事に悪事を働いたやうなもの、今になつてはア、悪事に悪事を重ねたお蔭に斯かる難行苦行をなすかと頻りに後悔、此の穢ない老爺をば二年でも三年でも亭主と言つて機嫌を取り、末はクリ／＼坊主になつて生涯終りを取らうと云ふ了簡になつたから奇麗に其處、此處よと掃除を致しまして、百「サア勘作さん、緩くり寝ませうよ」と言ひながら佛様の御燈明を消さうとした、總て越中から佐渡、加賀、能登へ参りますと大層御門徒が多うございます、それは開祖親總上人が彼の邊をグル／＼御巡り遊ばしたので大層一向宗門が流行ります、それ故オオムキ様オオムキ様と申してどんな穢ない百姓家でもナカ／＼佛壇は奇麗にしてあります、それが其國の風俗で佛壇に金を掛ける

のは何とも思ひませぬ、それでアノ邊では決して御燈明を口では消しませぬ、お百は口で消さうとしたが氣が附いて斯う手で一つはツと横に拂ふ途端に一番上にあつた位牌が落ちて来て蓮華臺がお百の眉間へカツチリ當つたかと思ふと、ダラ／＼と血が出た、ハット手の掌で眉間の血潮を押へながら落ちた位牌を取上げて見ると「秋山秋月大姉、裏を返へして見ると「攝州大坂川口桑名屋徳兵衛妻高、行年二十七歳」と云ふ位牌、百「勘作さん、勘「何だな……どうだい斯う夫婦と極つたら早く寝ちやアけねエかな、どうも事が極らねエと云ふと話しても面白くねへだてな、百「イ、エ、此位牌の話をしわけりやア私は一緒に寝ないよ、勘「そりやア大變だ、話は庚申さんの夜にすべしと思つたが、お前様がさう云ふなら位牌の話をして聞かせるが能く聞くが宜い、他では無い

がノ已らか弟野郎の佐吉と云ふ者は病身であつたが、誠に正直者で小さい時から奉公に行つたのが大坂川口の桑名屋と云ふ廻船問屋、そりやア度々私等が所へ手紙で音信もしたか十年越飯炊きをして居た、幾らかづゝ給金を旦那の所に預けて置いて愈々其貯金を持つて國へ歸らうと悦んで居ると此の位牌ちうものは桑名屋の本妻の御高様と云つて誠に結構な、縁致が美しくつて情け深い、御實家は泉州堺の河内屋さんと云つて是も大層な廻船問屋だつたが海嘯の爲に一夜の中に一家一門死絶へて桑名屋へ入嫁いだ此御方だけが助かつた、そこは宜かつたけれど大坂雜魚場の魚賣に新助ちう者の妹百と云ふ女が小間使に住込んで此女が滅法縁致が美しいもんだから主人と好い交情になりやがつて本妻のお高さんと私等が弟の佐吉野郎と密通をしたと言つて笑の降る

中をば裸体にして追出しやがつた、そこで弟野郎は他家へ奉公に住込み其給金を前借して衣服と帯を拵へたさうだが、其主人は鹿島屋と云ふ酒屋で、是はナカ／＼感心の人さ、佐吉から詳しい話を聞いて其御主人が別に金子を呉れた其金子でお高様の着物や帯を拵へてやり自分の給金の半分を御小遣になさいと云つて弟野郎が此位牌の主婦さんに上げたと云ふナカ／＼已らが弟が見上げた者さ、それに引換へてお百と云ふ女は太恩を受けた主婦さんを無賃の罪に陥れ那之突の降る中を裸体にして追出すなんてア犬猫に等しい世の中にも酷い女があれはあつた、弟野郎が大阪から歸つて来た時に此位牌を持つて来た、それで弟が兄さんや此位牌だけは毎日々々回向をして上げて下さいと呉れ／＼も言はれた、今日は丁度お高さんの命日、世に恐ろしいのはお百と云

ふ女だか何處にどうして居るかのウ……」と現在自分竹嶋から連込んだる女が嶋破りのお百とも知らぬは道理、お百は之を聞いて「ア、扱ては心にもない悪事をして流れ／＼して佐渡國竹嶋まで脱出て、能登嶋」来た以上は煙の上で往生が出来ると心を悔めた此のお百だがどうしても斯う云ふ一念のために引廻され、生かさず殺さず苦しめて其上生命を取られる此の身……エ、どうなるものか此様な髻白髪のお爺を抱いて寝やうより毒を食やア皿まで此處を一番立退いて仕舞つて仕てい三味なことをして處刑に就て方が餘程宜い」とがそりと氣が變つた、されば源三位兵庫頼政の歌に

いく度か思ひ定めて變るらむ

頼むまじきは心なりけり

此方は勘作、話をして居る中に空の疲れと二合半酒

の酔が来てゴロリ横に寝たまゝ前後も知らず白河夜船、稼業柄とは言いながら橋拍子のやうなる齒切囃んで頻りにグウグツと睡りました、行燈の燈火を揺立つてお百はつく／＼と勘作の顔を見ながら世の中は掛ッ顔と云ふやつはあつたが面ッ掛とは此奴だ鹿馬長い顔をして紋羽の足袋で溝へ陥落たやうな臭い口を開いて居る醜体はないナ、此様な汚ない老爺をば如何に此身が大事なればとて抱いて寝やうとまで覺悟をしたのはア、人間の丁簡と云ふものは種々になるものだ、此儘此家を飛出せば竹嶋から斯う云ふ女を連れて来て一晩足を止めたと言はれ、それからそれへ村々津々浦々と七十五箇所の割印者、人相書を廻はされば五尺の身体が置き所がない、エ、行き掛けの駄賃だ、立つ鳥跡を濁すなど云ふことがある、氣の毒だが殺して往かにやアならないと覺悟

をして、残りの濁醪を飲み充分食事をした上に勘作老爺さんの寝て居る枕の間へ有合せの少倉の紐を通し、咽喉の上で結び玉を拵へて力一杯にズーンと締め附けたから忽ちの間七轉八倒の苦悶到頭勘作老爺は溢り殺された、六歳になる峯松小僧は竹嶋の中に寝て居りましたが「ア、ア、親母が父を殺したア」と駈出さうとする所を「此小僧め」と言ひながら傍へにある煙草盆を取つて投げ付けたから頭に當り、ヨロ／＼と踏跟けて座爐の中の轉げ落ちニヨツキリ二本足が突立つて頭と身体は灰の中へツブリ這入つた、そこで今飯を食ふ時沸かした茶を酌でも殺すやうに打掛け、先妻の衣類から帯からスツカリ何一つ残らず引撥い、ニツコリ笑つて手拭を姐さん冠りにして小袂涼々しく取上げ行かうとしたが待てよ、此儘にして往きやア損尾が附く、斯うして

行かうと竹屑を掻集め汚ない障子襖をば其上へ重ねて火を付け、其儘其處を立出でました、道の程五六町も来たかと思ふ頃「火事だ！火事だ！」と呼はるお百は大驚火を焚いた積りでそれを知るべに何處ともなし立去りたが、實に恐るべき大毒婦、是より致して能登の七尾の港から越後路へ乗込むの講談

第十四席

さて讀横きました姐妃のお百、能登の七尾在に於て竹取阿瑠の勲作を殺し、からりと服装を拵へまして田舎娘と云ふごく野暮な服装を致しまして、手拭を姐さん被りにして乗込んで参りましたが、越中國地蔵峠と云ふ處、大きな石の地蔵が肩から胸の邊りへ赤い鏡が付いて居りまして、毎晩々々化けて出て往來の者を嚇す、或旅飛脚の爲に斬られたと云ふ斬られ地蔵、化地蔵など云つて著名のその淋しい所、

怪物が出やうが狐が出やうが其様なことに驚きまするお百ではない、スタ／＼スタ／＼峠へ掛つて来るスルと後ろから「オーイ姐さんや……オーイ待ちなせい姐さん」と呼びながらドン／＼走つて来る者があゝ、見ると年の頃は四十恰好、デツプリと肥つて居ります赤色の品格の大分宜い人物、大津脚絆に布袴の草袍、些少の荷物を背負ひまして道中刀を腰へ打込んで、菅の三度笠を提げて汗をかいで飛んで来たのは旅に馴れた商人体の人物、お百「ハイ何でございませうか 商人「姐さんや大層早い足だの お百「ハイ、何ぞか淋しい所でございませうから一生懸命急いで参りました 商人「さうか、此處はノ、地蔵峠、餘り好い處ぢやアねいが、お前のやうな美しい姐さんが一人を以てノコ／＼此様な處を歩くのは不用心極まつたことで、旅は道連れと云ふことがあるから

私が一緒に行かうと思つて後からマア一生懸命走つて来たが、何う云ふ用で何處へ行なさるか知らねいが、姐さんや年の若いお前達が此様な淋しい處を一人歩きをなさるものぢやアねい、一体お前何處へ行くだい お百「ハイ、私はこの何でございませうよ、越後の新潟と云ふ處へ参りますんでございませう、商人「新潟へ……何いつはマア丁度好い、私はノ新潟の若で糸賣出しの又兵衛ツてんだ、袖ふり合ふも他生の縁、姐さんや一緒に新潟まで往かうぢやアねい お百「ハイ、お連れ様がございませうれば妾も大きに氣丈夫でございませうから、左様ならどうかお連れなすつて下さいませし 又兵衛「姉さんや此様なに馴々しく口を利いて何だか厭な奴だ胡麻の蠅ぢアないか 人攫ひぢやアねいかとお前に又心配をさせると可ねいから念のためマア御話をするが、手を出して見な

手を出して……方公の腰の所の胴巻に……遠慮はねエからマア探つて見ねエ……ホーラ蛇が蛙を呑んだやうな固塊がある、其塊が百兩だ、こつちの方に一塊あり、此が百兩、此方の方にも固塊があるだらう斯うやつて俺アの三百兩の金を肌へ着けて居る、決して怪しい者ぢやアねエ新潟の糸賣出しの又兵衛、是からマア國へ歸らうツてんだ、丁度好い伴侶に依つてマア安心をして行きなされるが宜い お百「ハイ左様でございませうか有難う存じます、何分宜しく御頼み申します 又兵衛「乃で姐さんや、是からマア御食泊りの宿費萬々そこは又兵衛が心得て置くとして其代り乃公の方ではかり心得ても困るから阿姉やお前の方でも宜いかい、チャーンと心得て貰ひていもんだが合天かい お百「御戯談を仰しやいませし、妾のやうな田舎者がどうなるもんぢやアとございませぬ 又

兵「どうして、田舎者どころぢやアねエ、オア
 何でも構はぬいから魚心に水心、兎角世の中は話の
 解りの早へのが宜いんだ、姉さん其處ンところは頼
 んだよ」と一人で承知をして又兵衛が先さへ立つて
 参りました、と一軒の立場がございます 又兵「姉さ
 んや 下婢入來つしやいまし 又兵「お酒どノ御飯だ
 、一緒に持つて來て呉んな、少し急ぐから手廻しを
 してノ……姉さんやお前、お酒を飲むかい お百「ハイ
 、少しは頂けます 又兵「それは豪的だ、全ツ的酒
 を飲まないのはどうも愛想がなくて可ねへ、少し飲
 むる方が宜いや……サア、飲みな お百「有難うご
 ざいます 又兵「一つ酌をしてお呉れ お百「ハイ、
 妾しのやうな者かお酌をしても美味くはございます
 まい 又兵「其様なことは言つこなし、和女のお酌な
 ら豪的だオット、ハ、有難い、ぢやアオア姉さん

戴くよ」又兵衛が悦んで頻りに酒を飲つて居ると、
 店の方からズカ、這入つて來た毬栗髪、色の眞黒
 な眼が眞鍮色にピカッと光つた大きな奴「お客さん
 新潟へ出船があるんだが如何でがすへ、船賃は安く
 御負け申すが乗んなさらいかい、今直ぐ船を出さ
 うつてんだが何うだねお客 又兵「姐さんや、お前船
 は嫌ひかい お百「イ、エ嫌ひでもございませぬ 又兵
 「嫌ひでなけりやアどうだい是から新潟まで歩いて
 行つた日にやア大變だ、丁度出船があると云ふから
 是から船へ乗つて一眠りやらかす中に船が新潟へ着
 く、こいつはどうも恰度好いから乗らうか姉さん
 百「何分どうか宜しくお願ひ申します 又兵「それぢ
 やアオイ船頭さん直ぐ出帆するのかい 船頭「追風だ
 から直ぐ船を出すので、乗んなさるかい 又兵「ぢや
 アマア二人乗るから何分どうか頼むせ……姉さんや

お着を少し持つて來て呉んな、船へ乗つて船で又一
 杯飲らうと斯う云ふ考なんだ、宜いか「コレ」
 の物を持つて來いと誂物をして勘定を拂ひ之を握
 げて此店を出て船へ乗込みます、乗合の者は
 彼是れ六七人もございますが何れも色の眞黒な眼の
 ビカリと光つた海雀、どうも恐ろしい怖い顔をして
 居る、帆を十分に引上げまして錨を上げる、忽ち此
 船は新潟港を指し海上を走つて参ります お百「大層
 マア好い景色でございますが前面の方に見えますの
 はアレは何處で 又兵「アレは佐渡の國だ お百「佐渡
 と申しますると 又兵「佐渡と云ふ所はその盗賊やら
 悪いことをした奴が流される、そりやアもう恐ろし
 い所なんだ、此世からある地獄ツてんだ お百「オヤ
 くマア恐ろしい所が世の中にあつたものでござい
 ます」嘘ばづかり言つて、已が破つて來た佐渡の國

を白々しく聞いて居る、所へ毬栗天窓の奴めニコリ
 笑ひながらお百の前へ佇立つて「オウ阿姉、一
 杯飲みてエからマア酌をして呉んねエ、お前の酌な
 ら定めし酒が美味く飲めるだらうの……阿姉妹
 ぢやアいかねエせ、此船はノ、新潟への便船だとい
 つてお前を到頭マア船の中へ引張り込んだが、何を
 隠さう俺ア坂田の龜八坊主ツてエ者で、此ア海賊船
 だ、彼處に居るのは滑川の銀藏、此方に居るのが館
 山無宿の三吉、アレが長門の熊十ツてんだ、お前を
 地蔵峠から引張つて來たのは赤岩重助、ノウツ皆んな
 肩書をついた悪黨だ、今夜はマア何だ、赤岩の阿兄
 が妃を抱いて寝る、明の晩は抽籤で此の坂田の龜八
 だ、見た所が此様なにマア鬚顔で毬栗のやうな頭に
 なつて居るからナ、怖らしい坊主と驚いたが知らね
 エが明日はスツカリ月代を剃つて美麗に化粧をして

御目に懸けるから、阿姉をア露然一つ可愛がやつて、
 吳んねエ、嘴めば嘴む程味の出る鯛坊主ツてエなア
 乃公のことなんだ、驚いちゃア可ねエせ姉さん お百
 「ホ、ホ、何でございませとエ、大層ア補らし
 いお前さん方は何ですエ 龜八「ナニーツ お百「お前
 さん方は何でございませすよ 龜八「海賊よ お百「海賊
 と云ふのは何で 龜八「分らねエ女やぢアねエか海の盜
 賊を海賊と云つて陸の盜賊を山賊と云ふんだ お百「
 盜賊と云ふのは何で 龜八「始末の悪い女ぢやアねエか
 、盜賊と云ふなア他人の物を只取るのが盜賊だ、人
 を殺したも他人の物を只取るのが悪黨と斯う云ふん
 だ、四の五の吐かしやア仕方がねエ、汝を散々輪姦
 んだ上に此荒海へ抛込んで仕舞ふぞ、エッ船へ乗つ
 たが最後幾ら嘸いだつて逃れつこはねエんだ、諸と
 言つて今夜から交替に抱かれて寝るが宜いや、ノー

阿姉 お百「フ、ン、人を馬鹿にして何だど、惡
 黨だの海賊だの山賊だのと大概にしやアがれ、汝等
 は何處へ眼球を着けて居るんだ人を見損なつて、名
 乗つて聞かせるから耳の穴を搔掘つて能つく開け、
 此様な山家娘の風をして田舎言葉を使つて、薄鈍な
 振をして居るから手前達は何と思つたか知らねエが
 、生れたのは大阪の雜魚場で、江戸へ來て深川の櫓
 下で美濃屋の小さんと云つて藝者になり、碓氷の十
 萬坪で以前の亭主の桑名屋徳兵衛と云ふ者を、吾妻
 下駒で兩方の眼を叩き潰し、どうく掘の中へ踏込
 んで踏殺して仕舞つた大阪無宿のお百と云ふのは妾
 のことだよ、世間に亭主を踏付けにする者はあるが
 、踏殺したのは妾ばかり、そればかりでなく二度目
 の亭主と云ふのは甲府御勤番巨勢能登守の御半屋敷
 を打破つて逐電した殺人犯の十三人もある荒川無宿

の彦五郎と云ふ悪當さ、どうく亭主殺しの一件か
 露顯をして備馬町の御半内へ擧がれたのが、出火立
 戻り一格下げの佐渡行き、今まで例のねへ女で佐渡
 へ流されたのは懼りながら此のお百ばかりだ、それ
 も雷傳次と云ふ奴をアシにして佐渡の嶋を破つて能
 登の國は七尾の在、竹取老爺の勘作と云ふ者を騙詐
 かして堅氣にならうと思つたが、少し其處に氣の濟
 まねへ所があつて勘作老爺に小兒の峯松を踏殺し、
 加之に家に火を放け梵天國、是から見込があるに依
 つて出羽の酒田へ乗込まうと云ふ途中、地蔵峠で出
 會したのが赤岩だとか重助だとか云ふ薄鈍な奴、こ
 いつは好い奴に出會はした、幸だから酒田まで供を
 させやうと斯う思つて、汝等の言ふ通りハイ一言
 つて此船で來たんだ、普通の女だと思つて何をボ
 ン／＼洒落臭い辭を吐くんだ、惡黨だの木刀だのと

チヤンチャ笑可くつてお隣で茶を沸さア、汝等が言
 ふまではねエ氣に入つたら抱いて寝る、朝になつて
 大陽様が黄く見へるなんて吐かねエやうに氣を付け
 ろ、サア出羽の酒田へ乗込んで一儲け儲け仕事があ
 るんだが、姐御と云ひ親分と言やア宜し、四の五の
 吐きやア其儘には拾置かねエから覺悟をしろ」とボ
 ンと着物の裾を捲つてドツカリ其處へ安座をかいて
 滔々と列べた辨舌に、坂田の龜八坊主めアツと言つ
 て開いた口が閉がらねエ「オオ／＼赤岩の阿兄、大
 變な者を引張つて來ちやつたなア、エ、大阪の雜魚
 場で生れたお百ツてんで、江戸は深川の櫓下で美濃
 屋小さんと云ふ藝者で……成程どうも美しい女だと思
 つたが、亭主を踏殺して佐渡へ流されて、嶋を破つ
 てから能登の七尾で勘作と云ふ老爺さんを殺し小兒
 までも踏殺して火を放けたんだつて、ヤアどうも大

變者だなア……さうでございますか、マア姐御お見損申して濟みません、どうかマア姐御の配下になつて一稼ぎ稼ぎたうございますから、好い仕事があるんならどうか何分にも目を掛けてお呉んなせいで百「マアお前達がさう言やア何よりの事、ろれちやア酒田へ乗込みさいすりやア一つ儲かる仕事があるから、お前方にも澤山儲けさせてやらうから……」と云ふので、茲で愈々出羽の酒田を指して乗込んで来る。

御話變つて出羽國酒田寺町に龍王山正覺寺と云ふお寺がある、住持を日寛上人と言つて世人縛名をして業平日寛と云ふ、色がクツキリ白く眼がパツチリとして鼻筋が通り、どうも實に美しい男でございます、此正覺寺へ年の頃彼是れ四十恰好の人物、其後から参りましたのは如何さま此者の娘でございませう、

知を致しましたサア此方へ……」と座敷へ通し申して茶煙草盆と叮嚀に接待します、時に重助はさて是は旦那様へどうか、是は御納所様へ、是はどうか御本尊様へ、と懷中から金を澤山取出して住持から納所からズツと行渡りが付きますと地獄の沙汰も金次第、當今は然うでもございますまいが往昔は坊さんが錢金を呉れますると大層悦んだもので、是はどうか御奇特なことで、コレはく御奇特なこと、無暗に御奇特でござかして仕舞ふ、お菓子を出し接待つ所へ立出でましたは住持の日寛「ア是れは能く御出でなすつた、江戸から……それはくエ、取調べまして御挨拶を致します、マア御緩り御休息を……」

と過去帳を取出して段々調べましたが大山村の重助も鈴木とも云ふのはない 日寛「ハテナ……先住が此先きに隠居をして居りますから篤と尋ねまして

年の頃十八九か二十歳位ゐの身長のスラリとした眼元涼やかに色の白い美しい縹緖の娘、玄關へ掛りまして「お頼み申す 役僧「ハイ ○イ、私は庄内領大山村の百姓鈴木重助と申します 役僧「ハイく 重助「江戸へ出まして小網町に店を出しまして出羽金と申し、只今では玄米問屋を致して居りますが、どうも此始終病人が絶えませぬ、癒るかと思ふと復た病人が出来、ろれちが快くなるかと思ふと又病人が出来、だんくマア神託をやつたり占易を見て貰ひましたりしたら、先祖の無縁になつて居る其佛の祟りだマア斯う云ふやうなことで、それからマア今度國へ参りましたが、この一の町に親類がございまして此家へ参つて居ります、就きましては過去帳を調べ戴きたう存じます、大山村の鈴木重助と申します 役僧「ア、さうでございますか、それはく……承

取調べませう 重助「左様でございますかイエとせ十日ばかり此方に逗留を致しますから、今日が今日でございませぬでも差支はございませぬ、どうか篤と取調べ下さいまし、實は石塔でも建つて法事を致し、さうして江戸表へ立歸りまする心底、何分宜しく願ひたく存じます」と話をして居る中に、娘が日に胸先へ手を當てよ「ツーン」と齒を切嚙つて其處へ打倒れる 重助「どうした、コレお百合や、お前どうしたのか、確乎しなくつちやア可ないよ……お百合、ア、困つたもんだ又持病の癪だ……何とも恐入りましたが是では逆も歩くも退くも出来ませぬ、直ぐ親類を一挺雇つて來まして一ノ町の親類まで連れて参ります、直ぐ私は引返しますからどうぞ此處へ御差置を願ひます 日寛「ハイく承知いたしました、

御持病の癪で、それはどうも御困りで、届かないながらどうか御手當を致します、逆も是れは御歩さなる譯にはいさますまいから速くア駕籠でも雇つていらつしやいまするやうに……
 重助「百合やお前しつかりしなくつちやア可ないよ、私は直ぐ行つて来るから……何分どうか御頼み申します」と重助と云ふ者は忽ち戶外へ出て行く、跡はウン／＼齒を切噛つて娘が苦んで居る様子、日寛と云ふ坊さんが「姐さんや、さぞお困りだらうがア確乎しなくつちやア可ない、此れはのー御祖母様の御封、有難い御封だに依つて之をマア我慢して戴いたが宜い……コレ／＼姐さんや確乎しな」何だか知らないが御封を持つて来て娘に宛ふと推戴いてゴツクリ飲子し、胸撫下してホツと一息吐いて「有難ふ存じました、飛んだ御厄介に相成りまして申譯もございませぬ、實

は妾は何でございませぬ、出羽屋重助の娘でございませぬ、今度婿に取りまするのが大山村の農夫で私の従弟でございませぬ、何分にも其私の亭主になる約束をした男が醜漢も醜漢も人間ではございませぬ、化物みたやうな容顔をして居ります、わんな男を生涯の亭主に持つことか、ア、厭だア、厭だと思ふと何だか胸先へキリ／＼さし込んで来て、それが到頭病癪の基になつて飛んだ御厄介になりました、貴方のやうな御美貌な亭主を持ちましたら嘸嬉しいこととございませう」と妙な眼付きをして日寛の顔をジロりと見ると元と此日寛坊主が恐ろしい自惚で、已れ位に美しい男はないと云ふ氣がある「ハ、ア、して見ると此娘は内々褶納に惚つたんだ、御馳走ならば夏も牡丹餅と云ふから……」好い景見の坊さんだ、日は暮れかゝつたがまだ迎かへの者は参りませぬ日

寛「マア／＼姐さん、瓶が落付いて大きに宜い按排だ、お前に、御内陣の有難い御尊像を拜まして進めるから此方へ一緒に御出で、娘、有難う存じます、何方へ……」日寛「何方へ行つても宜い、マア此方へお出で……」先へ立つて手を取つて行く、顔を潮差ました右の娘、さまりが悪るさうに後へ附いて来た、本堂へ来て須彌壇の後ろの方へ参り、ドーンと柱の横を叩くとキーツと戸が開いて一つの隠座敷がある、日寛「サア姐さんや此處は誰も来る氣遣ひはない、ノ一緩くり沈着いてお在で、娘、ハイ有難う存じます、すが何だかお羞かしい……」日寛「ナアに羞かしい事も何にもありやしない、サア／＼姐さんや」と日寛坊主の忽ち娘の手を取つて側へ引寄せやうとする、途端に小坊主が蒼くなつて飛んで来て「お師匠さん大變でございませぬ、日寛、どうした、小僧、アノ今御女

中の阿父さんと云ふお方が駕籠屋を連れて来たから表を開けて呉れうと仰しやいますから、門を開ける途端に入つて参りましたのが五人連でございませぬ、皆んな黒装束をしてドギ／＼する恐ろしい刀を持つて這入つて来ました、みんな盗賊でございませぬ、アノお女中のお連さんは盗賊でございませぬ」と聞いて驚いた日寛が「エーッ……姐さんやお前の連は何だへ、お百「何をッ」と言ふが早いか坊主頭をボカ／＼拳固で以て撲付ける、アツと言つて驚いた日寛をゴロリ其處へ倒がすと馬乗にウムと跨つて懐中から引抜いたのが八寸三分の匕首、日寛坊主の鼻前へヒョいと突付け「静かにしろ、まを／＼すりやア汝の素首は打落すから覺悟をしろ」日寛驚いたの驚かないの、若白になつてブル／＼ブル／＼顔へて居る、女は懐ろから呼子の笛を出してピイ／＼と吹

鳴らす、忽ちの間にドカ／＼ドカ／＼入つて来たのが滑川銀藏に坂田の龜八、館山無宿の三吉、長門の熊十、赤岩重助「姐御首尾はどうかした」娘「ウムどう／＼坊主の隠座敷を突留めて入道を捕獲せへた所なんだ、寺中の者はどうしたへ」此娘こそ言はずと知れたお百でございませ、重助「片ツ端から縛上げて、小僧もどう／＼此通り引縛つちまいましたお百「よし／＼其奴等は本堂へ持つて行つて縛して置きナ……サア坊主、是から聞くことを有様に言ひさへすれば命は助けるが、隠し立をするに命がねエから覺悟をしへ、酒田の本町の唐木屋甚兵衛の後家お辰と云ふ者と汝れア好い交情になつて、此座敷へお辰を引張り込んで愛しいとか可愛いとか言つて抱腹をするに相違はあるめい、覺悟がねエと吐きやア其儘には捨置かねエが、どうだ確かに覺えがあるだ

らう、キリ／＼白状しろ 日寛「能く御合點でございませ、御承知ぢやア仕方がない申上げませが、實は此座敷も唐木屋の寡婦お辰が拵へて呉れました座敷なんでございませ お百「よし、蛇の道は蛇と云つて、悪いことをする人間だと云ふことは江戸の御牢内で耳に入れ、幾々百里の道を下つた位だから、疾に其調へは着いて居るんだ、庄内領大山村百姓重助の娘と云ふなア僞言で、眞實は大坂生れのお百と云ふ女盜賊さ、お辰から取蓄めた金があらうから出せ、此處へ金を出しやア命は助けてやる、若しあるの無へのと吐きやア其分には捨置かねエ、サア有りツたけ出しちまへ 日寛「出す所ぢやアございませぬ、斯うなれアモウ仕方がございませぬから此處にお辰から取蓄めた金が三百八十兩ございませ、之を貴方に差上りませから、どうか命ばかりは御助けをなすつ

て貴方の配下になすつて下さりやア私も一稼ぎ稼ぎませが、どうか命をお助けなすつちやア下さいませぬか お百「白痴なことをお言いでない、お前のやうな入道が盗人稼業が出来るものかネ、モウチツトあるだらうと思つたが、併し無いと言ひへばそれまで

す、ちよつと御免を蒙りまして……

第十五席

のこと、お前の命は助けてやらうとは思つたんだが、少しお前の其坊主首が入用だから、氣の毎だが坊さんお前の命は貰つたよ 日寛「そりやアお前さん餘り酷い、金を取つた上生命まで奪らうと云ふのは……お百「何を夜迷言を言ふんだネ、痛くないやうに首を切つてやるから早く念佛をお唱へ」と乗掛つて忽ちに日寛の首をブツツリ切つて落した、其首を風呂敷に包んで忽ち此の龍王山正覺寺を立去つた姐妃のお百、是から酒田の一ノ町へ参りまして五百兩と云ふ金子を騙奪ると云ふお百強請の一件でございませ

出羽の酒田と云ふは誠に結構な所、一ノ町、二ノ町、實にどうも軒を列べまして假設に江戸とさりと申しまする位、本町に唐木屋と申しまする呉服屋がある、番頭から若衆大勢店に列びまして「小僧一やお茶を上げろ」と頻りに聲を掛けませ、東京なら大丸、白木屋とも言つべき唐木屋甚兵衛、店へツツと入つて来た眉毛の痕が青々として年の頃二十二三とも見ぬませする丈の蒲酒とした色はクツキリ白く眼のバツチリとした愛嬌のございませする美しい縹緞の婦人、單衣の上被に麻裏を結付草履にして、鼈甲竹の杖を持ち、一人は荷持と見ゆまして三十八九歳になる男が供をして参りまして 女「御免下さいませし 番頭「入來つしやいませし、何を御買物でございませるか

「此方へどうか御掛け遊ばして、女「イエ私には買物で
はございませぬ、江戸の馬喰町二丁目から参りまし
か庄内屋治兵衛の妻でございするが、羽黒山へ参
詣に参りました途中、常家様の内儀さんのお辰さ
んへ一寸御目に掛けて参らうと思ひお店へ出たので
ございす、どうか内儀さんへさう仰有つて……庄
内屋の女房など仰有れば御存じて在つしやいます番
頭「へエ左様で在つしやいますか、承知いたしまし
た、先づ此方へ御掛け遊ばして……」之を奥へ申入
れると、此寡婦のお辰と云ふのが以前馬喰町二丁目
の庄内屋と云ふ旅宿の裏に日雇稼ぎを致して居りま
した者の娘で、唐木屋甚兵衛が江戸へ出て庄内屋へ
逗留中月給の妾に抱へられまして、大層甚兵衛の氣
に入つて、うれから酒田へ一緒に連れて来て、先妻
が没去つてズル〜ベツタリ、常今では唐木屋の寡

婦、其兵衛が死んで仕舞つて唐木屋の財産は自分が
悉皆統取へて居る、ナカ〜此女がその一通りなら
ない硬骨者、自分も元と江戸に居りまして庄内屋に
は大層世話になつた覺がある、其家の女房など云
ふから直ぐ座敷へ通し葉煙草盆を出し町噺に接待し
、間の換をスラリと開いて「お入來なさい」と見る
と見たことのない若い婦人「お辰「イヤ〜……お入
來なさいまし、貴方でございすか庄内屋さんの内
儀さんは、妾の唐木屋の辰でございす、女「イヤ貴
方でございすがお辰さんは、初めまして御目に懸
ります、妾、馬喰町二丁目庄内屋治兵衛の妻でござ
います、お辰「アノ妾の存じて居る庄内屋さんの内儀
は貴方から見ますとモウ十五六も歳を老つてお在
でなさるやうに存じましたか……」女「ハイあれは姉
でございすよ、妾は其時分他方の御屋敷様へ御奉

公をして居りまして、姉が没去りましたに就て遺言
でございまして姉の跡へ妾が後妻に直つたんでござ
います、お辰「イヤ〜さうでございすか、道理で
大分年が違ふと存じました、ぢやア何でございす
すか貴方のやうな妹御があんなすつたけかネ、
能くまア今度はお入來なすつた、羽黒山へ御参詣で
ございすすとエ、女「ハイお参詣に参りました序で
ございすから、アノ先達唐木屋の旦那へ御用立つた
お金でございすのを戴いて参ります丁筋でお邪
魔に出ましたんでございす、お辰「イヤ〜さうで
何でございすか亡夫が貴方の所に働介になつ
た時に幾らかお借金があつたので、左様で、それな
らさうと早く仰有つて下されば態々お出がなくつた
つてお届け申すものを、何とも言はないで没去つて
仕舞つたもんだからツイア存じませんで、態々お

手敷を掛けて和濟みませぬが、どの位で、女「イエも
うはんの些細でございすか……」お辰「些細と仰有
つたつて唯些細では分らない、ドの位アノお借り
申したんでございす、女「何でございすよ僅々五
百兩で、お辰「エツ……お前さんア沈着て話をし
てお呉んなさい、幾らだとエ、女「僅々五百兩でござい
ますよ、お辰「たつた五百兩……モシ庄内屋の内儀さ
ん其様な突拍子もない辻褄の合はない話をしされるも
んぢやアない、五兩や十兩の金子なら兎も角も三百
兩の五百兩のと其様な大金を借りてなんぼ良人がば
んやりたつて黙つて死ぬ氣遣はなし、お前の方だつ
て今更で打捨ときなさる氣遣もない……ア、聞けた
甚兵衛殿か商賈用で庄内屋さんへ泊つて居なさる時
分にお前さんが大層縁が宜いから亡夫の甚兵衛と
何か因縁でもあつた、そこに關係した所から、それ

にアンレ軍師が附いてア、とか斯うとか狂言を書出して五百兩と云ふ金を唯持つて行きなさるうと云ふ……ホ、戯談言つちやア可ないよ、姐さん、妾はね今は斯うやつて酒田の本町唐木屋甚兵衛の寡婦お辰でキチンと澄まして居るがネ、妾の阿父は日傭取で、小兒の時分から散々苦勞に苦勞をして、何と云ふことなくやつて來た厚面しのお辰、そんな淺謀に乗つて三百兩の五百兩の云ふお金をお前達に持つて行かれるやうなまだ甚碌はしやアしない、顔を洗つて出直つておいで、ネー人を……面白くもねい何だと思つて居やアがる 女「オやお前さんマア可怪なことを仰しやる、何か妾が唐木屋の甚兵衛さんとおかしな譯でもあつて、柄のない所へ柄を付けてゆすり騙取をすると言はぬばかりの御口上、戯談言つちやア可ませぬよ、貸した物を取りに來たのに不思議

はないぢやアないか、借りたお金を返すことは出來ないよ仰しやるのかい お辰「借りた金は返すよ、確かに借りたもんなら返すがね、五百兩と言やア大金だ、今まで知らぬ顔をして突然に寝耳に水、其様な突拍子もない馬鹿々々しいことを言つたつてオヤさうでございませうかと誰が渡す奴があるもんかね、面白くもねい、貸したなら貸した確かな首と釣替の印形を捺した判證文でもあるツて云ふなら兎も角、お貸し申しました、ハイ左様ならお持ちなさいと、其様な間拔な奴は此出羽の酒田には居ないよ 女「オヤ〜マアお辰さん、可怪なことを言ひなされる、五百兩と云ふ大金をお貰ひ申すのに確かな証據がなくつて參る氣遣はない、証據があるから參つたんで お辰「あるならお見せなさいナ、見た上で確かにお借り申したに違ひないと話が決つたら五百兩が千兩でも

耳を揃へてお渡し申さう 女「さう仰しやればお話が一番速い、何だかゆすり騙取でもするやうに怪しく仰しやられると大きに困ります、アお前さんの確かな御話もなんだから、ちよつと何うか文次郎さんと呼んでお貰ひ申したいから お辰「ハイ〜……文次郎や……文次郎や 文次「ハイ お辰「ちよつとお出で、庄内屋の内儀さんださうで云爾仰しやる、確實な証據があると言ひなされるから今見やうツてんで、お前其處へ座つて話を能くお聞き 文次「それア飛んでもないことでございませう、籠棒な五百兩なんで大金をお借り申して今まで打捨つて置く其様な主人の甚兵衛ぢやアぞわせん、内儀さんマア途方もないことを言ひなされる 女「お前方は途方があつたのいとの勝手

なことを言つて居なされるが、マア〜黙つて妾がお目に懸ける品物を能く見とお呉んなさいよ、覺悟がないと言はれた義理ぢやアあるまいから、チー」ツ一ツと立つて襖際に來て、先刻奥へ通る時に持つて來た包でございませう、圓い包だ、店の者がハテナ此内儀さんは何か土産物を持つて來た、西瓜でも持つて來たのかしらと考へて居たそれを座敷の中央に出して 女「サアお辰さん、文次郎さん、能く眼を開いて見てお呉れ、首と釣替の印形よりモウ些と確かな物、之を見たら覺悟がないとは言はれまい、是が確かな證據だよ、結目を解いて其處へゴロ〜と轉がした、お辰に文次郎がヒヨイと見ると斯は如何に、是が寺町の龍王山正覺寺の日寛の首だ、驚いたのはお辰蒼白になつて仕舞ふ、文次郎に於ては唇の色が變つてブル〜慄へ出した、互に顔を見合はしたが

グーどもスーども言へない 女「オイお辰さん、此首
 を見たら覺わがないとは豈失言へめい、エ、是はネ
 愛し可愛いと抱寝をした龍王山正覺寺の日寛の生首
 た、坊主を責んでお前の今までのことはチャンと種
 は上つて居る、長い短いは言はねいから五百兩の金
 を出さなせい、と言つたばかりやア腑に落ちめい
 から一通り言つて聞かせるから能くお聞きよ、……
 オイ文次郎、お前も其處に居て覺わがあることだか
 ら聽いてお呉れ、妻はね庄内屋の女房でも何でもね
 い、大阪の雜魚場から深川の橋下へ来て美濃屋の小
 さんと言つて藝者をして、亭主の桑名屋徳兵衛と云
 ふ者を砂村入引張り出して殺した、其の一件で傳馬
 町の御牢内に繋かれたが、傳馬上町から出火があつ
 て出火戻りの一格下げ、今までの例のねい女の佐渡行
 佐渡ヶ嶋へ行つて罪人の御着仕を縫ふ神妙の役を言

ひつかつて居たがサテ居られたもんぢやアねい、ト
 ウ〜佐渡ヶ島を打破つて能登の七尾へ来て勘作と
 云ふ老爺を殺し、それから此方へ乗込んだ大阪無宿
 のお百だが、妻が傳馬町の御牢内に女牢の名主をし
 て居ると、隅でメソ〜泣いて居る女がある、何を
 泣いて居るか此方へ来て話をしな、何處の者だと言
 つて聞くと、何を隠しませう妻は酒田の本町呉服屋
 の唐木屋甚兵衛の娘でございませう、阿母さんが亡く
 なつて阿父さんの甚兵衛が江戸から引張つて来たお
 辰と云ふ妻、是がツル〜ベツタリに後妻に直つて
 妻の繼母さんと云ふやうな事になつた、所が阿父
 の甚兵衛が恐ろしいお辰と云ふ女を信用して何も斯
 も家のことは一切お辰に任せるから一人で切つて廻
 して居る、する中にお辰の舍弟文次郎と云ふ若い者
 があつて、是と圖らず密通をして、誠にお耻かしい

ことわざいませうが店のお金を攫つて二人で手に手
 を取つて江戸に出て来た、丁度千住と云ふ所へ泊つ
 た晩に文次郎が居なくなつて、隣座敷に居た客の金
 が紛失つた、さては此女が盗んだ、此女の連の者が
 盗んだと、妻はどう〜盗賊の疑ひで御牢内へ参り
 ました、文次郎と云ふ男は何處へ行つて仕舞つたか
 千住まで来て拾てられましたんでございませう、どう
 したら宜いかわらないと可哀想に其お吉と云ふ娘が
 オイ〜泣くから、ヤレ〜可哀想にそれはお辰と
 云ふ女と弟の文次郎と云ふ奴が馴合つて、お前が家
 に居た日には面倒臭いから家から引摺出して千住ま
 で来てお前を打捨つて行つたんで、隣座敷に泊つた
 客の金が紛失つたとか荷物も紛失つたとか云ふのは
 矢張りこいつも巧へ業で、お前を深海へはめたのだ
 、氣の毒だがお前の阿父さんの甚兵衛さんはまんま

と鐵器しちやア居なさるめい、お辰と云ふ女のため
 に大概毒でも飲ませられて殺されて仕舞つたに違ひ
 ない、お前の身代はお辰と云ふ女に乘取られたらう
 、ヤレ〜可哀想に併しアお吉坊や緊りしな、妻
 が附いて居るからの、今に娑婆の風に當りやアお前
 の仇は取つてやる、決してキナ〜しなさるなどい
 ろ〜懺めてやつて大層お吉坊が悦んで日寛坊主の
 ことから何から残らず妻に話したが、氣が緩んだか
 御牢内へ来て三日目に熱氣を蒙つてゴロリと到頭死
 ちやつた、ヤレ〜可哀想にと思ふにつけ、娑婆の
 風に當つたらお吉坊の仇、どうか恨みを齎して呉れ
 やうと思つて居たが、幸ひ今度乗込んだ此酒田の寺
 町の龍王山正覺寺、お吉から聞いた話もあるに依つ
 て坊主を引捕へて吟味をして、お前が甚兵衛を殺し
 て怪しい死骸を日寛が承知で以て埋葬をし、隣座敷

を拵けて置いて日寛とお前が毎晩のやうに痴語つて
 樂しむ、何も斯も此方へチャンと証據が上つて居る
 、恐入つたと自状すりやアよし、するのしねいの金
 が出せるの出せねいのと言やア仕方無い、どうせ
 体は投出した此お百、氣の毒だが此身代は連尺つけ
 て間魔の應へ脊負つて行つて、ヤン／＼草の盛りを
 見せるがどうだエお辰さん、たつた五百兩で日寛の
 首を買つて置いたら安いもんだらうと思ふが、どう
 でも五百兩の金は出せないかい、能くマア胸へ手を
 當て返事を聞かしてお呉れ 文次「阿姉さんエ、此の
 お方が仰しやるのは御無理ではない、是はマア金を
 お渡し申して無事にお済ませなすつたが宜うがせう
 からどうかア…… お辰「お前さんが仰しやつたの
 は何も斯も覺のなないこともございません、荒立つ
 ては誠に面倒で、仰しやいまする通り五百兩の金を

上げますからどうぞ御内聞になすつて下さい お百「
 お前さんの方でさう素直に折れて出なさりやア妾の
 方でもさう因業なことは言ひたくない、ゆすり騙取
 と言はれたからツイ聲高に文句は言ふやうなもの
 、何のお前さん言ふ通り五百兩の金を出して呉んな
 さりやア何で厭なことを言ふもんでせう お辰「文次
 どんや早くお金を持つて来て此お方に…… 文次「承
 知いたしました お辰「左様ならどうかお拾めなすつ
 て お百「オヤ／＼お氣の毒さまで、ぢやアアお貰
 ひ申します、アノお辰さん、お前さんが愛しい可愛
 いと抱いて寝た日寛の坊主首、百兩のかたに編笠一
 蓋と云ふ比喩もある、置いて行くからお前さんがま
 ゃ抱いて寝ることもどうとも勝手におし お辰「其様な
 物を置いて行かれては甚だ困りますからどうかお持
 ちなすつて お百「どうでございませるか、それぢやア

マア持つて行きませうよ」以前の通り包込み お百「
 だがネ、此五百兩は根ツきり葉ツきり是れツきりぢ
 やアないよ、此先き又金がなくなつて入用の時には
 使者を寄越すから二言と言はず届けてお呉れ、出来
 る出来ないと言やア唐木屋の身代は全然間魔の應へ
 持つて行かにはやアならない、此金を使つて仕舞つて
 無くなつたら又来るからネ お辰「其様なにどうも度
 々お入来なすつては困りますから成べくどうかお入
 来のないやうに お百「頼だお邪魔をいたしました、
 御免なさい」とツーツと立つて店へ出て来て「どう
 もお店の衆大さにお邪魔を致しました、妾はアノ江
 戸の馬喰町二丁目庄内屋治兵衛と申しまする旅宿、
 どうか彼方へお入来になつたら是非お立奇を願ひど
 う存じますオホ、」……誰が此様な奴の所へ行く
 奴があるもんか、ガラリ變つてニッコリ愛嬌溢れる

やうに笑を含んで喉を告げて立歸りました。
 入變つて歸つて来た一番番頭の與兵衛、奥へ通つて
 見るとお辰と文次郎が色青褪めて情れて居るから與
 「どうしたと」と聞くと實は斯う／＼と云ふ此話
 を聞いて驚いた「そいつは大變だ、五百兩で根切葉
 切り是つきりすつから手を切つたんなら宜いが、金
 を使つて仕舞つて無くなつたら又来る、其金を使つ
 て又無くなりア使が来る、金の蔓を酒田の本町唐木
 屋へ拵へた量見になられた日にやア大變だソレぢや
 ア一層捕縛して仕舞つた方が宜いから私に萬々御任せ
 なさい」と五百兩の金を持つて番頭與兵衛、酒井様
 の御陣屋へ来て永田彦次郎片山金太夫と云ふお役人
 へ金を攫まして、どうか斯う云ふ一件だからお召捕
 りを願ひたいと云ふ、金の光りはなくとも事あれか
 しど待掛へて居た血氣の役人ソレツと云ふので是か

百おの妃姐

ら御手當になる、此方はお百に於ては船へ歸つて來て「サアお前方はマア一杯飲みませい、五百兩に三百八十兩、千兩足らずの金が遺入つて、先さまの仕事の見込があるからマア」安心をして一杯飲むが宜い」大勢の無頼漢が集つて「どうも姐御恐入つた、どうも大層な腕前ぢやアございませぬか、實にどうも恐入つた」とガブ／＼ガブ／＼酒を飲んで悦んで居る、けれども安心ならないから他の港へ行つてから十分に樂まうと云ふので船を出さうと云ふ途端に、八方から致してサツ／＼サツ／＼と櫓拍子揃へて乗込んで参りませした數十艘の捕手の船「御用……御用……上意」と八方から取巻いたから手下の者が早くも之を見て「ア、姐御、大變だ、善い後は悪いと云ふが違ひない、是はまご／＼して居るんぢやアなかつたつけ、ソレ乗出せ」と言つたが間に合は

ない、斯うなれア仕方がないと坂田の龜八、宿の三吉、長門の熊十、滑川の銀藏に赤岩の重助が「サア來い來たれ」と捕手に向ふ、八方から取巻いたのは山本嘉平治、奥村重兵衛、稻垣三平など云ふ御役人、バツクバツク／＼忽ちに大勢を取つて押へる中に、お百に於ては逆も助からないと思ふから身を躍らして忽ちブーリと海中へ飛込んで仕舞ふ「ソレ女中が一人入水をした」とだん／＼其處此處を察察を致したが何處へどう遁れたんたか死んで仕舞つたんだか死骸もどんど分らない、御役人は召掛つた賊共を引立つて是は御陣屋へ御引取に相成りませわ。

御話續つて佐竹様の御船頭に奥村七兵衛と云ふのがある、酒田の沖の小島に風待を致して風が順くなりましたから出帆に及ばうと云ふので錨を引揚げます

百おの妃姐

る、ギーツ……ギーツと錨綱を引揚げると斯は如何シツカリと綱に取付いて揚つて参りました一人の婦人、髪はおどろに振乱し齒をシツカリ切嘴つて死んで居るが、どうも美しい女と云つて露の垂れるやう七兵衛「ヤツどうしたんだらう、何しう可哀想に助かならば助けてやらうと鳩尾へ手をやつて見ると未だ暖まつて居ります、介抱したら助からぬこともわるまいと直に手當を致し身体を暖めなさいたし藥を與へる中に「ウーン」と宜い按排に息を吹返す 其兵衛「姐さんやどうしたお前シツカリさつしやい」おツと一息吐いて「有難う存じます 七兵衛」どうしてマアお前海へ落込たのか 女「ハイ妾は何でございます大阪の者でございませぬが兩親と一緒に新潟まで参りましたが乗合ました其船が海賊船で阿父さんも阿母さんもどう／＼海へ斯込まれて仕舞ひ、私は大勢の海

賊のために輪姦れやうとした所を尊を死んだ方が宜いと考へて振もぎつて海へ飛込みましたまでは覺悟して居りますが其後は何にも存じませぬ、危き命をお助け下さいまして御禮の申しやうもございませぬ有難う存じます 七兵衛「ヤレ／＼マア眼だ目に遭なすつたつけ、酷いことをしやがる、私は大阪の方へも能く行くから大阪の何と云ふ所だか送つて進せやう女「有難う存じますが兩親は海賊に殺され妾は賊共に肌身を汚されはしませぬが、兩親を見殺しに致したと云ふ實に生きて居るさい面目もない次第、何處と云つて頼る處もございませぬから妾は尊を國へ歸る最見はございませぬ 七兵衛「さうかうれぢやア兎も角も私が一緒に連れて行つて世話をして進せやうから私と一緒に行きなさい、私は佐竹様の御船頭をして居る奥田七兵衛と云ふ者だ、悪いやうにはしねいか

ら安心をして兎も角も己の所へ行きなさい」と茲で船へ乗せて出掛けたが是が彼のお百でございませぬ、悪運の強いお百はやがて此船へ乗つて助けられて来たのが御羽の秋田、家へ歸つて七兵衛が「婆さんや酒田の沖の小嶋でコレ〜で娘を一人授かつた、當人の話を聞いたら生れた國へ歸る最見はないと斯う云ふから、段々話をしてまア家の娘にする積り、何と婆さんや美しい娘ぢやアねいか、婆「オヤマア没去つた娘にぞつか似て居るやうに思はれる、七兵衛「天道様が授けて下さつたんだ、ヤレ〜マア有難い……ぢやアお前は私共の娘にして育てるから其積りで……お百「有難う存じます、何分とも阿母さんお願ひ申します」と此處でお百合と名を替へて大膽にも奥田七兵衛の娘となつたが、經織が美しいから化粧もどゴク若くなるから當人白ばくれて二十一歳だと言つて居

る、七兵衛に於ては二人娘に死なれ夫婦で嘆いて居る所へ此お百が来たので、大きに悦んど可愛がりさつて居る、是が大層な評判で世間体は大坂の藏屋敷に居た時に茶屋の娘へ手を付けて出来た子を今度連れて歸つた、全く七兵衛の娘に違ひないと斯う言つて居るから誰も疑ふ人はない、近邊では奥田小町と言つて大層な評判、スルト佐竹八代目の左兵衛佐義正公、或日のこと御應野に御立出でになつて其歸途奥田七兵衛方に御立寄りになつた時に、十分に粧ひを飾つたお百のお百合、茶を點てまして其處へ持つて差出す、左兵衛佐義正公何心なく右の御茶碗を取つて御覽になると驚いた、其經織の美しいこと何とも喩へやうはない、暫くの間お百に見惚れて居りまして「今一杯呉れ……今一杯所望をする」とお茶を三十八杯と召飲つて悉くの御機嫌でお歸りに相成る、

何分にも忘れられませぬから御意に入りの名川采女と云ふ者に御相談になる、名川采女から奥田七兵衛に相談をしてボンと此お百が殿様の御妾に出た、大坂でお百と言ひ江戸で小三と言つて櫓下に至盛肩を並ぶる者なく、佐竹の御屋敷へ住込んでお百合と名前が三度變りました、天然にては華陽夫人、唐土には姐妃と言ひ我日本で玉藻前と名前が三度變つたは云ふ、後に人が綽名をして姐妃のお百と云つたのは此大悪婆、左兵衛佐義正公の御愛妾になると何しろ沈水と清水との吹分けをしやうと云ふお百、土佐の小節に流山の淋味でコツテリと煮て食はした、其食味がどうとも斯うとも忘れられないから義正公、且けても暮れてもお百合々々々、コリ〜と云つて居るが、地蔵など大槪掃蕪して仕舞ふ、サアどうも夢中になつてお在で遊ばす、是が此儘終りますれば何

事もないが、さてさうは可ぬもの、天道講釋師を殺さずして茲に佐竹の御家に一つの騷動出来に及ぶ、名川采女の悪心から著名の戸塚四郎兵衛殿が誠忠を勵むと云ふ、佐竹の御家騷動出来の御話は次席に言上致します

第十六席

佐竹様の御船頭奥田七兵衛の娘になりましてお百合と名乗り、佐竹八代目の左兵衛佐義正公の御愛妾に相成るのでございませぬが、茲に名川采女と云ふ悪人がございまして、佐竹の御家に一つの騷動出来を致し、姐妃のお百に名川采女とが心を合はして左兵衛佐義正公の御生命を縮めますやうなことが生じます、扱て此名川采女と申します者の御話をちよつと申上げまするが、江州佐和山の城主石田治部少輔三成の悴三丸と云つて常州水戸の城主佐竹中將義宣

公の家老車丹波の養子と相成りました、所が慶長五年關ヶ原の戦争の時に、上杉佐竹合体に及んで徳川家へ敵對つて、石田三成が關ヶ原に敗北を致し、どうく三成捕虜となり京都で首を刎ねられ、上杉佐竹は徳川家へ降参をして、上杉は出羽の米澤へ御國替、佐竹様は常陸の水戸から出羽の秋田へ御國替となりました、其際に先代車丹波はどうか徳川家のために首を刎ねられました、養子三丸の車丹波秀虎は、其際浪人をして行方知れずになつて仕舞つた、所が徳川の天下治まりまして三代の家光公京御上洛を遊ばすと云ふので、江戸表を御發足になつて東海道國根へ御掛り遊ばした、ト此三代の家光と云ふ將軍は殊の外に豪氣な御方、物に頓着がございませぬから兩根の山中に御駕籠を留めて御駕籠の中から諸方を御見物遊ばす、實に其景色の好いこと得も云

はれぬやう、大門の杉に於ては百足の足の如く小波寄せます、湖水の様子、巨勢金岡の筆にも及ばぬばかりの眺望、餘念もなく山中の景色を御覺まされて居る遙か向ふの森蔭から致してドーンと筒音高く家光公の御駕籠へ鉄砲を打込んだ、左右に扣へましたる若武士が「ソレ曲者ッ」と飛ぶが如くに鉄砲の音した方へ駈付けます、家光公は駕籠の戸を蹴開いて御立出になり忽ち「馬曳けッ」と仰しやつて馬の上へ飛上つて、鎧を踏張り鞍坪へ直立つて「予に對して發砲を致した曲者取逃しては相成らぬ、速かに召捕れ」と身を揉んで下知を遊ばされする、御側の人々が「どうも乗物の中に在らせられても危ないが御馬乗は益々危ふござるに依つて御下乗を遊ばすやう」と御異見をしたが中々家光公御勇氣で在つしやるから御肯入がない、所が大久保彦左衛門が駈付けまし

て「どうも御馬乗は大層お美事で在つしやる、追がは三代の將軍實に彦左衛門恐入りました、天晴れ天晴れ」と云つて扇を開いて煽き立てまして家光公を褒める「傍の連中が「馬鹿な老爺だ、右など云へば左、赤いと云へば黒いと云ふ、馬の上には立つて在しつた日には鉄砲の丸先へ的になつて立つたやうなもの、了簡達の老爺」と一同の人々は苦々しく思ひまするが、彦左衛門などの考案は又違ふ、鉄砲玉が怖いと云つて震れて居るやうな事ではナカク天下が治まるものではないと云ふ、是は又考慮の違ふところ、石川八左衛門と云ふ御旗本が第一番に取つて返し「曲者に於ては何れへ逃去つたかトウ」を取逃しました、周章で逃げたものと見ゆ九箱と鉄砲を取落して参りました」將軍家へ筒先を向けましたるは此銃でござる」と差上げたのを家光公か御覽遊

ばすと種ヶ嶋の拳銃、今日見ました日には形も不器用な見られたものぢやアないが往昔は大層珍重を致しました、一尺ばかりございます種ヶ嶋と云ふ短銃だ、手に取つて御覽なされるとブーンとどうも非常に佳い聲がする、何で斯様な佳い聲がするかと砲術者と呼んで御討になると、何でも名香を所持致した者が發砲をしたに違ひない、是は蘭爵待の名香の移香だと云ふこと、茲で日本六十餘州津々浦々へ御觸れになつたのは、因由なくして名香を所持致した者を見當つたら速かに訴出ると厳しく御觸出しになつて將軍家は其儘御上洛遊ばして無事に江戸表へ還御になる、其年の暮に此曲者が捕まつた、肥前の長崎に寄合町と云ふ所がございまして其處に水月樓と云ふ名高い割烹店がございます、其奥の座敷に酒を飲んで居りました三人の客は、甲州屋嘉兵衛に近江屋

の勘七、美濃屋の勘兵衛と云ふ、長崎で著名い薬種問屋、何しろ日本第一の長崎港、外國船が始終入津をして居るので薬種問屋の大きいのは大概此の長崎港に限りましたもの、三人ながらどうも非常の入懇近江屋の勘七は頭字を取つて近勘と云ひ、美濃屋の勘兵衛は美勘、甲州屋の嘉兵衛は甲嘉と云ふ、みかんやさんかんは宜いがこうかなどは餘り好い呼聲ではございませぬが、三人ペロ〜に酔つて仕舞ひ、おさよと云ふ女中が側で頻りに接待つて居ります近勘「どうだい美濃屋、只ガブ〜飲むばかりが能でもない、と云つて三味線をチャンチャカチャンチャンカ弾いで胴魔聲で唄をうたふのも餘りどうも褒めた話でねへ、物は雅と云ふものが無くつちやアいかねい、此處にコレ三椀があるから此三椀で歌を一つづゝ詠うぢやアないか、總て此風韻がなくなつては世

中はおかしくない 美勘「風韻……風韻だの風韻だのと言ふがそりやア出来る人は兎も角も、出来ない者が詰らない臍臍を痛めて氣を揉んでもねいから、矢張り在來つた都々一か甚句の方が宜からう 近勘「さうでねつツてことよ、歌と云ふものは日本の寶だ、何んな者だつて歌を詠まねい人間はねい、汁椀に飯椀に中椀、之をその三十一文字の中に詠込むんだ、乃公が一番手本を出すからお前方も出来るならやつて見な……おさよさんや、此れへなみ〜注いで呉んな……オット、ハ、ハ、サア宜いか甲州屋美濃屋、乃公が此汁椀で一杯グツと飲ひ、三十一文字の中へ汁椀と云ふのを詠込ひんだ、能くマア聞かつせい」 近勘「斯う云ふんだ もみぢせぬ常盤の山に住む鹿は

おのれ鳴いてや秋をしるわん

どうだい、どうも恐入つたらう」利かない氣の美濃屋の勘兵衛「オイ近勘、前提が大層立派だからモウちつと氣の利いたことを詠かすかと思つたら何だい、ろんなことで宜いんなら乃公も一番やつて見る……おさよさんや、満々注いで呉んな」中椀を取つて一杯つがせまして、左も右もさうに舌を鼓して飲干し「コウ甲州屋近江屋能く聞かつせい乃公のはな

年のうちに又飲むべきと思ひさや

命なりけりさよのなかわん

斯う云ふんだ、ノ、今は暮だろう年の内だ、おさよさんの酌で中椀でぐつと飲んだつてんで年のうちに又飲むべきと思ひさや命なりけりさよのなかわん どうだ恐入つたか 近勘「少とも恐入りやアしねい順だ西行の出來損ひだ……サア甲州屋、お前の番だや

甲嘉「くだらねいことをお前がたは始めち

やつた、二人がやつて乃公がやらないのは仲間外れ癖に障るからやるが、悪い道具が残つちやつた、汁椀だの中椀などは宜いが跡へ残つたのは親椀だ、昔から親椀なんで歌を詠んだ人はアリやしねいコーツと飯椀……飯椀でもいかねい、そこで其の飯のことを飯と云ふが、飯を盛る椀だに依つて之を飯椀と聞いて呉んねい、宜いかい、親椀でいかず飯椀でいかねいから飯椀と云ふ歌になる、頼むせ 近勘「大層分疏が長いナ、よし〜飯椀と聞くからやんなせい 甲嘉「待て〜」矢張り親椀へなみ〜つがせ、キユ

年の中に春は來にけり一年を

去年とやいひわん今年とやいひわん

近勘「何だぞ分らねいぢやアねいか 甲嘉「分らねい

ことがわるものか、年の中に春は来にけり一年を去
 年とやいひわん今年とやいひわんサ 美勘「ハツハツ
 ハツ笹棒め赤犬と黒犬と囃合でもしやアしめーい、
 いひわんいひわん智恵のねい歌を詠んだものぞ 甲嘉
 「智恵がわらうが無からうが、三人が三人ながら斯
 うやつて一ツづゝ歌を詠む、是が和歌三神だ 近勘「
 すう／＼しい、馬鹿三人が聞いて呆れて仕舞ふ 美勘
 「それもさうかも知れない」とドツと返して笑ふと
 「此處にも一人この上人がござる 美勘「オイ／＼
 誰だ此處にも一人この上人なんて……お前かい
 甲「イ、エ 美勘「誰だなア、外の方ぢやアねいか」
 眩掛窓があるから障子をガラリ開けて戸外を見ます
 ると、垣根際の所へ醬油で煮めめたやうな手拭で頬
 を包み、溜塗の面桶を前へ置き、鎌首を上げまして
 座敷の方を頻りにコー覗いて居る 美勘「オイ／＼乞

食、お前じやアねへか此處にも一人この上人なん
 て言いたなア 乞食「ハイ、旦那方が和歌三神、馬鹿
 三人が聞いて呆れると云ふ面白さうな御話、我を忘
 れて此處にも一人この上人と言ひましたでござい
 ます 美勘「感心だ、實はノ話が盡きて仕舞つて仕舞
 がねいもんだから此様なマア下らないことを話出し
 たんだが、話も一つは肴になる此方へ這入つてせう
 だ一杯飲んますつては 乞食「有難う存じます、御言
 葉に従つて一つ戴きます 美勘「サア／＼切戸を開け
 て此方へお這入り 乞食「御免下さい」と立起つた乞
 食が七梅、男山などと云ふ酒の銘の付いた筵を引張
 つてズル／＼庭前へ這入つて来た、おさよと云ふ女
 中が「何ですオマアお前さん方は、何は酔つて仕舞
 つたつて乞食なんぞを呼んでお酒を飲むなんて……
 お前も亦さうぢやアないかイケ太々敷い、なんば旦那

那方が来いと仰しやつたつて、臭い物身知らずとは
 お前のことだ、出ておいで、毎日御座所へ来て殘物
 を貰つて居れば澤山ぢやないか、彼方へおいで 近勘
 「オイ／＼餘計なことを言ひなさんな、お前に勘定
 でも出さしやアめい、長崎にもア、でもねい斯
 うでもねいと言ふ奴は幾らもあるが乞食を呼んで酒
 を飲合ふなんて通人はおさよ外にはありアしめい
 よ「お前さん方のやうな狂人が何處にあるもんです
 か、呆返つたもんだ」と苦い顔をして居る、其中に
 乞食は庭前へ入つて来た 美勘「此方へ御上んなせい
 つて言ふんだが、御同席はお互いにそこん所はいか
 ねいから、マアお前は其處へ陣取つたが宜い、よし
 か、時に乞食どつさり飲つて貰ひたいがどの位飲め
 る、餘り泥酔つて戸外へゴロリと寝るなんてエこと
 を言ふが、お前達は年中往來が住宅だに依つて何處

へ朝がつて寝たつて大事ない、打倒れて寝る程どつ
 さり飲んで貰ひたいがどの位飲めるエ 乞食「澤山は
 戴かせぬ、此面桶で……左様でございますナ水を
 入れまして量つて見ますと四合位入ります 美勘「ア
 、さうだらう 乞食「是で左様でございますナ澤山は
 戴かせぬが三四十杯も戴いたら少しは好い心持に
 なりませうかナ 美勘「何だつて其の面桶で三四十杯
 も飲めば少しは……嚇しちやア可ねい、大變な飲拔
 だ、それぢやアマア大概な財産は飲潰して仕舞ふ、
 併し掛聲が面白い 近勘「よし／＼サア面桶を出しな
 、吝嗇なことを言ふやうだが米の水だから大地へこ
 ぼさねいやうに、サア注いで上げるから 乞食「有難
 う存じます、ハイ／＼御手許は御面倒さまながら……
 …… 近勘「そんなことを言つちやア可ねい、そんなこ
 とは抜きにしてナ黙つて出しな 乞食「有難う存じま

「座敷から酒を注ぐ、而桶へなみく」と受け「乞食す」
 「オット、ございませう有難うございませう」つと
 と前面へ泡を吹付け、唇へ付けますとキューツと咽
 喉を鳴らして左も右もさうに飲んで「ア、どうも有
 難う存じます、結構なお酒を久悃で戴きました、エ
 、旦那様、佐藤兄弟と云ふ口合を考へました 近勘
 何だ佐藤兄弟とは 乞食「佐藤兄弟とは繼信忠信ツて
 云ふんでせう 近勘「さうさ兄を三郎繼信、弟は四郎
 忠信ツて云ふんだ 乞食「私が考へた、先方つぎの
 ひ此方たのむツてんで佐藤兄弟とはどうです 甲嘉
 「ア、成程つぎのむにたのむか、コリやア面白い
 、サア〜マアせん〜飲んでお呉れ、蓋を出しな
 蓋を……」而桶の蓋を出さして着を取つてやる 乞食
 「有難う存じます」強付る酒をガブ〜遠慮もなく
 飲んだ非人好い心持に酔つて「エ、旦那様方が三椀

で御酒を召飲りまして歌をお詠みになりましたが、
 私は而桶で酒を飲んで乞食は乞食だけの歌を考へま
 した 美勘「感心だ何と云ふんだ 乞食「斯う云ふんで
 こもの上に寝ながら月を眺むれば
 ふしみの院と人と言ふらん
 どうでございませう 近勘「エ、どうも感心だ、
 エー甲州屋、朝飯前にちつと乞食の所へ行つて稽古
 をして貰つたら宜からう、お前がさつさやつたいひ
 わん、いひわんよりは餘程此の乞食の方が宜いせ 甲
 嘉「笹棒め誰が乞食に物を教はる奴があるもんか、
 餘計なことを言ひなさんな 近勘「さうでねい、サア
 く乞食ドン〜やんな 乞食「有難う存じます」ガ
 ブ〜飲む中に大層非人も酔つた 近勘「何だか二三
 日天氣が湿潤して居るから厭な臭氣がして可ねい、
 香でも焚いて」と香盤に銘所持いたして居る香を

取出してお互ひに酒を飲みながらお互に嗅合つて居
 りますると、乞食が之を見て「どうも旦那様結構な
 御樂しみて、私にも一つ嗅かして頂きどう存じます
 美勘「乞食香を嗅くかエ、是は恐入つたなナカ〜
 普通の乞食ぢやアねい……さア嗅いて御覽 乞食「有
 難う存じます」と香盤を取寄せまして一通り則の通
 り香を嗅ひて 乞食「旦那様結構な御酒を戴いて何と
 も御禮の申さうやうもありませぬ、何にも御禮の致
 し方がございませぬから私が嗜みの香を焚いて旦那
 様方へ御禮に致します 近勘「戲談言つちやアいかね
 い、大分どうも出来なすつた、御酒が廻つたやうな
 工合だが嗜みの香を焚きますなんて、千手觀音様で
 も追放さうツてんだらう 美勘「戲談言つちやアいか
 ねい、折角飲んだ美味い酒を無にしちまう、マアマ
 ア止さつせい 乞食「ナカ〜左様なことは致しませ

「香盤を取寄せた右の非人、ポロ〜致します着
 物の間へ手を突込んだ、何をやるか此の食がと三人
 が苦い顔をして居ると纏て香盤へ何か入れた様子、
 スルと今まで三人の樂種問屋の焚いた香は忽ち馨が
 消へて仕舞ひ、非人の焚いた香に於ては實に佳い香
 馨、穢郁として鼻を貫くやう、三人の生藥屋が「ア
 、佳い香だ……ア、どうも……ア、どうも堪らない
 ……ア、佳い香だ……こりやアどうも……」と鼻を
 ビク〜やつて居る中に忽ち非人は何處かへ見な
 くなつた 美勘「オイ乞食……オイ〜乞食……どこ
 へ行つちやつたら居なくなつちやつた 近勘「美濃
 屋 美勘「何だい 近勘「アノ乞食は普通の乞食ぢやア
 ないせ、配眼から口の利さやうから尋常の者ぢやア
 ねい、アノ香はお前何とさいたい 美勘「何とさいた
 ツて是か南都東大寺の一木三切分の蘭麝待と云ふ名

香だらう 近勘「それに違ひない、一文二文の袖乞非
 人が蘭府待の名香を持つて居る筈はねユ 甲斐此者
 ぢやアねいかい、先頃御觸がわつた公方様が御上洛
 の時に函根の山中で鉄砲を撃つたツて 美勘「さうさ
 う、頼だ奴を引張込んで酒を飲ました、こんなこと
 を等閑つて後で連累にあつちやアならない、早速御
 訴へ申したがい宜い」と茲で三人の者が長崎御町奉行
 神尾備前守へ訴出る、ソレツと云ふので八方へ御手
 當になると、梅の天神林に泥のやうに泥酔つてゲウ
 〱と寝て居りましたるのが右の非人、ソレ踏込め
 と云ふのでぱう〱ぱう〱と飛込んで「御用だ
 神妙にしるッ」と飛蒐つた時に、心得たりと飛起き
 た右の非人、近寄る捕方を東西へ手玉に取つて七八
 人投付けました、何にしるさうも非常に酔つて足
 許に踏こたへがないから、踏跟く所を忽ち飛蒐つて

どう〱其處へ召捕りました、懷中を段々吟味をす
 ると推朱牡丹形の香包に蘭府待の名香が這入つて居
 り、五郎入道正宗の短刀が一振りございするから
 直に奉行所へ引立つた、神尾備前守其の處へ御立出
 になり「コレ其方蘭府待の名香並に正宗の短刀を所
 持いたして居るは慶元の殘黨、徳川の天下に怨恨の
 ある奴に違ひない、速かに白状いたしまするやう、
 若し陳と偽はるに於ては骨を粉に砕いても言はせぬ
 ければ相成らぬ、苦痛を致さぬ中に早く白状致せ」
 眼を開いた右の非人が「歌れッ、行きや歸りのお且
 那樣、一文載かして下さいまし、お温いお茶でもお
 熱いお湯でも載かして下さいましと人の袖褌に縋り
 、其日を送る乞食非人が蘭府待の名香、正宗の短刀
 を所持いたして居るは言はずと知れたる豊臣の殘黨
 大阪の討漏されに違ひない、汝等如き小役人の訊問

を受けて阿容々々と白状するやうな拙者ならず、承
 まはる江戸の老中松平伊豆守信綱は天晴れ器量優れ
 たる者と承知致す、早々江戸表へ差立て、伊豆が
 訊を受けて我名前は言つて宜くんば其時に上聞かせ
 る、備前頭が高い」と大音に怒鳴りつける、何方
 が調べるんだか譯か分らないから神尾備前守臍を潰
 して直ぐ之を江戸表へ差立てました、將軍家へ言上
 いたしましたるから直く御評定所御庭前へ御呼出し
 となる、三代の將軍家は上段に在せられ徳川家の御
 役人堂々と御着座になつた、御係は寛永著名の器量
 人松平伊豆守智恵信綱と仰せられる 伊豆「コリヤ非
 人面を上げイ」言ふと彼の非人頭を上げ、伊豆様の
 御顔をつく〱と打眺め「何と申す、非人面を上げ
 よとは其意を得ぬ一言、何で身共を非人呼はりす
 る、正宗の短刀並に蘭府待の名香を所持する拙者、

なせ武士の法を以て取調べない、非人呼はりは奇怪
 至極 伊豆「歌れ、汝非人と言はれるを殘念に心得る
 ならば何故武士の姿を致して居つて召捕にならぬ、
 卑怯未練にも名前を變へ姿をやつし非人となつて召
 捕に相成つた、かるが故に非人と申すは敢て差支
 ……乞食 一言ふナ伊豆、蟹は甲に似て穴を掘る、汝如
 き曲者には大丈夫の心中はよもや相分るまい、唐土
 晋の豫讓は智伯の仇を討たんがために炭を呑んで咽
 喉をからし、身に漆して姿を變へ非人となつて趙襄
 子の衣を裂いた倒もある、我が日本に於ても大伴宿
 禰金持は非人となつて仇敵の眞鳥を刺す、天下の豪
 傑も運拙なき時は縋絨の耻辱を受け、或は首を桑木
 に曝すは珍らしからぬこと、汝は拙者を非人々々と
 申すが事態武士の本意を知らざる曲者、其方等の調
 を受けて白状いたす身共ではない、速かに其席を立

てツ」と大音揚げて伊豆様を叱り付けた、伊豆守殿
 怒つたの怒らないの、名前が伊豆様だから黄くなつ
 て怒つた……そんなことはあるまいが以ての外の御
 腹立で扇を笏に一膝前へ席を御進みなされると傍ら
 から大久保彦左衛門が「暫く……伊豆殿暫くお扣へ
 なさい」と庭下駄を穿いて立出でまして「コレ〜
 汝が只今の議論將軍家殊の外御感わらせられ之を下
 される、有難く頂戴を致して宜からう」振返つて非
 人が見ると三葉葵の御紋の付いた御召小袖の片袖を
 扇に載せまして其處へ持つて出ました、莞爾打笑つ
 た彼の非人が「さては拙者を晋の豫讓に御喩へに相
 成つたは誠に千萬忝けない、這は有難く頂戴を致す
 志す所如何で豫讓に劣るべき、折角の賜物忝けな
 い」と右の袖を口に啜へり〜と喰裂いて膝
 へ當がひまして砂利の中へメリ〜と之を押込んで

大口開いて彼の非人がワツハツハツ、と愉快氣
 に打笑ひ「將軍家御武徳盛にして良臣左右にわつて
 輔佐致せば徳川の天下は益々泰平、吾々如き者が手
 をつけやうとするは思ひも奇らぬこと、今日は最早
 心に掛ることがないから白状を致すが、拙者に於て
 は江州佐和山の城主石田治部少輔三成の遺子、幼名
 三丸と云つて佐竹左中將義宣の家老車丹波守の養子
 となつて後に丹波と改名いたしたものの、慶長五年關
 ヶ原の戦に實父三成は家康のため京都に於て首
 を刎ねられ、養父車丹波守は徳川家のためは是亦處
 刑に相成り、實父養父を仇敵一太刀なりと將軍を怨
 まんものをと暇を窺ふ折柄、上洛のこと時こそ來
 たれと函根の山中、砲發は致せども筒先狂ひ遂に將
 軍家は何事も無い、かるが故に西國に走つて同志を
 募り義兵を擧げ、一度は徳川の天下を覆へさんと心

掛けて居つたる所、一杯の酒に熟醉をして斯る姿に
 相成つたるは我が宿運の拙き所、今更千萬悔むも是
 非に及ばぬ、速かに御法通り御處刑を願はしう存す
 る」と滔々と申述べました時に満座の人々アツとば
 かりに感心をした、大阪夏冬の御陣戰場往來の時に
 金の火車の指物をして歩いたと云ふ、是が著名の車
 丹波守かど銘々心を付けて見る、此時に家光公御擲
 を込つて端近に御立出なされ「かね〜聞及んだる
 佐竹の家來車丹波秀虎とは其方であつたるか、ア、
 忠なるかな丹波、義なるかな秀虎、汝を其儘助けて
 余が手許に召使ひたいなれども、左様いたしては天
 下の法が相立たぬから残念ながら切腹を申付けるか
 ら左様心得ろ」丹波承はつて莞爾打笑ひまして「
 將軍家へ筒口を向けたる拙者、縛首仰付けられべき
 所、武士の法を以て死を賜はるは有難い仕合せ、快

よく最後いたすでござる」と殊の外に悦んだ車丹波
 守、茲で愈々切腹と云ふ時に訴出でましたのが、大
 塚と云ふ所に居りまする非人頭善七と云ふ者、女
 の子の手を曳き一人の男の子を脊負つて参りまして
 「どうか車丹波守に一目息あそ内に會はして戴きた
 いと願出でた、何だと云ふと車丹波守が非人になつ
 た時に大塚の非人頭善七なる者方へ参つて足を留め
 て居る中に、右善七と云ふ者の娘といふか好い仲に
 なつて女の子が一人男の子が一人、二人の子供を設
 けまして、其後この丹波守は大塚の非人小屋を飛出
 して行方知れず、函根山に鉄砲を撃ち西國に行き今
 度召捕となつて江戸に差立になつたと云ふことを聞
 いて、此大塚の善七と云ふ爺さん孫を脊負ひ孫の手
 を取つて、どうか婿の車丹波守に會いたいと云つて
 願出す、茲で上のお慈悲で兩人の子供に今生の暇を